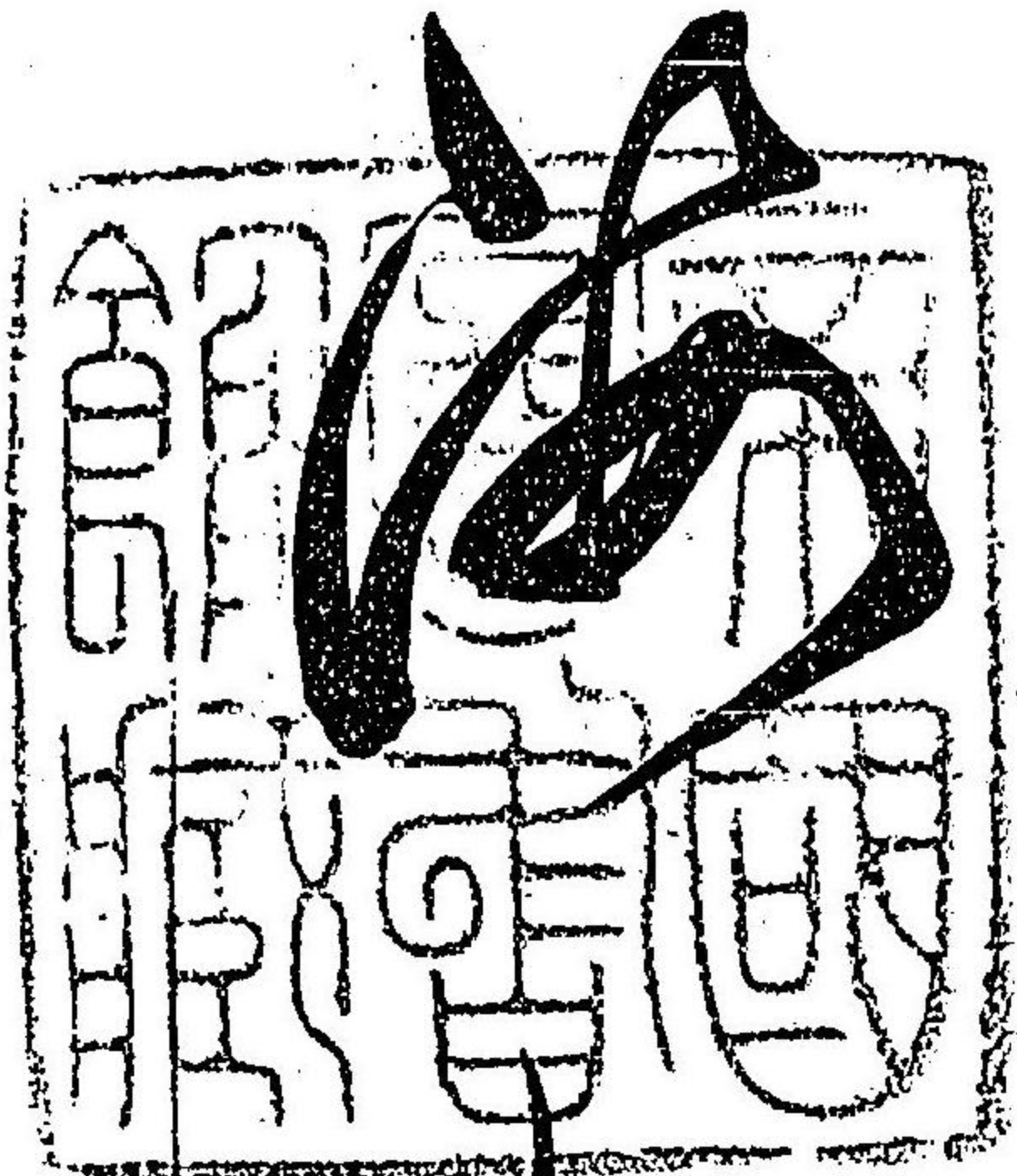


97-230

昭雅三十五卷首



海
光
船

海國海軍協會

明治
37 10 22
内交

「海と船」はしがき

は し が き

「海と船」これは極めて大なる問題で、若し詳しく説こゝとすれば、尠くとも大版で厚さの二三寸もあるものを書かなければならぬ、其の様な大問題を僅々數十頁に満たざる此の小冊子に書こゝとするのであるから、勢ひ迎も詳しい事は述べられぬ、書き度い事は多くて紙数は少なく、たゞ海事に關する事項の大體を述べて海事思想の一斑を多數の同胞諸君に吹込み度いのが差懸つての本會の熱望である。

此の小さな體の癖に大きな望を懷いて居る「海と船」の編纂に當りましたは、有力なる参考書の所説を始め、本會委員及び其の他各専門家諸氏の有益なる談話又は高教等、好き材料には少し

も苦しみませんでした。が、遺憾なる事には編者の鈍き頭と拙き筆との爲にかゝる粗末なる冊子となりて、今や多くの讀者に見えんとするに望みて、慚愧の念自ら禁ずる能はずとの一言を叙して序文に代へて置きます。

明治三十七年十月日

編者識す

目次

緒言

第一章 平時の海

第二章 戦時の海

第三章 義勇艦隊

名家論集

- 其一 下村房次郎氏
- 其二 志賀重昂氏
- 其三 湯河元臣氏
- 其四 海軍中佐子爵小笠原長生氏
- 其五 海軍少佐田中耕太郎氏

緒言……海

海の事を能く知らぬ人は、海はたゞ恐ろしきものとはかり考へて居る。『板子一枚下は地獄、ちこわいこと』とは海事に疎き人の能く口癖に云ふ所である。海は果して其の様な恐ろしいものであるだらうか。地球の面積の三分之二の廣さを有せる此の海なるものは陸上に棲息する我々人類に、鹽と魚を授けて呉れる外には先づ餘り用の無いものであるであらうか……全躰海と云ふものは、抑もドー云ふ効用があるものであるか。此の事から先づ第一番に研究して見よ。てはありませぬか。

海の効用には自然的のと政事的のとの二た色ある。自然的と云ふのは、海が天然自然に我々人類の生息に關して與へる効用で、政治的と云ふのは、海が此の世界に國を成せる國民の政治的生存上に及ぼして來る影響の事です。

第一に海は造化の無盡藏である。吾人が一日も無くて協はざる食鹽を始め、酒の肴、飯の菜、着て居る毛革、使つて居る器物。指輪、頸飾、髮道具の末に至る迄、海なる寶庫に充ち満ちたる寶物は殆んど數ふるに遑なき程である。更に眼を轉じて宇宙

に於ける自然界大顯象の二つなる地球と海との大關係を觀て見ると、地文地理書に詳敷説いてある通に大陸に雨を降らして生物を養ふのも海の力である。地球表面の溫度を調節して人類の生息に便ならしむるのも亦此の海の力である。海なくば人は此の世に生息する事は出来ない。海あればこそ吾人は、必要なる多くの衣食に事欠かず嗜好物にも飽き又裝飾品をも弄ぶを得るのである。海の効用大なること夫れ此の如しだ。

夫れから海の第二の効用は海なるものが至大至便なる世界の運輸交通の機關であることである。交通の便否が人文の進歩殖産の發達に至大至重の關係あることは今更茲に申述べる迄もない事で、町村に里道あり、郡市に郡道市道あり、其の他縣道國道の築造馬車電車鐵道の布設の爲に吾人が莫大の租税を納め又は資本を出し合つて毫も其の多きを厭はざるは、何の爲でもないたゞ交通の便を得たい爲である。而して海なる大道は横縦地球の三分之二を蔽ひ、東西南北通ぜざる所なき平々坦々たる大道であつて、自然が吾人の爲めに遠く數千萬年の昔に無代價で造つて置いて呉れ、今後とても、修繕費も何も要らずに幾千萬年の後迄も無代價で使用させて呉れる世界の公道である。

さて此の世界の公道「海」なるものは古來幾多の人々を底の藻屑とした事もある、又幾多の船舶を水底深く引込んだこともある。こんな事を見聞きして氣の弱い人達が板子一枚など、弱音を吹くのであるけれども、これらは誠に些々たる出來事で、別に氣にかけるにも及ばない。まことに海の恐ろしい事と云つたら仲々それ所の騒ぎではない。たゞに人を溺らし船を覆へすと云ふが如きに止まらず、試に青史を繕いて御覽なさい、時の古今と洋の東西とを問はず一國一家の盛衰治亂海と共に興り海と共に亡びざりしもの殆んど無しと謂つて差支ないではありませんか、即ち海なる大道に草を生やさぬものは榮え、草を生やしたものは衰へ、海を愛する民は興り之を恐るゝものは亡ぶること今も昔も一樣なること尙ほ海の潮が日毎に時を定めて満ちては干、干ては満ちて、千秋萬古滄はることなきと同斷である。嗚呼恐るべきは海の力、以て國を起すべく以て國を倒すべし。海が國民の政治的關係に至大の關係ありと申したのは取りも直さず此の事です。

海と文明の關係は極めて趣味ある好問題なれど本書の如き小冊子では緩々其の面白味を味つて居る暇がない。去れど此の事は如何にも好問題であるのと且つは又書名の「海と船」と云ふのに對してもドーしても何とか一言せずには居られ

ないので、取急ぎ、かいつまんでざつと書き誌るして見ますれば。

一、海は世界中の人の思想や土地の産物を、こね雜せて平等に之を世界各国に分配する摺鉢の如きものである。

二、此の摺鉢を汽船の「スクルー」で掻き廻せばまはすほど、世界が開けて益々文明の恩澤に浴する地方が廣くなる。

三、して此の摺鉢は形も大きさも萬古かはらぬ筈なれど、不異議な事には造船術即ち人間の縮地の術と云ふ魔法の進歩につれて實際年々小さく狭くなつて行く。

其の實例を舉げて見ると

(1) 何れの國でも船着きの所が一番早く又能く開けて、珍らしき他國の産物も集まり、又人の智識も他の船便なき土地よりも遙に進んで居る、單に我が國だけ考へて見ても昔も今も此の通りである。世界の文明は無形の人智でも又物質的のものでも陸路十里に擴がるよりか海路千里に擴がる方が遙に早いものである。若し此海なるものが無かつたならば世界が今日迄に迫も今の度合の十の一も開けなかつた事だろ。

(2) 又古代から世界の開け來りたる跡を考へると、船の行き交ふ所謂航路が廣くなり、且つ其の航路を帆走汽行する船舶の數が増して來る程其の航路に接したる地方が段々と文明に進んで來た事が能く分る。我が國の如きも其の例に洩れず「ペルリ」の艦隊が其の暗車の餘勢で浦賀港の海底の土砂を引きかさ廻した其の時から今日の新らしき文物制度は始まつたのである。して又昔も今もですが、自分の國の船舶が一番餘計に世界各地の海水を掻き廻はして歩く者が世界の富を支配して最強最富の國民と世に唱へられるので吾人の兄分の英國國民が即ち今日の所での大將株である。

(3) 次に人間と云ふものは智力の限りなきものであつてこれには人間を造つた流石の造物者も舌を巻いて感歎して居ると云ふ一寸面白い話があるからサツト書き附けて見ますと、始め造物者が此の地球を拵へて人間の種を蒔付けて置いた時に、地球の表面を陸と海とに區分けをし、わざと大陸と島嶼を離れ／＼に蒔き散らし、又特更に意地悪くスエズやパナマの様な所を拵へて、さて是一つ人間を困らせてやるゝと天の一方にあぐらをかいて、咬へ煙管で見て御座つた、(何の事はない丁度小供が蟻の巢を突衝き散らして見て居る様なもので)

すると、始めの内は人間め中々海を恐れて寄付かなかつたが其の内に豪膽なる奴が出て来て筏を拵へ入海なとへ乗り出して釣をしたり網を打つたりし始めた、「妙々」と造物者が席を乗り出て見て御座る内に、今度は向ふの方からは獨木船此方からは柳行李然たるものなどを持ち出し、棹を差したり櫂で漕いだり、ぞろ／＼と濱邊から乗り出して強い奴は遙かの沖合へでも離れた島々へでもドシ／＼と押出すと云ふ勢になつた。

「是れは生意氣だ、チト板面をしてやれ」と意地の悪い造物者が風を呼び雨を降らして山の如き大波を立てさせて一と暴れ暴れさせて、扱ドーナツタかと視て見ると、可愛想に今迄働いて居た數多の此の元始時代の船乗り等は憐れや底の藻屑と消え骨破微塵に打ち壊されて波間に漂ふ板切れのみに憐れのかたみを殘したり。

左れど人間少しも痺まず船を造る事も益々巧者になりて櫓かいの外に帆をも用ひ數多の荷物や乗客を乗せて風浪を犯して天涯萬里或は通商貿易に或は遠征探險に入重の汐路を押し渡り磁石の針の指すまゝに北より南西又東甲地に上弦の新月を迎へ乙港に下弦の殘月を送り速くて數月、長さは數星霜の長さ海路を

迎り来て故國の埠頭に無事安着の祝砲を放つものさへ出て來る様になつて來た。

見れば此等の船乗の艱難辛苦の状態は視るも氣の毒千萬で高緯度の寒風赤道の炎威は云はずもがな、或は海賊に襲はれて赤き浪もて甲板を洗ひ、或は骨身の腐るてふ恐ろしき海上病に犯されて滿船無告の鬼となり、幸にして此等の災厄を免るとも又一方には風伯の怒海若の憎しみを受くる等其の艱難辛苦の状態筆紙の能く盡すへき所ではなす。

造物者はしばし餘念なく海上を見詰めて居たが不圖氣が着いて陸上を見ると驚くまい事か各國住民の生活の情況見變ふまでに一變して、船の行き交ふ各國の海邊には夜も燈火の消えない大都會か雨後の茸の如くに續々と出來て住民の日増に富み榮え行くことが手に執る様に能く分る、覺えず世の中は三日見ぬ間に櫻かなと人間の云ひそゝな歎聲を發して御座るとドコヤラ頻りと騒がしい物音がするので、さつと見渡すところは如何に何時の間にか亞細亞と亞弗利加の間の大切な關所が切り破られて今第一番の船が地中海から江海へ向けて新道開きの一番乗りをする所である。

「連も叶はない、人間と云ふ奴は己れにも真似の出来ぬ大智慧者だ、ツイ此間迄は松や楓で船を造り板子一枚下は地獄など、弱音を吹いて居た奴が今では鐵や鋼鐵で山の様な船を造り蒸汽とやらで之を動かした涯萬里とやら云ふて居た此の五大洋の蒼海原も山中の湖水同様に僅か數日の内に往復するさへあるに、廻り道がもどかして此マサカと安心して居たスエズさへこれ此の通りブチ抜いて仕舞つた以上は、何れ遠からず歐洲より西に向つて亞細亞への接路が開鑿されて東はスエズ西バチマ天然の地峽は人工の海峡世界の双絶神人の力を合せた好紀念物と宇宙内の一名物になるに相違ない。さても人間は恐ろしい奴、乃公も油断はならぬワイ。」 * * * * *

以上述べた様に此の世の中の開けて行くのは全く海の力に依るので世界の智慧と財寶とを秘し置く藏の鍵は船の舵だと云つても決して過當の言ではない。地球に信憑すべき歴史ありてより約三千年、此の間に我が地球は造物者さへ腰を抜かした程の文明に達したが、廣い地球の表面には二十世紀の今日迄未だに文明の風に當らず、山靜にして太古に似、日長ふして小年の如き土地人民も尠くない。彼の亞細亞亞弗利加南米等の大陸の中心近き幾萬方里幾億萬の土地人民は即ち今でも尙

ほ此の様な境遇に在りて曾て何等進歩の跡のないのは、海の力を假りる事が出来なからである、鹽風に吹かれる事がない爲である、古の陸の一里は今でも陸の一里である、昔の海の千里は今海の一里にしか當らぬ、文明波及の遲速之を觀ても明白である、若し土が水よりも便なるものであるならば今の亞米利加などが發見されざる其の前に此の度英國に懷き込まれた西藏あたりの高原こそ疾く既に世界文明の中心になつて居なければならぬ筈である。

之を我が國の歴史に徴しても我が國の今日ある抑その根源は我が御先祖たる天孫が一族を召し具せられ海を渡りて此の土に降臨させ給ひしに始まりて神武の東征降りては北の方は「アイヌ」征伐に皆此海の力を以て我が邦土を一統し給へるのである。古代三韓を屬邦とし其の工人を來朝せしめ、其の財物を貢獻せしめ、外國威を海外に輝かし内蠶桑漁獵の富を増したるも亦此の海の力である、降つて隋唐の代に至り絶えず東亞の文明と觸接し學術技藝文物制度彼れの長を取りて我が國の文化を助けたるも又一に此の海の力である、往時世界の文明國は西に希臘羅馬あり東に支那の本土あり緬甸暹羅西藏蒙古韃靼滿洲朝鮮等西南より延びて東北に涉り境を東亞文明の中心に接して居た國々數多きにも拘はらず、所謂中國文明の粹を取りて自國

の文化を助けたものは陸續きの此等の諸國にあらずして、却て所謂波濤萬里の我が國なりしが如きも偶々以て水の土よりも遙かに文明傳播の力大なることを證するに足る事である。當時隋唐との交通は今の樂しく愉快なる航海と事かはり、今日の漁船の少し氣の利きたる位ゐるの脆弱なる小船に蓆帆を掲げ櫓を押し日々に辛ふじて數十里を進み得たるに過ぎざれば一度び海外派遣の朝命を受けたる者は親戚知己と永訣し天涯萬里不歸の客となるの覺悟で難波の浦を見返り、船出したとか云ふ話であつて、出發を遅延して譴責せられたものや正副使互に我が乗る船を争ふて罰せられた者もあつたと云ふ位である。故に派遣の朝命あるや、朝廷にても其の行を壯にせんとする思召にて出發に際して盛なる送別の御宴を開かせらるゝを常の例となし給ひ、桓武帝の御宇にも使臣を唐國に遣はさるゝとて、いと盛なる御宴を賜はり勿體なくも。

此の酒はさほにはあらず平かに。

かへりませといはひたる酒、

との御製をさへ御餞けさせ給へりと言ひ傳へられてあるではないか、我が今日の文明の土臺はまことに此等祖先の幾多の辛苦艱難の賜である。其の後豊臣大閣海を

知らざりし爲に其の雄圖を中道に廢し、我が十萬の將士をして異邦の鬼とならしむる勿れと無限の遺恨を呑んで其の目を瞑り、天下徳川氏の手に歸して四方志を得ざる豪傑等早くも眼を海外に注ぎ競ふて大船巨舶を造り勇敢決死の壯士を乗せて萬里遠征の途に上り東亞南洋久しからずして八幡船の旗風になびかぬ國はあるまいと云ふ盛んな勢になりかゝつた際に徳川幕府自家の政策の爲に我々祖先の此の雄心も苛法嚴刑の爲に押しつけられ夫より太平三百年海國の民でありながら鹽風の吹かぬ大陸の山奥の民同様に乘らぬさきから船に酔ふ様な恐水病者となり果て、地下の祖先に叱り飛ばされる様に相成つたるは實に千古の遺憾である。

夫れ熟々惟みるに我が祖天孫海に依て此の土を肇め海に依て之を拓き海に依つて之を治め給へり列聖相襲ぎ海を以て國の生命となし給ひ歴代相繼ぎ高僧學士を海外に派して廣く智識を宇内に求め遠く工人を國內に聘して田園山海の國富を拓かしめ給ひ船舶の製造港灣の修築は實に歴代朝政の主要なる政策であつたのである、武門權を争ひ天下漸く亂るゝに及び我が國の海政漸く衰へ振はざる事七世紀、物窮りて此に通じ、安政年間浦賀灣頭黒船の警を傳ふるに及び、人は期せずして始めて「海」と喚び出した、柳營倒れて天日再び浪らゝに皇朝の政策は此に再び開始せられ日章の

船旗新に東亞の海を照らし旭日の艦旗其の間に點綴し日本海國の古木久しぶりにて再び其の新芽をふき出した。皇上登極三十年旭旗の向ふ所旅順陥り威海降り砲煙收まりて未だ幾もなく東亞西歐北米南濠の港門期を定めて日章商船の來往するあるを見るに至つた、後十年にして今回の役あり、國運隆々實に旭の如しと謂つべしだ、海を以て肇められ海を以て治められ海を以て國の命とし今後益々海に依て宇内列強の主位を占めんとする我が帝國の臣民は海を忘れ或は恐れ又は其の何たるを知らずして争てか我は祖先の子孫なりと誇稱することが出來よいか。

思はず横道の慷慨談になりましたが、さて海と文明との關係は此の位にして置きまして、次に海の法律上の性質を少しく述べて置きましょ、此の事も詳しく説くと中々込み入つて來ますから詳細は國際法の書物を讀んで見て戴くことにして茲には極くザツトした大要丈けにして置きます。

海は世界の公道なり。

海は天下の大道世界の公道で、何人の所有にも屬せず、又何れの國の領分でもない、たゞ各國の領分として認められて居るのは港灣とか内海とか又は防備ある狭い海峡

等で其の他は海岸より沖の方僅か三「マイル」以内丈けが其の領分と定められてある、此の三「マイル」と云ふのは海岸から大砲の彈丸が届く丈けの距離と云ふ義なのだが、これは大砲の發達しない時代に極まつた定めて、今日では大砲が非常に進歩して、現に先頃英國で拵へて試験をした大砲などは、高く打てば我國の富士山の上に加賀の白山を乗せた程の高さに届き、之を英國の海岸へ据え付ければ廣さ十九「マイル」もある英佛海峡を飛び越して佛蘭西の領分が打てると云ふ程な強勢なものであるから、何れ近い内に列國會議か何かで此の三「マイル」と云ふ舊來の定めが變更される事である。既に先年佛國で開かれた萬國々際法學者の會議で各國の領海を平時に在りては海岸より六「マイル」以内とするを適當とすと決議をした事がある。此の領海の區域内は其國の法權が行はれて居るから外國船が此の領海内へ這入込ば其の領國の色々の掟を守らなければならぬは無論であつて勝手に商賣をしたり漁獵をしたりする事は出來ない、タトへ交戦中の軍艦でも中立國の領海内では戰闘する事は許されて居らぬ、けれども此の三「マイル」の境界線の外では好き自由な事が出來る、軍艦ならば誰にも斷らずに艦砲射撃水雷發射の演習しても差支なく、漁船ならば魚でも海獸でも勝手に捕へて宜しいのである、たゞ大海は世界の公道であるか

ら如何なる場合に於ても他の船舶通航の妨害となる様な事をする事は出来ないのは無論の事であつて、現に此の度の事件の如くに兩國交戦中の場合と雖も公海即ち世界船舶の通路に危険なる水雷を沈設し又は放流する様な事は無論不法の行爲であつて曩に、今は我が敵國たる露國の海軍が旅順港口を距る數十「マイル」の黄海の沖合に水雷を仕掛けて天下の物議を招きたるが如きは不法の最も甚しきもので露國海軍の名の爲に大に惜むべき所である。

序に此に一言して置き度い事がある。即ち軍艦は外國の領海内に在る時と雖も本國領土の一部としてある。商船は之に反して外洋即ち公海に在る時のみ本國領土の一部と做してある。隨て此の定めに基づきて國際法上色々法律上の關係があるけれども茲には必要でないから總て略してたゞ著しい一例だけ述べて見ると、此に我が横濱に外國軍艦と外國商船が碇泊して居るとして、さて其の船中で殺人事件が起つたとすると、軍艦内の出來事は我が横濱での出來事てなく詰り其の軍艦の本國での出來事と做されるから我が警察も裁判所も決して之に干渉する事は出來ないか、若し其の人殺しが商船内で起つた場合には我が警察官司法官は船内に臨檢をして夫々の取り調べをなし犯人を横濱地方裁判所に拘留して我が國の法律に據り處分すること

が出来る。とマコー云つた様な譯になる。詳敷事は法律書に依りて此の面白味ある問題を研究して戴きたらう。

上來述べ來りたる如く海は文明の媒であつて國家の盛衰民衆の貧富一に此の海を利用すると否らざるに繫つて居る、海は又世界の公道であつて何程使つても破損もしない、之を使用するに金も要らぬ又之を使ふのに何人の許を受けるにも及ばない、云はゞ使ひ徳用ひ徳である。能く之を用ふる者は富み且つ強く、恐れて之に近づかざるものや又は不幸にして領海なき者は弱くして且つ貧しく民愚にして文化に浴する事が出來ぬ、今回の事件の如きも畢竟は海が欲しいイヤやらぬと云ふ所から起つたのである、然らば此の海を用ふると云ふには國民は果して如何の決心と準備とを以てかゝらなければならぬか、平時之を利用して國を富ますの策は如何、事あるとき此の海上の權力を握りて敵國の死命を制するの計は如何、これより章を追ふて其の大要を申し述べましょ、ザバリくと優しき手を舉げて水際叩く磯の浪は「早く來りて吾が上に浮べ」と吾人を招いて居るではないか、ソヨくとして漣波吹き來る海風は「帆を掛けよ我れ汝と共に行かん」と吾人の出づるを促がしつゝあるでは

ありませんか。若し夫れ風伯海若と戯れ疾風暴雨天軸を摧き狂瀾怒濤地軸を傾け咆哮怒號測るべからざるの威力を弄して時に或は大膽不敵の海民をも怖れしむる事もあるが、是れたゞ海神一時の戯で「汝」と度び憤を發し人道の爲め平和の爲め、起て禮を汝に失ふものを膺懲せんとせば勢ひ疾くして節急なること將に我が今爲す所の如くなれ」との訓を吾人に垂るゝものと做て宜いてはありませんが、嗚呼海は愛すべきもの親しむべきもの又畏敬すべきものであつて忌むべく避くべきものではないか。日本の過去は海にありき日本の現在は海に在り、其の將來も海、海、海。

第一章 平時の海……商船

平時の海は平和の戦場で、能く此の戦に連戦連勝する國民こそ世界の富を支配して雄を天下に競ふことが出来るのである。此の世界の公道に浮べる船を一隻でも多く有てる國民が即ち此の戦の優者であつて、一國の貧富強弱は其の國民の有する船舶の隻數大小良否に依りて正しく之を判定することが出来る。

勤勉活潑なる國民が平時海上の平和戦に臨み營々として拮据勉勵して居る海務即ち海上の仕事とは果して如何なる種類のものであるかは海事に通ぜざる人々が先づ第一に知らんと欲する事である。

船は何の爲に拵へるものであるか、平和戦に用ふる船舶を分類すれば之を幾種に分つを得べきや、此より其の大要を申し述べよ。

海上の仕事は先づ大別して 漁獵 通商 測量 探險 電線沈設 と此の五つにすることが出来る。

漁獵と云ふ内には沿岸沿海の漁業より捕鯨獵獸の所謂遠洋漁業と名づるもの等一切を總稱するのであつて此の目的に使用する船舶は、小にしては釣船網船の所謂枚子

一枚より大は捕鯨船臘虎船等數百噸數千噸の帆船汽船に至る迄大小無數の種類がある。

通商とは通信交通運搬の三つを籠めた言葉で此の目的に用ひられる船舶を大別すれば飛脚船と荷物船の二種となる飛脚船とは主として旅客郵便物及び急速運搬を要する荷物を載せ快速力にて一定の航路を航海するもので、荷物船とは名の如く主として荷物を運搬するを目的とし、航路を定て居るものあり又之を定めずして隨時隨所に航海するものもある。航路定まれる荷物汽船は旁ら旅客をも載せるもあるが、帆前て走る荷物船は航路の一定して居るもの否らざるもの概して旅客は載せぬを一般の例と致して居る。蒸汽船と云ふ便利なものがあるのに今日尙ほ古風な帆船前船を用ゐるとは少しく不異議の様であるが、帆船前船は製造するにも航海するにも金がかからず經濟であるから容張る割に直段の易い荷物や急がぬ荷物などは多くは此の運賃の安い帆船前船にて運搬することになつて居る、現に米國より輸入される木材や石油は大概帆船前船に積み込んで南亞米利加の南端を廻りて我國に運搬されて居る。

測量と云ふのは海岸の測地、海底の測深、潮流の方向測定等で暗礁の所在を探り燈臺の位置を定めたりして。航海の安全を計り航路の標識を爲したり又は海底の深淺

地質を調査して一方學者の研究を資け一方は漁業者又は海底電線沈設者の便利を計る等の爲に是非やらなければならぬ事である。

次に探險とはカピテンクックの東洋探險コロンブスの亞米利加發見此等に比すれば云ふには足らぬが我が國で云へば小笠原島の發見等未知の大陸島嶼を探したり新に漁獵の好地區を見付けたりして世界の遺利を拾はせると云ふ様な事を云ふのであるが、流石に廣い地球面も大體は既に探險し盡されて今日では南北兩極の探險と云ふ様なものゝ外には最早ちいぎよゝなものも残つて居ない、左れど局部に涉りて海底の珠玉採取水族の繁殖保護等直接水産業者に利益を與ふるものでこれから大に探險せらるべきものも決して尠なからぬ事であるから單に學者の道樂としてのみでなく金儲けの仕事としても益々盛にやらなければならぬ事と考へる。

最後の海底電線沈設と云ふ事に就て一言致しますが、海底電線は即ち萬里を隔てて、居ながら音信を通ずる文明の利器であつて、若し此の利器が無かつたならば世界の商業は決して盛に行つて行くことは出來ない。管に商業のみならず、浮つかり戦争することも出來なくなつて仕舞ふ。

此の海底電線を平時に於ても戰時に於ても自國の自由にすることが出来るのと出來

ないのとは果して如何なる利害得失があるかと申すことなどは自から別問題で此には申述べませんが兎に角此の海底電線が世界の文明に必要欠くべからざるものであることは極めて明白なる事である。

近年無線電信が發明せられて、現に此の度の海戦にも盛に用ひられて居りますが、これが益々發達して終には或は海陸ともに總て無線電信で間に合ふ様にならぬとも申されませんが今日の所てはまだ仲々ソ一急には夫れ迄進みもしまいと考へる。ドノ道暫くは海底電線も全く不用になるなど云ふことはあるまいと思はれる。而して此の海底電線を沈設することは云ふ迄もなく海の仕事の内の重要なものであつて且つ又これ迄人間の爲し遂げたる事の内て最も能く成功したるものの一つである。

以上列述しました如く海の上で爲すべき事は人間が地球の上で爲すべき仕事の大部分しかも其の主要なるものゝみを占めて居て、普通海事に暗き人達が考へて居る様な單純なものではないのである。若し世に船と云ふものが無かつたらば、若し世に絶えて船乗る人がなかつたらば、如何でありましょいか世の有様は、諸君が明治の聖代に生れ文明の民と呼ばれ世界の最強兵と羨ましがられて世界の舞臺に振古比類

なき活劇中の人となつて居るのは抑も何人何物の御蔭であるか。

五大海務の其の内て通商漁獵の如き儲かる仕事は棄て、置いてもやる人がある、けれども測量探險の如きは元來直接營利を目的とすべきものでなく且つ其の費用も少なからぬ事であるから勢ひ之は政府事業又は篤志者の公益事業としてやるより外に道はない。故に海事に熱心なる歐米各國に於ては政府の限りある施設又は補助獎勵に満足せずに、私財を投じ又は義捐金を集めて盛に各種の探險事業をやつて居る。我が國にては沿岸近海の測量測深等は海軍省が専ら主となりて平時太平の時に二三の軍艦をして絶えず之に従事させて居る、燈臺建設浮標設置海底電線沈設等の仕事は遞信省の所管で同省には明治九新發田丸など、云ふ汽船があつて絶えず此の方面の仕事をして居る、政府が此等の公益事業をして居る外には民間絶えて海上探險を企てるものもなく東洋最高の學府たる我が帝國大學すら學術研究用の小帆船さへ有つて居ないのは實に残念至極と考へられる單に此等の公益事業が起らないのみでなく、太平洋に日本海に年々巨萬の漁利を外船に占められるのみか、北海道の沿岸領海さへ動もすれば無頼密獵者に横行されて居るなどは實に齒痒い事ではあるまいか。さて此の海軍のやつて居る測量の仕事は單に軍事上の目的のみでなく其の結果を公

にして普く世界一般航海者の利便を計つて居るのです。海軍水路部より發行せらるる海圖なるものは陸軍省參謀本部より發行せらるる陸地實測圖と同じく極めて精密なる圖面で海底の深淺から底土の性質潮流の方向速力より岩礁の位置沈没船の存在まで細大洩らさず之を記入し、始めて某地の沖合を航行する航船と雖も此の海圖一枚あれば安心して無事に航行することが出来る様になつて居る、殊に此の海圖の色は海岸に沿ひたる平面圖上欄には其の沖合より濱邊を見渡したる實景が恰も寫眞を見るが如くに描いてあつて、此の平面圖にある此の森は、アスコに見えるアノ森だな、此の港の入口は、アスコに見える此の岬の鼻をコー廻つた所だなど、圖面と實地とを一々對照して知らぬ港へも恰も生れ故郷の如くに、一見して遠方より其の這入口を見定める事が出来る様に出來て居る、して一度は海圖を發行せられたる後でも圖面の異動ある毎にドコ〜には新に燈臺が出來た、ドコ〜に新に暗礁を發見した、ドコ〜に沈んで居た船は何月何日引上げて仕舞つたなどと時を失せず水路部告示として官報にて之を公にし普く一般の舟乗りに告知することになつて居る、これは獨り我が國のみでなく世界の文明國は皆此の通り互に此等の異動を知らせ合ひ、通知があれば直に之を己れの國內に公示して萬國一般の便利を計つて居る。

る。

海の仕事の如何なるものか、又此の仕事の人世に切つても離れぬ密接の關係ある事は右にて荒増し了解せられたる事と信じ、然らば此の重要な海の仕事をするに就いては如何なる物が入用か如何なる人が欠くべからざるかを是より順次に述べましよう。

第一に入用なものは云はずと知れた船である、次に必要なる事は色々の目的に使ふ船を造る事と、サテ其の出來た船を差支なく安全に乗り廻はす準備を整へる事である。

板子一枚下は地獄とは、暴風に遭へば壊れるか沈むに極まつて居た脆い木造の破れ船ばかりの時代の云ひ傳へを其まゝ親から子に傳へ子から孫へと傳へ來て終に我が海國民の大部分の内に牢として抜くべからざる誤れる信念の一となつて仕舞つたのである、木が鐵になり鐵が鋼になり二重底となり壁仕切となり水雷二つ迄受けても沈まぬ佐渡丸の様になつて來た今日尙ほ板子一枚など、云ひたがる人あるは實に我が海國の耻辱である、今の船は風では覆らぬ波でも決して沈まない、苟くも數百若くは數千萬圓の高價の荷物を積込み數百數千の貴重なる人命を載せて外洋に向ふて

萬里の波濤を蹴ろ」と云ふ以上風や波でたやすく覆没する様な船は今日の進んだ學者の學問と練りに練つたる職工の技術と鍛へた鍛へたる鐵と鋼とて態と造ろ」としても拵へられる氣遣はない、たゞ今日とても時に過つて濃霧の爲に衝突座礁の災變に會し、巨萬の富と多數の生靈とを失ふ様な不幸を見る事が全く無いとは斷言し難いが是等は寧ろ稀有の災變で、若し此の稀有の災變を見て海恐るべしと云ふ事が出来れば、陸地は尙更危險多しと云はなければならなくなつて来る、暴風洪水落雷火災地震に噴火汽車の衝突其の外何々」と數々來れば年毎に此等の不慮の災變の爲に命を落し身を傷つける人が何千何萬あるか知れぬ、海難で死ぬ人と陸難で死ぬ人とを比較すれば海は却て陸よりも安全だと云はなければならぬ、俗に「舟乗り地震知らず」とさへ云つて居るのは陸上の安全ならざるを言ひ表して餘りありです。船の造り方が古代より段々進歩して來た事や又船も其の使ひ向きの如何に依りたとへば漁船は漁船川船は川船等と類に依つて造り方に色々ある事などの一通の事を聞き知るは舟乗りならぬ素人にも頗る趣味ある事であるけれども本書は今之を詳述するの餘白がない。たゞ次に去る頃始めて船に乗つて外國へ旅立つた人が出發前に海事通の其の友人と色々海上の事を問答した談話の筆記を摘記して乗らずに船の嫌ひ

な人達に航船の安全愉快にして海上生活の極めて面白味あることを知らしむる一助としたいと思ふ。

海事問答筆記

問 私は今度臍の尾切つて始めて船と云ふものに乗りますのですが、就いては色々船の事を御尋ね致し、ト御座います。御面倒恐入りますが一つ詳しく御話を願ひ度いもので……

先づ第一に伺ひますが、今度私が乗ります船は大分大きき一そいでして、たしか八千噸とやら聞きました。其の何噸と申す事からがトんと分りませぬのですが、八千噸と云ひますと昔ならば何石積位に當ります。しよ、か、それから先づ第一に御願ひ致します。

答 左様船の噸數と申すのは即ち其の積量を示す單位を申したので、一概にたゞ噸數とばかりでは分りませぬ、これには總噸數登簿噸數載貨噸數排水噸數とモ、一つ日本流の石數とが御座ります。此の内て排水噸數と云ふのは、重に軍艦の積量を計る時に用ゐる言葉で、水上に浮べる物の目方は其の物が水に沈んで居る容と同容積

の水の重さに同じだと云ふ所から一萬噸の排水量ある軍艦と云へば即ち其の重さが一萬噸即ち二千二百四十萬斤、貫にすると二百六十八萬八千貫で假に人間一人を十五貫とするとザット十八萬人寄せたのと同じ目方に當るのです、何と素晴らしい重さではありませんか、軍艦の噸數は目方で測るのですから噸數が多いからと云つて大きさが必ず大きいと限りません、一萬二千噸の戦艦よりも一萬噸の巡洋艦の方に却て長さも幅も大きいのがあるのは一方は厚く重い装甲を被て居り一方は夫れ程厚い鋼鐵板を張つてないから艦體は却て大きいと云ふ譯になるのです。

次に専ら商船の方で申します總噸數と云ふのは船内の容積全體を申すので英國や日本では、百立方呎を一噸としてあります、此の噸數を算出するには六ヶしい計算が必要ですが、大概は汽船ならば長さ、幅と深さを掛け(但し單位は米突)合せて出た數に・六五を掛け帆船ならば之に・七を掛ければ大約の概算は出來ます。

次に登簿噸數と申すのは今の總噸數の中から機關室だの船員室等の容積を引き去りたる實際客なり荷なりを積載する容積の事を申すので純噸數と云ふ方が早分りです何故登簿噸數と云ふかと申せば船税や港税などを賦課する時の標準として其の筋の帳簿に登録されてあると云ふ所から此く申すので概して總噸數の約六掛けに當つて

居ます即ち總噸數一萬噸の船ならば其の登簿噸數は約六千噸です。

次に載貨噸數とは實際貨物を船積みし得べき積量の事で輕量品では四十立方尺を一噸とし重量品は二百四十貫を一噸として居ます夫れから最後に船の石數と申すのは十立方尺を一石と立て、ありますから千石積の船は先づ百噸の船と申して宜いのです今度御乗りになる船は石數で云ふと先づ八萬石に該ります。

問 今度は船中に一月餘り居ると申しますが別に危険な事などは請合ひ無いと云ふ事ですが何に角と定めて不自由な事だらうと考へて居りますが。

答 イエ、決してソんな事は有りませんが、第一、其の危険と申すことですが、此の頃の船殊に今度御乗りになる船などは船が良い上に船長が有名の老練家ですから惟我にも間違いはありやしません、アノ船なんかは近頃の最新式でして、船體から機關から申分の無い別製です、全部鋼鐵で拵へてあり船底は無論二重底になつて居て縦しんば外部の船板が破れても内の方で水を防ぎますし、又船内は隔壁と申して船を横に何ヶ所も仕切つてありますから誤つて船火事を出そうと、又は不幸にして衝突座礁等の災難に出遭つても損所は其の一區劃丈けですみますから決して沈没するなどの氣遣はありません、現にアノ佐渡丸デスナあれなどは水雷を二つ喰つて

さへ沈まなかつたじやありませんか、夫から船中の生活ですが、これも決して御案じになつて居る様な不自由は御座いませぬよ、アノ位ゐな船になりますと實に海上の極樂として船内の設備萬端陸上の「ホテル」などよりも却つて勝つて居る位ゐて、寢室から食堂談話室の裝飾なり設備なり夫れは、大したもの、食物にても飲料にても四海の珍味は好み次第寒ければ温めた空氣が管で各室に送つて來られ暑い時は冷した風が吹いて來る、談話室では碁でも將棋でも勝手に打てるし夜分などは乗組の樂隊が上甲板で吹奏をして呉れます、其の他浴室の工合と云ひ用辨場の體裁と云ひマール丸で宮殿住ひも同然です船内に理髮室もあり洗濯屋もあり加減の悪い時には直ぐに乗組の醫師が診察して呉れる、どうして陸上の一等ホテルでも仲々是れ丈けの便利と慰樂とは得られませぬよ、殊にアノ船は無線電信機を以て居りました、茫々たる大洋中でも他船に行合つたり又は陸地近くを通ります時には直ぐと電信で陸上の珍らしき事、殊に此頃は戦争の事などを問合せ其の返信があると復寫板摺の船中新聞などが發行されますからこれ迄の旅客の様に航海中丸で陸上の大事件を知らずに居た様な事はなく何程便利だか知れませぬ、まゝ近頃の航海殊にアノ船で航海でもなされば、船が大きい御座りますから大概の風では揺れもせず航海中

の危険などは夢にも案じるに及ばず、萬事便利と愉快とのみでタトへ半年が一年の間丸で洋中に浮んで居ても決して退屈する事などはありますまい。

問 イヤ御話で大に安心致しました、シテ先程御話中に船長サンが大變好い方だとして。

答、ハイ其の事です、丁度今其の事を申し上げ様と思つて居た所ですが、何にしる海上の事は船も大事ですか人が第一ですよ船は金さへかければドンナ良い船でも出來ますが金で買はれぬものは人ですな、何にしる船は貴重な財産で積荷や人の命を別にしてもアノ船なんかは慥か二百萬近くもかゝつて居ましたよ、夫に何百人と云ふ大切な命と時としては何百萬圓と云ふ大した荷物を積込み夫れをこゝです全く船長一人に其の運命を委せると云ふのですから仲々容易な事では御座いませぬよ、早い譬が銀行とか會社とかでも何百萬何千萬と云ふ資本でやつて居るものがあります、イクラ頭取りが見込違ひをしたからとて一日二日の中に夫れ丈けの大會社を倒産せしめるなんと申す事はありませぬか其所は軍艦や商船などでは艦長又は船長の號令一つの間違ひで何千萬圓と云ふ財産と數百人の生命とを瞬時に海底の藻屑として仕舞ふ事がないではありません、海員の教育なり訓練なり又其の資格なりが色々

六ヶ敷定めてある譯なのです、我國人は未だ海事思想に欠けて居りますから船の形さへ大きければ安全な船と思ひ船長が誰れだがソナ事は一向無頓着で荷物も頼めば乗りもしますがソコへ行くと流石に外國の人は違ひます、アチラの人が航海をするにも荷物を頼むにも必ず先づ船の良し悪しから調べます次に船長の評判を聞きアノ人ならと云ふので始めて安心をして乗つたり積んたりします、夫れですから向ふの新聞に商船出帆の廣告が出て居るのを見ますと皆何丸來る何日出帆船長何誰と必ず船長の氏名が書いてある、日本の新聞には絶えてソナ事はありません、私の心易い或る船長が「どーも日本人は船乗りとさへ云へば私共でも糞船の船頭でも同じ様に思つて困る」と歎息話をした事がありました眞逆夫れ程ではありませんが兎に角船の良否や海員の技倆などには尤きし無頓着な事は争はれません、これも畢竟船と云へばドレモ同じ物、一と通り免状を持て居る人は誰も皆同じだと極く淡泊に考へて居るから追々此等の事が分つて來れば運賃が少々高くても良い船に乗る保險會社でも良い船に積む荷には安く保險すると云つた様になつて今日の如く玉石混交良い船を造る船主は馬鹿を見ると云ふ様な事は屹度なくなるだろーと考へて居ります、今度御乗りになる船はアレハ新造の會社の最愛船で隨て船長以下ホーイコ

ツクに至るまで夫々撰抜して乗せて居ますから日本人には夫れ程評判されなくても外國人間には必ず受けが能くて毎航必ず満載の大當りでしょうと考へて居ります。問 左様で御座いますか夫れは何より仕合で御座います、時にチト妙な事を問ひますが、只今一寸胸に浮びましたからですが、アノ船と申すものは動産でしよーが不動産でしよーか、妙な御尋ですが。

答 ナル程これは恐れ入りました、素人方でソコへ御氣が附かれたのには敬服致します、随分これ迄多くの人に色々な事を聞かれましたが只今の様な御問ひは始めてです、恐れ入りました折角の御尋ですから序に船の事を少し法律的に御話致しますよー。

船が不動産でサツバリ動がなかつた日にはチト困りますがアハ、ハ、しかし全くの動産にして置いて勝手に賣買が出来る様では始末が付きませんから世界各國何れも特種の動産と做し其の所有權の得喪等は不動産に準じて取扱ふ事にしてあります、夫から此の船には必ず國籍が必要で若し國籍のないものは海賊船と見做されて仕舞ます、して此の國籍を得るには、法律上一定の要件があつて其の要件を充たさぬものは我が國籍を與へない、即ち日本船たる資格なく日章旗の保護も受けられず我

が領海にて運輸業を爲す事も出来ず不開港場へ出入する事も出来ぬ、而して此の國籍享有の主たる條件は船舶法第一條に定めてありまして要は日本の官廳又は公署に屬するものと其の所有者の殆んど全部が日本人である船のみに限つてあります、又此の國籍を與ふるには獨り所有者の關係のみでなく製造したる場所や乗組員の國籍などにも條件を附してゐる國もあります、我が國では別に此の制限はありません。と云ふのは、海事の發達せざる今日、内地で製造した船でなくてはとか、又は乗組全員が日本の臣民でなくてはとか、ソレ云ふ條件を設けても實行が出来ないからでしょう、他國では此等の事迄六ヶ敷條件を定めて居るのも御座ります。畢竟此く國籍を與ふるに就いて色々の條件がありますのは一つには各々自國の造船業を保護したいと云ふのと、今一つには一朝他國と交戦する場合には民有の船舶を徵發しなければならぬ其の折所有者や乗組員中に外國人が半以上もあると云ふと株主會議で之を他國に賣ると云ふ決議をしまひものでもない、又乗組員に退船せられれば忽ち其の操縦にも差支を來すことがあるのを慮つての事です。夫れから船舶と云ふものは、何れも貴重の人命や高價な荷物を運搬するものでありますから生命財産の安全を計る爲に之を製造するには一定の規則があつて船體の構

造より船具の備付端艇の大小隻敷防火水の設備衛生上の注意に至る迄一々細に夫々の定めがあつて船主は此の規定に従つて設計製造し其の筋の検査を受けて始めて指定せられた航路に限りて航海を許されるのです、又船舶も年が立つ程古くなつて参りますから船體機關共に年々一定の期日に定期の検査を受け、命ぜられる通りに修繕をして行かなければならない、段々古くなつて航海に堪へずと認められれば之を廢船として取り崩して仕舞ふのです、其の外造船や航海を獎勵する爲に政府より補助金を與ふる規定のある事は御承知の通りです。

以上は主として政府が船舶を取締る爲に定めた法令の大要を申し上げたのですが政府の世話は單に公益上の取締に止まつて個人の利害迄立入るべきものでない、夫れ故政府で船體の検査などをして夫れは單に其の船が航海に堪へるかどいかと云ふだけの事を検査する迄で、其の船を今買はふと云つたら幾干が相當であるか又其の船は此の先何年使へるだろいかなどい云ふ事は元より政府の立入るべき事でない、又同じく検査に合格したと云つても辛ふじて合格する船もあるし規則に定められた要件よりも遙に立勝つて金もかけ手丈夫に拵へた船もある、故に是等の事は然るべき其の向きの専門家の鑑定に依りて其の見込を尋ね又は評價をして貰ひ、之に依つて賣

買もし貸借もし、又は船體積荷等の保険率を定むる標準としなければならぬ、此等の事は政府の船體検査よりも實際に於ては海事に關係ある營業者即ち保險會社銀行等には却て重大なる關係が多いので若し其の鑑定に任にある者が無責任な事をしよものなら其の弊害の及ぶ所實に測るべからざる位である、英國には「ロイド」と云ふ組合があつて主として此等の事を始め一般海商の利便を計つて居ますが其の信用の大なる事といつたら我が日本の船でも「ロイド」の検査済みと云はなければ客も荷も載らないと云ふ勢です、大きな船は夫れでもよ御座いますがお小さな船まで一々「ロイド」の検査を受けると云ふ譯には行かない、之れで是迄此の船體船價の鑑定と云ふ事は我が國の營業者が大に困難したので船を買ふのは馬を買ふのよりも面倒だと迄云はれて居りましたが、數年前より我帝國海商協會で其の事業の一として此等の鑑定や海商間の談判事などを夫々専門の學者實際家を以て組織したる委員に託して極めて誠實に評價もし仲裁もする、又此等の事に限らず何事でも海事に關した事は船の設計から作事の監督から種々の調査事に至る迄依頼に應じて世話をする事になりましたから營業者も大に其の利便を得る様になつて参りました。夫て船と云ふものを海に浮べ船客から荷主から保險業者から貿易商銀行家に至る迄

各々貴重の生命、莫大の財物を安んじて船長一人の手に托して波濤萬里の異邦と盛んに商賣をさせよと云ふ迄には以上御話しました通り仲々手がかゝつて居るんでして無雜作に海？船？など、冷眼視しては居られないんです、しかして今日では海上の事も餘程發達して参りました昔の様に海は危険なものだなど云ふ考は段々人の頭から脱けて仕舞つて今では却て海は賑なもの愉快なものだなど云ふ考の方が次第に強くなつて來ました、貴方なども今度の航海をなさつたら屹度は迄食はず嫌で居たと仰しやるに違いない、此く迄海上の安全と云ふ事が進んで参りましたので慾の上にも慾が出るは人情で各國共に近年競ふて海難救助事業の進歩を計つて居りますこれは詰り人の智力は天然の風とか波とか云ふ力に勝ち得るものだとの信念から起つて人智が日増に進んで行くのに、風が吹けば船が沈み人が溺るゝもの又沈んだものは浮ばぬものと昔の人間が諦めた事は今の人間も同じく諦むべきものだなど、何時迄も意氣地なき事を云ふものではないとの奮發心が近年盛に燃へ立つた結果です、して此の海難救助には沈没した大船を浮かすとか乗せ上げたのを引き下ろすとか云ふ大袈裟な方と海岸や港灣内等で小形の船の難破せんとするを救ふと云ふ様な津々浦々で設備すべき事と二た通り御座ります御承知の水難救濟會は即ち先づ此の手近

い方から着手して追々盛になつて参つたので御座りませぬ。

船を拵へる事から始め之を助ける準備迄總べて國民の力で完備し得た國が即ち今日の大海國大國民として覇を天下に争ふ事が出来るので我が國なども何れの日にか此れ丈けの力を養ひ得るで御座りませぬか御同様に待遠しいでは御座りませぬか。

問 ヤー色々詳細に承つて少しは海の事が分りかけました、何を申すにも根が全くの素人ですから御尋ねすべき事から第一に分りませぬので、何ぞまだ外に私共の心得て居て宜い事がありますなら御聞かせを……

答 左様、大概御話した積りですが、エート、夫れでは今一つの萬國一般海上の習慣となつて居ります事と今一つ今度は何れ歐米諸國で立派な港を御覽になるでしようから船と港の關係の事を掻い摘んで申上げて見ませぬか。

萬國一般に共通して居ります海上の規定は萬國信號と衝突豫防規則とです、是は古來より漸々と發達して参りました海上の習慣を萬國會議で各國が承認して一様に其の規定に従ふ事になつて居るので此の萬國信號は言葉の通ぜざる者の間にも差支なく役に立ちますもので現に先頃我が汽船が露艦に出遭ひました時に船長が信號書を持つて敵艦へ参り相方共に信號書を引繰返しながら話をしたと申す事がありますし

た。又海上の衝突豫防規則が萬國一定になつて居ります譯は是も深く説明をするに及びませぬで、若し船が二艘行合ふ時に甲の國では互に我が船を右へ曲げると定めてあり乙の國では互に左へ曲げると定めてあつたら其の結果は必ずゴッソんで此の信號や豫防規則ばかりではありません海上の商賣に關する事即ち商習慣之れも各國殆んど同一で商業の敏活を失はない様になつて居ります。

さて今日の商業即ち世界を相手としての商業は大規模の海上機關を控へてかゝらなければならぬので、詰り國家と國民とか海に注ぎたる全力の強弱に依りて商業上の勝敗が定まるのです、夫れ故各國共に近來争ふて海商の發達を計り、港灣を修築して船客船貨の積み卸しを敏速にし快速なる大船巨船を造り海上の來往を迅速にしよとして居ります、殊に戰時に自國の商船を保護し又交戰中自國の海外貿易の衰退を防がんが爲に各國共に非常に苦心して居る様でして近來頻りと高速力の巨船を造り戰時の補助船とするのが流行して参りました各國共に競ふて人後に落ちさらん事をのみ焦つて居ります、此の度帝國海事協會で義勇艦隊と云ふ事を思ひ立たれたのも畢竟世界の此の時運に促がされたものと申して宜いと思ひます。

此くの如く各國共に追々と大きな船を造る傾が生じました爲に之に伴ふて港灣の修

築が必要となり港が良くなると又船の方も段々便利な大きいのが流行すると云ふ風に船と港と相俟て共々に進歩して参りました、我が國でも良き船を造ると云ふ事も必要ですが夫と同時に港の改良と云ふ事も目下の急務であると思われ、世間では港と云へば風の時に逃げ込む所と單純に考へて居る人が多く御座いますが、夫は極めて舊い思想で今日の商港と云ふのは大きな船をして迅速に荷物の上げ下ろしを濟ませて無益の費用や日子を費やさせない丈けの設備がなければ單に水が深いか廻りに風除けの山があるとか云ふ丈けでは決して良港とは申されません今日の大船は暴風の時にはなまじ海の浅い所に碇を下ろして居るよりも遠く外洋に出て、漂泊して居る方が却て安全な位です、今度アツチへ御出でになれば所謂今日の港の如何なるものであるかをイクツも實地に御覽になるでしょうが、夫を見て日本の港を見ると逆も比較にはなりませんよ、數年前の事ですが郵船の神奈川丸が英國から初めて廻航された初航海の節にアツチから荷物を満載して來ましたが其の折り同船が神戸港にかゝつて居る中に同船の船長が或る來訪者を顧みて「此のレベルを揚げ切るのに明日一杯かゝるが丁度今日で既に六日になる是れはアツチで一日に積込んで仕舞つたんです私始め是れ丈けの船員がコーヤツテ毎日ブラ／＼して居つて月給を

頂戴するのは勿躰ない」と話した事がありました、夫れ丈けの月給は勿論如才なく運賃の内にかけてあるので良港を持たぬ國民が輸入輸出のコー云ふ所で暗々裡に損をして居る金の一二年分も出せば立派な港の二ツや三ツは必ず拵へる事が出来ましょよ、ヤ思はずい、氣になつて長談義を致しました。

近頃の船が如何なるものであるかと云ふことは、右の話でスツカリ御分りになつた事と思ひます、板子一枚下は地獄どころでは無い、實に二重の鐵張上は極樂と申して宜いのです。しかし此の立派な船を設計し、拵へ上げて海に浮べ、無事に之を乗り廻して安全に船客荷物を運搬し世界の交通貿易を盛に致して参りますには、素人達の一寸氣の附かぬ程中々大した手數がかゝる事で金を出して船を拵へさへすれば、直ぐと其の日から一國の海上の商賈が盛になると云ふ様な無雜作な譯には参らぬ、これより日本の國旗を建てた立派な船を五大洋上に乗り廻はすに就いて國民が豫めドレ／＼丈けの御膳立てをしてかゝらなければならぬかと申すことを簡短に申述べて見ましょよ。

さて此の準備も仲々一と通りや二た通りの事ではなくて、先づ第一に船を拵へると

云ふ事から申し述べると、之には船體や機關を設計する人と之を作事する職工と又多くの資本を以て造船の事業をやる人がなければならぬ。

船にも小は二三人乗りの釣り船から大は數萬噸の大商船に至る迄大小色々の種類があるが、何れも最新の學理に基きて夫々其の使用の目的に協ふ様に製造しなければならぬ、そこでドーしても小は小、大は大と夫々造船の學理を學び知何なる船にても設計する事の出来る技術者を作る事が先づ第一に必要な事となつて來る、而して此の事はもと人才養成の教育事業の一であるから國家若しくは府縣等の事業として經營すべきもので、帝國大學工科大学に造船の一科を置きて此の向の學者技師を養成し夫から此等の學士の助手となり又其の下の助手となる様な技術家は大阪高等工業學校其の他各府縣立の工業學校で養成する事になつて居るので、目下造船なり船用機關學を教ふる地方の工業學校は僅に指を折て數ふるに止まつて居るから全國多數の小造船所所謂昔からの船大工連中はたゞ古來よりの舊慣を守り最新の學理を應用する事などを知らぬが爲に大形の船は日増に進んで行くに拘はらず國民所有の船舶中百中の九十九を占めて居る小形の船舶は一向進歩の跡を見ないのは甚だ残念な事では是非此等の船舶を改良して行く様な技術家を澤山に養成する事を獎勵しなければ

ならぬ事と考へて居るヤレ漁業の改良だヤレ遠洋の出漁だと騒ぎ立て、見ても先立つものは漁船であつて之れが改良されなければ逆も漁業の改良は出来ぬ。

造船の専門技術家が出来たとして直ぐ必要を感じるのは、其の技術家の指揮監督の下に木でも金でも好き自由にドンナ細かな細工でもドンナ六ヶしい坪金でも合して行ける職工であるか、これは今日我が國で何れの造船所でも一番困難を感じて居る、世間には未だ十分に此等の職工を養成する學校もないから止むを得ず海軍は海軍、三菱は三菱、川崎は川崎と云ふ様に、自分の所で養成をして居る其の苦心の程は實に一と通りの事ではないが、幸にして丹精の効が現はれて今日では彼の造船の作事中最も困難と云はれて居る「リベット」(鋼鐵の板を縫ひ合せる釘の事)の締方さへ英國あたりの一等職工に比して優るとも決して劣らぬ迄に其の腕を磨き上げたものが尠なく先年三菱造船所にて始めて六千何百噸の常陸丸を造りたる際に其の検査の爲め態々來朝したる英國ロイドの検査員も舌を巻いて日本職工後世恐るべしと驚歎した程であるのは我が國造船術の爲に何より悦ばしい事である、(序に申す、此の「リベット」は船體の急所若し之か弛るんだら抜けたりしよゝものなら夫れごと二重の鐵張り下は地獄となるんで、水雷艇や驅逐艇の如く極めて薄き鋼板で張

つてあつてヘナ／＼して居るものなどは激しき波に掀弄せられると下手が打つた鉄はピン／＼と片端から飛んで抜ける事があるぞいです何と險呑な話ではありませんか。我が造船職工の腕前は右申した通りに或る點に於ては仲々進んでは参りましたが未だ決して充分とは己惚れは出来ない、海軍や大造船所は別として民間一般の造船職工中には今日尙ほ随分恠しい危なつかしい連中も尠からぬ事であるから先に申した造船の學科を授ける地方學校と同様、造船に關する金工木工の實科を授けて充分に腕のある若手の職工を養成する事は實に目下の急務である、御同様悦ばしい事には我が國の造船術も近年餘程進歩して可成り大きな軍艦や商船も出来る迄に立到つた、此の分で一と奮發して、スエズ以東東半球の軍艦商船は一手に日本で引受けて製造する様に是非なつて見たいものでは御座いませんか。

次には如何なる船艦でもドン／＼造れる様になると同時に之に乗組んで自由自在に乗り廻はし、船客荷主に安心と満足を與へドモ日本の船は乗り心が宜い第一安全で愉快である、これから己れの店でも日本船に限るとしよと云ふ様に外國人に迄も最負にされて海上の商權を次第に我が手に收めよとするには上は船長より下

「ボーイ」に至る迄海技の學理實際に長じ海員の任務紀律に熟し横から見ても縦から見ても愛すべく親しむべく敬すべく恃むべき腕コキ揃として仕舞ふ事が何は措きても最も肝要緊切の事である、之れが爲には國立府縣立の商船學校ありて高等の海員を養成し又海員救濟會などに於て水夫火夫等の下級海員の養成を勉め、其の結果として追々立派な海員が殖へて参つたのは誠に我が海力の増進の爲に慶賀すべき事である、去れど數ある船舶の内には未だに昔しの船頭根性が抜けず、米俵に竹箆を刺して米を盗み酒樽に穴を明けて酒をへづり夫で飯を炊き煙をつけ、さて女客を呼び付けて酌をさせてふざけ散らしこれが船頭の役徳だなど、陸の人の目に觸れぬを幸に不都合極まる事をして居る奴等が全く跡を絶ち切つたとも云はれないのは誠に淺ましい限りで今後益々官公立の商船學校を増設して立派な腕前ある海員を養成すべきは忽論の事、たとへ五石百石の小さな大和船に所謂炊手として勤務を執るもの末に至る迄も海事教育の方面からは勿論普通教育の方面よりも、人は職務や地位上下に依り忠實精勤の道に二た様あるべからずとの教訓を充分に教へ込み、我が日の章旗の下に立働らく海員は一人として理想的の「シーメン」たらざるはなしとの評判を世界各國津々浦々迄も鳴り響かしたきものである。

高等下級の海員が何れも相當の教育訓練を受け海上の必要に應じてドシ／＼養成せられ、會社私人の別ちなく夫れ／＼然るべき向きに招聘せられて我が帝國の貿易の爲に晝夜を分たず海上の勤務に勉勵して居る永き月日の其の間には、病氣や不慮の恠我過ちの爲に永く職務を離れて知らぬ他郷の病院に人の情けの深き蔭に藥と親しむるもある、萬に一つの不運に出遭ひ衝突座礁の不幸の爲に身一つのまゝ辛ふじて命ばかりを只一の財産として助けられ再び他船に乗組む迄は船主知友の助を假りて細き煙も斷え／＼に妻子を泣かす事もある、溺るゝ客の身に代り鰐魚の腹に葬られ貴き荷物を救はんとて身は艙内の灰と消え其の外職務に命を捨て、義務ある所是れ我が墓と人の命と世の寶との前に笑ふて死地に就く此の貴ぶべき海員の病苦を慰め遺族を救ひ彼れ幾萬の海員をして後顧の憂なからしむるは獨り船主の責たるのみならず、海に依つて國を建て海に依つて命を繋ぐ我が海國民全體の辭すべからざる天職でなくて何てしよ、か、海員接濟會なるものは即ち此の目的を以て設立せられたるものであつて近年益々盛大になつて参りましたのは何より悦ばしき事ですが未だ十分に發達したと申す迄になつて居りませぬのは世界一の海軍國として我が帝國の名の爲にも何となくまだ物足らぬ思がある、何卒此等の事業も充分に發達させ

て獨り我が海員の爲のみならず人種國籍の區別なく廣く世界の海兄弟にも我が國人の厚き情けに苦痛を忘れしむる様にしてやりたいものではありませんか。

船も出來、人も出來、又其の人々に職を得させ不幸あれば之を救ひ皆安んじて海を家とし、國の文明富強の爲に心身共に打ち込んで夜の眼も眠らず働いて呉れる様になつてこそ、金ある人も安んじて幾千億の資も足れりとなさず始めて世界の商業界に其の腕を奮ふて見よ、との氣も起るのです、して此の海事と云ふ事も細に之を分けて見ると、各々夫々の分業があつて、荷物の運搬、代金の取立て、船客の送迎、食料炭水の供給より海上防疫の設備等を始めとし、海上萬一の用心としては船艀船客荷物の保險の制度があり、航路の安全、海陸の聯絡の爲には、燈臺浮標の設けや築港棧橋倉庫の設備ありて、動ける時の危険と止れる時の不便利を避ける様にしてあつて、其の事柄の性質に依りて國家の政務たるもあり、私人の事業たるもあるが期する所は萬國共有の此の公海を利用して萬國相手の商賣に皆安んじて命も金も投げ込める様な仕組になつて居るのである、此等海事に關係ある公私の政務職業は今一々之を列べ立てる違もないが只今大體述べたものから降つては舩船の船頭石炭

積込みの人夫荷造専門の人足等海の御蔭で飯を食つて居る末々迄残らず數へ上げて見ると海の仕事が如何ばかり範圍の廣いものであるか夫れが爲に支出する公費夫れが爲にツギ込む資本夫れが爲に直接飯を食つて居る人、又夫れが爲に間接に世界の有形無形の文明利便の恩澤に浴して居る者の如何に大なるか如何に多數なるか改めて申述べる迄もない事だろと考へられる、我が國の米や茶や生糸が歐米迄行て黄金に化して歸つて來るのも我が國山間僻地の小學生が讀んで居る本の中に書いてある世界最新の學理より手に持ち頭や足に着けて居る沿筆ペンから靴帽子に至る迄、出るもの入るもの考へれば皆海を超えて來ぬものはない、若し此の海がなかつたらば國の政事も民間の事業も今の半はあろか三分の一の忙がしきにも達しなくて政費も要らねば資本も要らず、其の代りに世界の面白い話も聞けず珍らしい物を見る事も食ふ事も出來ず東洋の一小島に隱居して只だ爲す事もく／＼ボンヤリして居るより外に仕事はあるまい、四十年前迄の我國は現に丁度此の如しであつたではないか。海と國、海と國民、海と産業、海と人文、要を摘めば先づ此の如しである、最後に今一言是非申し述べて置きたいのは平時に於ける制海權と云ふ事である。

此の事を詳しく論じよとすれば、各國の政治史だとか商業史だとか、ヤレ統計表

だの何だのと色々列べ立てなければならぬが、茲には其の様な面倒な事は避けて、極く卑近通俗に、海を見た事もない山國の小學生徒にも分る様に書いて置く丈けに致しますが、さてドコか或る山の中に一つの村があつて、此の村には農産林産鑛産等の天然物ばかりでなく織物漆器陶磁器を始め其の他の工産物が澤山出來、村民も至つて勤勉で學業にも職業にも非常に勉強する誠に感心な人民ばかりであるが、一つ惜しい事には此の村の人は至つて出無性で遠國は愚か隣村へでも能く／＼退つ引きならぬ用事の外は一向に出て歩かない、又ドー云ふものか此の村には馬も車も何もなく隣村へ行く渡船さへ持つて居らず、晝夜を分たず陸續と此の村に出入りする人力、荷馬車乗合馬車から、駄馬でも渡船でも川舟でも皆他村のものばかりである。と先づ假に定めて置く、即ち此の村の人は頻に勉強して夥しき天然人工の産物を拵へはするけれども自ら之を他所へ持つて行つて賣るゝとはしないで他所から人が買ひに來るのを待つて居る、自分等が買ふ物も此の通りで絶えて自ら他所へ出懸けて安い良い物を見付けて來よゝともしない、して此の村から出る物又這入つて來る物を運搬するには決して自ら手を下さないで高い運賃を拂つて他所の人の手を假りて居ると先づコー假に定めて置いて、さて此の村の一年の收利上の結果は如何と考へ

て見れば、

- 一 賣る物は高く賣れぬ、
- 二 買ふ物は安く買へぬ、

三 數百の車馬や川舟の運搬に従事して居る者等が樂に食つて行くだけの金は自村に落ちずして他村に落ちる、

其の他細に勘定して見るとまだ色々な損徳が立つてありましょーが大駈ザツト搔い摘んだ丈けても出入では一年に何程の損失になつて居るか分らない、詰り此の人は年中グツグと働いて儲は皆んな他人に取られ謂はゞ他人の懐を肥す爲に我が額に汗を垂して居る様なものである。

我が國海外貿易の現情は此の村の話しに能く似た所がありはしないか、我が國より諸外國に通ずる公道に來往し我が賣るものを運び出し我が買ふ物を持ち來り出入り共に随分と良い運賃を儲けて居る船の多數は殘念にも皆外國の旗を掲げて居るではないか、大にしては日本郵船會社次ぎては大阪商船會社を最先とし其の他の會社や私人の持船を集め千噸以上のもの約二百隻此の噸數五十餘萬噸と云ふ日の丸揚げた船もかなり無いではないが、今日の所我が海外の貿易は重に外國の國旗の下に行は

れて居ると云はねばならぬ、即ち平時の海上權は殘念ながらまた我が物になつて居らないのである、他國と他國との間の航路へ迄も乗り出して一と儲する迄に至らずとも責めて我國と他國との商利丈けは是非我が獨り占にして仕舞はねば、働らいて外船に儲けられるのみでなく、我から輸出するものは安く、我に輸入するものは高く皇國の産業が發達する程金は却て儲からぬと云ふ今日の狀態を脱する機會は未來永劫見られぬと覺悟しなければなりません、英國が今日あるは云はゞ數百年間全世界の人民に働かせて其の上前を刎ね來りたる爲で、獨乙が近年俄に儲け出したのも「獨乙の將來は海にあり」と皇帝自ら率先して海事を獎勵し給ひし結果と云ふに憚らぬ、我が日本國の地形を看て見ますと酷た能く一艘の大船に似て居る所がある、即ち長さ二千里に餘り最大幅は百里に近く、高さ一里に垂んとする大煙突を中央に控へ、三千年來連綿たる太き錨鎖もて亞細亞洲の東岸にドツシリと錨を下ろし林野山海の寶財倉内に充ち滿ち忠勇にして義烈伶俐にして勤勉活潑なる五千萬の船員が其の甲板に立働らいて居る世界無類の目出度き大船である、此の大船今は各國生存の荒き風波にビクともせずやがて遠からざる未來に於て自然に東半球の旗艦たるべき運命を持つて居りますが、さて戦商二つながらの覇權を掌り令を天下に下すに

は何分にも今のまゝでは舩船の数が足りない、千噸以上の舩船を此の大船の兩舷にブラリと吊して見る迄は弱者たる威嚴も實力もまだ我が物とは誇られませぬ鳴呼船なる哉。

第二章 戦時の海

◎我が運漕船の大災厄

何々丸以下我が運漕船十何隻は一昨日某地の沖合にて敵艦隊に遭遇し、甲丸及び乙丸は其の快速力を利用して逃げ伸びたるが途中夜に入りて互に見失ひ、甲丸だけは只今辛くして某港へ逃げ込み、被弾數十船體蜂の巢の如く死者三十二傷者五十六行衛不明三船内の有様慘憺を極む乙丸は未だ何地へも歸着せず、察するに途中沈没の不幸を見たるにはあらざるか、自餘の十何隻は恐らく悉く敵手に落ちたるならん。
痛恨！痛恨！

◎某港敵に封鎖さる

某港及び某港は共に昨夜より敵艦隊の爲めに封鎖せられたり。

◎運賃保険料の暴騰

運賃及び保険料は法外に暴騰せるにも拘はず外國船主は本邦向きの荷物取扱ひに躊躇する色あり。

曰く何曰く何と面白からざる新聞記事を見るは開戦間も無く制海權を失へる交戦國非運の始である。次で國民の鼓膜を破るべき霹靂一聲は

「敵軍某地の上陸を始む」某港砲撃せられ今盛に炎を居れり」忌々しくとも仕方がな

風止み波收りて、海上再び平和の月を眺むるを得るに至りても打漏らされの船艦は力なげに海波に嘲られ、航路も得意も他に奪はれ戦前の海の優勝者も一朝にして戦後の海の劣敗者となる、有爲轉變の速なる。これぞ浮世の常である。

之に反して我が軍一戦敵艦隊を粉砕し、一舉敵海を制した場合に其の結果の如何であるべきかは諸君が現に目撃しつつある通りで、戦時の海のやりとりは實に一國浮沈の分るゝ所である。

制海權の得喪と一國武運の消長との關係は征清征露の兩役に目の當り其の實例を見たる諸君に向ふて今更の如くに説明を試むるの無用なるは云ふ迄もない事であるが今回の海戦が吾人に二重の大教訓を與へて居ると云ふ事を茲に特筆して置くだけは決して無益であるまいと信ずる。

即ち其の第一は制海權を獨占し敵艦隊をして何等爲す所なからしむるには進んで之を彼の領海に攻むるに限ると云ふ事である、攻むるは即ち守るなりとは古來戰術上の原則であるが、海戦では特に其の通りである、退いて守る一方になつて居る時は、縦し首尾克く守り終ふせた所で轉じて攻勢に移る事は六ヶしい旅順の敵艦隊がら即其の好例である、之に反して我が艦隊の如く敵の本陣近く押寄せて、其所に假根據地を構へ込んで日夜攻勢を取つて居ると、我が本國を襲はれる氣遣なしに敵の一艦一艇も決して我が視線を脱せしめず、囊の鼠同様殺活共に思ひのまゝにすることが出来る、敵優勢の場合と雖も守者と攻者を比較して攻者に七分の利があれば守者に七分の損あるは彼の浦鹽の艦隊が壹岐水道に出没して屢々奇利を博したるにても明白である。

さて我が東郷艦隊の如く敵港近く根據地を占め袋の口を締めくくりて寸時も監視を怠

らず出てなば伐たんと待ち構へて居るには我が艦船と本國との交通通信を始めとし彈藥糧食被服炭水の供給より、傷病者の治療若くは後送戦員の補充、艦艇損所の小修繕に至る迄一々主戰艦隊の力を割いて其の用を便せしめる様な事をしては居られない、必ず艦隊に従屬して此等の用務を辨すべき補助艦隊と云ふものが極めて必要欠くべからざる分子となつて來るのである、攻むるは即ち守るのであるが戦艦ばかりぢや攻めには行かれぬ。

次に今回の海戦が吾人に與へし第二の教訓は制海權を取られた時身の毛もよだつ實地の經驗である、幸にして浦鹽艦隊の横行も能き程に之を打撃し得たからよかつたもの、僅か數旬の其の間に僅に三隻の敵艦の爲に吾人が受けたる有形無形の損害は實に恐るべきものであつたではないか、人の命は別として彼れ三隻の其の爲に、無法の運賃保険料に數百萬の損失を招きたるのみならず一時は歐米との貿易もアナヤ全く中絶せんとし爲に受けたる損失も正しく算出は出来まいが、察する所莫大なる額に達したに相違ない、たつた三隻の敵艦でさへ、恐るべきこと此の如し「勝て兜カブトの緒を締よ」浦鹽艦隊の跳梁は天の我を戒むる有難い訓の一と思ふて千萬年の後迄も我が國人が忘るべからざる所である。

第三章 義勇艦隊

軍艦の種類や其の造り方や、平時戦地に於ける其の任務や行動等の事は世界に歴史ありて此の方、他に類例も少なき大海戦を一度ならず二度迄も目のあたり見たる我が讀者に今更ら御話する必要もないと存じて、これより筆を改めて此の度び我が國に起りました新問題義勇艦隊又の名は戦時補助船舶の事を一言いたしたい。此の事に關しては編者が廻らぬ筆でなまじいな事を書き綴るよりも、これまで我が協會總會等の席上又は義勇艦隊相談會の席上に於て、我が海軍の將校方や其の他夫々専門家にも願ひして講話をして戴いた、其の筆記録を其のまゝ茲に頂戴する方か却て諸君を益する事が多いと信じて、乃ち次に下村氏始め五大家の論文及び講話筆記を掲載します、何卒此等諸氏の所説によりて義勇艦隊の性質沿革及び現時他國の實例等を充分に御研究下されんことを希望致します。

列強の海運事業を論じて日本義勇艦隊組織の事に及ぶ

下村 房次郎

凡そ今日の世、國家と云はず社會と云はず、其生存競争場裡に於ける優者勝者は、則ち國際貿易を伸張して其盛榮を極むる者の上にあらずんばならず。貿易を伸張するは即ち國家社會の實力を伸張する所以にして、而して其實力伸張の第一手段は即ち海運の力に依頼するの外あらざるなり。故に吾人は信ず、海運力を完全に有せざる人民は世界の競争場裡より排斥せられ、到頭其敗者劣者たるに終はらざるべからずと。獨逸の首相ビュロー伯爵嘗て云へるあり、曰く、海事より遠ざかれる國民は世界の舞臺より排斥せられたるの觀あり、と。旨や味ふべし。第二十世紀の宇内に國する者、將た生活する者、豈深く茲に留意せずして可ならんや。看よや、英國が久しく世界の舞臺に雄飛濶歩して、所謂生存競争場裡の優者となり勝者となり、東西の烈強を睨視する所以のものは、正しく其海運力の發達が他に一步を先んじ、能く他を制して海上の實權を獨占したるに因ること、是れ則ち何人と

雖も否認する能はざるところの事實なり。之に尋て夫の日耳曼聯邦の如き、近時亦た其國運に長足の進歩を現はし、今日に於ては殆んど英國に比肩し、若くば時に其盛榮を凌駕せんとするの概あるは、是れ亦た正しく其海運力の非常なる發達に原づかずんばならず。次に彼の露國を看よ、彼れは其本國より二千里を隔てたる絶東の經營を企畫し、兎にも角にも今日の狀態、即ち其國防、移民、商工業の進度を今日の狀態にまで推し進め、日本海陸の精銳を此處に引受け、能く未曾有の大戦争を爲すに至れるものは、亦た畢竟海運力を利用して、其經營を迅速にしたるに因るに外ならず。但し露國の東洋に於ける海運力の利用は、全く露國義勇艦隊の活動より得られるものにして、即ち同艦隊が極東經營の大事業に對しては與つて力あること著大なりと謂ひつべし。

吾人は更に進んで日耳曼聯邦最近の事情に就き少しく委細に語らんか。抑も今より二十年以前に於ける同國海事の狀況は如何なりしぞ、其幼稚の程度にありしは、一千八百噸以上に位する船舶の建造は大抵之を英國に注文しつゝありしと云ふの一事に見るも、略ぼ想察するに餘りあるなり。當時の調査に據るに一千八百噸以上の船舶を自國に於て建造したるは、僅かに十指を屈して之を計ふるに止まりたり。然る

に近時に至つては其進歩の著大なる實に驚くべく、三十年以前の獨逸に於ては百噸以上の船舶二百隻を有したるに過ぎず、其噸數二十萬四千噸の上に出でざりしと云ふに、昨年の調査に據れば現在船舶一千三百隻、噸數二百六十餘萬噸に増加せり、而して是れ皆其自國に於て建造したるものなりと云ふに至つては、更に驚かざるを得ざるにあらずや。爾れば一千八百八十年に於ける同國の貿易總額百分の六十二以上は外國船に依つて運搬せられたるに、一千九百年に至つては、外國船に依れるもの百分の五十二以上に減ずるを得たるの結果を示せり。

勿論同國海事の進歩は獨り造船及び船數噸數の増加のみに止まらず、海事上の諸制度、海員の養成等、亦た著大なる進歩を爲したり。殊に英國をして羨望措く能はざらしむるものは、獨逸の海員が大抵獨逸に本籍を有する者たるの一事、即ち是れなり。蓋し本籍を獨逸に有して獨逸の海事に従事す、乃ち寤寐の間猶ほ其本國たる獨逸を思ひ、念々獨逸を忘れざるは、人間通有の性情なるを以て、乃ち獨逸の海員は齊く愛國の觀念に満たされつゝある者たり。是れぞ彼の北極の探險や南洋の遠航にも踊躍奮進し、如何なる危難にも撓まず、如何なる困苦にも屈せず、勇敢の氣を鼓して其大成功を將來に期するが如き、常に獨逸近世史を輝かせて、國力外伸の先鋒

者と指目せれつゝある所以なるべし。聞くならず、此十數年來、英國にありては常に獨逸の爲めに其商業區域を犯さるゝ傾向あり、即ち獨逸の爲めに世界に於ける英國の勢力範圍を縮少せられつゝある状態あるを目睹せらるゝより、英國政府は深く猛省するところありて、獨逸駐在の各英國領事館に命じ、又特別に調査員をも各地に派遣して、其蠶食せらるゝに至る所以の原因を探求調査せしめたり、而して其調査報告は時々英國のブリュウブツクに掲載せられつゝあるを見る。其趣旨に據つて觀察を下し、獨逸發達の原因は全く獨逸海運事業の迅速なる進歩にありて存す、とは既に十目の俱に視るところにして、最早動かすべからざるの定論たるなり。殊に斯の大成功の秘訣即ち獨逸海運事業大發達の所因如何と云へる問題に對しては、政府と云はず、諸會社と云はず、將た民人と云はず、全國一般に海運事業を以て營利機關と見做さず、國家發達の一大機關として一致戮力し、共に其發達進歩に極力盡瘁したるの結果なりと論定したる者さへ少なからず。爾り、彼れは海運事業を以て營利機關と爲さず、一意専念、たゞ國力伸張の唯一機關として之が進歩發達を畫策したり。但し畫策如何に周密巧緻なるも、其精神にして海運事業其ものに依りて直ちに利益を羅せんとしたるものならん

には、獨逸は決して今日の如く國運の開發を見ること能はざりしなるべし、何となれば利益は計數上損失の餘資なるを以て、餘資を得ず若くは之を得ること少額なる事業に向つて力を注ぐ者は、恐らく天下に之れ無かるべければなり。今や日露兩國は砲火の間に相見えつゝありて、戦ひ未だ酣はなるに至らざるも、終局勝敗の數や、疾くに定まれるものあるを知る。併しながら我邦土に隣れる今日の交戰對手國たる彼れが最近に於ける海運事業の狀況を尋討して、其國力の伸張と海運事業の効力とが如何なる關係を有するやを研究するも亦た一段の興味ある事柄ならんと信ず、乞ふ少しく之を云はんか。

今を距ること三十六年以前、露土戰爭の當時に於ける露國は、實に一隻の巡洋艦と名付け得らるゝ軍艦さへも無かりしなり。爾れば船舶の空乏が其國力發展の上には素より、其戰爭上に於ける不利益てふ事に就ては、痛く露國の官民に刺激を與え、彼れ等をして猛然として覺醒する所あらしめたりき。

露國官民は實に此時を以て其軍事上にまれ、經濟上にまれ、海運の必要、船舶の急需なることを悟了するの機會に接觸したるなり。是に於て乎一千八百七十三年莫斯科に開設したる彼得大帝生誕二百年祭紀念大博覽會を好機として、船舶の雛形、船

艘十餘隻

機船具、其他總べての海上運搬要具を出陳し、且之が應用方法を説明すると共に説明書を印刷して汎く國內に頒布し、以て國民をして海事思想を發達せしめんと勉めたり。越えて一千八百七十七年、始めて義勇艦隊組織委員なるものを創置して、國民眞實の愛國心より出づる義金を募集し、之を以て船舶を購入し、平時は専ら貿易通商の事に従はしめ、有事の時に方つては、假裝軍艦として巡洋の勤務に服せしめんと企てを起され、而して一たび之を發表せらるゝや、人心忽ち大に振ひ、僅かに六旬日を出でざる間に百六十萬留の義金を募集するを得たりき。依りて直ちに之を以て三隻の汽船を購入したりと云ふ。即ち之を露國義勇艦隊の濫觴と爲す。爾後十五箇年を経たる一千八百九十二年には義金四百五十萬留の巨額に達したるを以て、之が利殖金及び年來の純益積立金（義勇艦隊は世上一般の營利會社と全く趣旨を異にするを以て年々純益金を積立て既に巨額に達しありたり）を合せて續々堅牢なる船舶を購入し、今日にありては十有餘隻の新式船舶を所有するに至りぬ。而して此義勇艦隊が今日迄露國の軍事上に經濟上に寄與したる利益便安や、實に莫大なるものあるを見る、即ち（第一）絶東の領地に向つて移民と其食料を運搬し、（第二）其歸途露國民が生命ともする紅茶を低廉の運賃にて積載運搬し、（第三）最も困難な

る絶東の經營には別に他國の船舶を雇入する必要を感ぜず、加之低廉なる運賃を以てして而かも其所有の大部分は露國民の手に落ち、敢て他國へ持ち去られず、乃ち露國公私の利便や殆んど計られざるものあるなり。

然れば則ち露國をして絶東の經營を今日の程度にまで進捗せしめ、而かも比較的容易に且簡便に其事業を成就せしめんとしたるものは、全く義勇艦隊の力なりと斷言するも敢て誤謬にあらざるを信ぜんとす。

之を露國の事情に見、將た英獨の狀況に察するも、國運の發揮と國力の伸張とは則ち一に海運の力に職由することを明知し得らると同時に海運力大發達の素因は、取りも直さず國民が愛國思民の熱誠にあることを悟了するに足る可きなり。

吾人は既に英獨を語り、又露國を説けり、彼の米國の海運力が如何に發達し、如何に海洋上に活大の運動を爲しつゝあるかは、今更絮説せざるも疾くに人々の明知する所に屬す。ただ茲に特に云はんと欲するものは則ち佛國海事の狀況なり、但し佛國海事の狀況は、海事を忽諸に付すべからざる情由を説明するに於て最好の材料たる可く、乃ち我れの考量に資す可きもの少なからざるを信ずるなり。

今は昔、ルイ十四世の時に方り、時の宰相コルベルトは將來の國運を卜し、其發展

を期せんには大に海事を擴張し、海運の發達を企圖せざるべからずと立案し、乃ち之をルイ十四世に献策したり。然るにルイ十四世は只だ眼前に於ける一時の榮耀心に驅られて陸上に勢威を振ふの一事にのみ熱衷し、其陸上勢威を獲得するの根本が却つて海上にあるに想到する能はず、惜む可し、ホルベルトの意見を容納するに至らず、只管重さを陸軍のみに置きて其用意を厚ふするに反し、海軍の爲めに力を致すこと極めて薄かりし。是を以て一朝英國と事を構ふるや、其海軍の脆弱無力なるに原因して、空く新世界の殖民地をさへ失ふに至りたり。是れを實に英佛盛衰の永遠的分界線を書されたるものにして、すでに今日國力の伸張殖民地の經營等を始め、總べて國運の發展に於て常に他に一着を輸するの觀を呈し、加之他四烈強の後へに朦若たる所以なる可く、而して個は正しく右ルイ十四世が政策過誤の惡結果なりと見るの外なかる可きなり。

勿論今日の佛蘭西は決して貧弱國にあらず、之を同國經濟上の現狀に見るも、富強國なりと云へば則ち爾か云ふを得ん、然れども其富強や貿易の繁盛に原づける富強にあらず、唯だ在來の資本を英國若くは露國に放下し、座なから其利息を仰ぎて晏如として一時を苟媮するの富強なり、云はゞ前途に望み寡き富強なり、即ち彼れの

富強は不生産的富強にして復た是れ以上を期すべからざる状態にある者と謂ひつべし。若し夫れ之を至強至大の海運力を有し、時勢の推移開發に應じて萬里の外に利便を開くの勇壯快活に比せんか、彼れは既に西天に落下せんとしつゝも、姑く中天に懸れる太陽とも稱すべし。

吁、我れ、佛蘭西の行爲に従はんか、將た英米獨露を學ばんか。戦後の經營に關する第一着手の用意や、當さに此一事に在つて存するを知る可きなり。

日本は四面環海の島國なり、乃ち邊要國防の必要の歐洲列強の其れよりも、より必要なることは更にも云はず、國運發展の上より見るも、國力膨脹の上より論ずるも、若し「海」てふものに疎濶にして、海利活用の方途を講ずるを知らざらんには、來る可き日本今後の運命や、之を察するに餘りあるなり。加之狹少なる内地領域内に於ける生産物は、到底國家富強の基礎と爲すに足らず、勢ひ原料を海外より運搬し來つて之を内地に製造し、更に海外に輸出して、民利を増し、國益を起すを以て國是と爲さざるべからざる日本にありては、先海運力の強盛ならんことを期せざるべからず、且や強大の勢ひを以て日々夜々に繁殖しつゝある我人口の統計表を一瞥せば、有限狹少の地域に無限繁殖の斯民を容る可きにあらざることは、何人と雖も首

肯する所なる可し、是れ則ち海外移民事業の忽諸に付す可からざる所以にして、而して將來に於ける我貿易的勢力範圍の擴充も亦た斯業に依りて遂成せらるゝを知らば、則ち航業の發達を謀り、海運力の強大を致すは、今後國運の發展、國力の膨脹を策するに於て、唯一の手段と爲さざる可からず。要するに百貨の製造、即ち工業の興起と移民事業の繁榮とを企圖し、其目的に向つて歩武を進むるは、平和的經濟上の戰爭にして、而して其戰爭に勝利を得んは、云ふまでもなく戰鬪力の健全ならんとを期するにあるなり。健全なる戰鬪力とは何ぞや、曰く、進歩したる航業なり、發達したる海運力なり。故に吾人は信ず、日本の生命は海事なり、其血液は船舶なりと、非歟。

更に謂ふ。日露國交の斷絶するや、我勇敢なる海軍は仁川港にワリヤーク、コレイツの二敵艦を撃沈したるを始めとし、爾來旅順口幾回の攻撃に連戰連捷の榮譽を博取し、現戰域に於ける制海權は殆んど我手に歸したりき。然れども我海事にして進まず、即ち船舶の設備十分ならずして、海運力の脆弱ならんには、一旦獲得したる制海權も之を完全に維持する能はず、海權に伴ふ所の利益全然我手に歸せずして、却つて他の犠牲と成り了はらんも亦た測るべからざるなり。爾れば之を維持し擴充

して永遠の利益を我手に全有する上に於ても亦た海事の發達を謀るは、誠に至緊至急の切要事たるべきを忘るべからず。

願みて我海事の現狀を洞見すれば、吾人は轉た悔恨の情に堪えざるものあるなり。看よや、海軍一たび動き、砲聲を渤海の一角に聞くや、忽ち我經濟界に一變調を呈露し來たり、交戰的事情の影響として當然來るべき正當の緣由以外に於て海外貿易は阻遏せられ、海内の物價は不自然的に騰貴し、時に日用品需給の相伴はざることさへあり、隨つて出征軍隊に及ぼすべき影響の如き、亦た決して少小ならずと爲す。而して其素因を尋討すれば則ち船舶の不十分なるよりして、海運力に缺乏を生ぜるの一事、與つて力あるを知るべきなり。左なきだに不十分なる商船の大部分が海軍に徵發せられて、夫々其任務に服することとなり、海運に依つて流通す可きの百貨各商港に堆積するも、搭載するに船舶なく、日一日と空く時間を経過するに隨うて、一方には供給缺乏を告げ、一方には生産事業の不振に陥り、竟に經濟界に波動を及ぼすに至れるは、是れ則ち理の當然たり。蓋し此場合に臨み、如何なる實業家も有力者も之を鹽梅するに手段なかるべし。想ふ、たゞ此場合に於ては船舶補足の計を立て、以て焦眉の急を救ふの一手段あるのみ、是に於て乎外船雇入の事行はれ、郵

船商船兩會社を始め、各航業者競うて外船を雇入し、辛ふじて休止航路の復舊を謀る、然れども外船の雇入に就ては種々不利益なることあり不便利なることあり、未だ之を以て經濟的時局の困難を救済し得たりと云ふべからず、即ち今日に於て猶ほ其厄運に泣きつゝあるもの所在更に減ぜざるを見る。吁、海國たる日本海事の現状や其れ斯の如し、之を以て將來に於ける平和的經濟上の戰爭に當たらんと擬する耶、之に當つて果して戰勝を得んと期する耶、吾人は轉た危まざらんと欲するも得ざるなり。

蓋し海運事業の發達は海運事業其ものを以て直ちに利を營まんと謀る者にのみ委任すべからず、若し之に委任し去つて顧みざるときは、其發達や必ず遲緩にして、時としては進歩を休止するが如きこと無しとも云ふべからず、何となれば彼れ等の突進は利を獲る限度に止まり、一たび利を獲る能はざるを見れば、輒ち退却し、悠然として時機の再來を待つ等の場合多ければなり。

要するに海運事業をして大に發達せしめんと欲せば、海運事業其者を以て直ちに利を營まんと爲さず、之を以て別に利を營む可き事業の機關に供す可く志し、一意專念、大に盡瘁するを以て旨とせざるべからざるなり。是に於て乎吾人は營利以外に

於ける一大航業を企て、平時にありては海洋上の運搬に従事して移民貿易の事業を助け、一たび國家有事の日に際せば、直ちに御用船ともなり、假裝軍艦ともなりて、極力海軍の爲めに働く可きものを起し、而して後來大に其發達成功を期せんことを望んで已まず。是れ將た如何の方法に依りて其創設を畫す可き歟、曰く、露國義勇艦隊の方法に擬し、速かに日本義勇艦隊を組織するに若くもの莫からんなり。

前顯の如く露國義勇艦隊は國民の義金に依りて其基礎を築造せり。我れの之を組織せんとするや、亦た須らく國民の義心に訴へ、資を公憤の餘力に仰がざるべからず。然れども今や開戦に際し、戦時法規違犯の爲めに捕獲したる露國若しくは露民の船舶ありて、現に我所有に歸したるもの少なからず。依りて先基礎を之に取り、取り敢へず該船舶を以て義勇艦隊を創設すべし、亦た時に取りて好個の一手段にあらずや。將た漸次之が發達を謀るに就ては、別に策畫者其人の在るあらん、吾人こゝに淺膚なる方法を披瀝するの要なかるべし。左りながら當面に於て感覺するもの、一二を云はんか、彼の勇武壯烈なる戦死將校兵士の偉勳を頌し、其芳名を後代に傳ふる爲めに從來盡しつゝある種々の手段を一變して一に船舶を建造することゝ爲し、即ち故廣瀨中佐の爲めには廣瀨丸を造り、其武徳を長へに海に依つて傳ふることに、

爲すが如き、其他總べて國家に偉勳ありたる人士又は事業に功勞ありたる諸先輩の爲めに、種々の紀念物を作製して其芳名を後代に傳へんとする場合に於ても、其資を集めて一に船舶に投じ、紀念船舶を作つて直ちに其名を船舶に命ずべし、即ち正成丸、西郷丸、川上丸の如し。但し吾人は彼の銅像を鑄造し、若くは紀念碑を建設するを以て強ち無用の事なりと論斷する者にあらず、銅像も或る場合或る人士の爲めには必要なるを認む、紀念碑の建設も亦た然り。然れども吾人は信ず、齊しく功勞偉勳の徳を頌し、且つ歲月と共に其消滅するを憂へて紀念物を製作し、之を千古不朽に傳へんとするものなれば、單に不生産的紀念物として、たゞ外觀の壯美を飾るに止まらんよりは、生産的紀念物を製作して外觀の壯美を飾ると共に大に國力の充實を計るの手段に出づるに若かざらん。是れ蓋し其紀念物を作らるゝの本躰たる先輩人士の意も亦た爰に在りて存せんと。世人以て如何と爲すか。

猶ほ此他に於て汎く全國の士女より少額の義金を募集する方法を講ずべし、譬へば全國の老若男女をして貧富を通じ一人に付一箇月金五厘宛を貯へて義捐せしむるものと假定せよ、四千五百萬人一箇月の貯金義捐高二十二萬五千圓なり、斯の如くにして一箇年を経なば(即ち一人前の義捐貯金六錢宛)其總高二百七十萬圓に達す、

若し夫れ斯の如くにして十箇年を経んか(即ち一人前の義捐貯金六十錢宛)二千七百萬圓となり、之に十箇年間の利殖金を合算せば、蓋し莫大なる金額に達せん、之を以て義勇艦隊の船舶を造くるとせよ、露國今日の義勇艦隊は決して羨むに足らざるなり。將た其貯金義捐募集方法の如き、各府縣郡市町村に委託し、適當の方法に依りて艦隊本部に收納することゝ爲さんには、誠に易々たる手數のみ、何程の收納費用をも要せざることなるべし。

其れ斯の如く簡易適當なる方法だに制定せられなば、別に義勇艦隊の爲めに多額の義金醸出を促さざるも、艦隊は容易に成立し、容易に發達することを得ん。左りながら前述の義務的貯金(?)以外に於て、少しく全國の富豪を勧誘し、其義心を喚起して、義金の醸出を促さんか、忽ちにして五隻や十隻の大船舶を製造するの資は集まるなるべし。彼れ露國の如き國にありてすら國民が「海」てふ觀念の煥發と共に一たび海運の必要を覺知するや、倏忽の間に四百五十萬留の義金を醸出したるにあらずや、忠亮無比なる我國民の鋭敏なる感覺に訴へて其成功を期せんか、彼れ露國義勇艦隊の如き脚下に一蹴して東洋に飛躍するに至らんこと、敢て難きに非るなり。勿論義勇艦隊の乗組員には海軍士官以下水兵を以て之に充つ可く、平時は低廉の運

賃を以て百貨の内外海運に従事す可く、而して其所得を以て乗組員の給料其他の費用に當つるときは、即ち國費に於て多少の餘資をも生ずるを得べく、加之、元、營利事業とするものに非らざるを以て、純利を得れば即ち得るに隨ひ、亦た皆積んで事業擴張の資に充つべきなり。斯の如くにして駸々として進まんか、將來日本義勇艦隊の盛大ならざらんことを欲すと雖も豈其れ得べけんや。

戦後の經營や頗る多端なり、然れども吾人は海運力の養成擴張を以て第一義と爲さざるべからざるを信じ、而して之を爲すの第一着手は義勇艦隊の組織にありと信ず。是に於て乎區々の意見を披陳して大方に問ふこと斯の如し。

時局と海の関係

志賀重昂

今日は帝國海事協會より何か講話を致す様にとの事でございます所、御承知の如く日本と露西亞との戦争は正に關ならんとする時機でございますし、且つは帝國海事協會の講話でございますが故に、海國と内陸國との對抗運動を致すに付き(切言しま

すれば島國と大陸國との競争であります)兩方にどう云ふ長所があるか、どう云ふ短所があるかといふ事を判断するのに甚だ好い時機と考へます、然れば島國と大陸國との競争を地形上より比較致し、更に又時局に關して海事上の意見を述べ聊か皆様の御賛同を仰がうと思ふのであります。

さて我邦は地形上固より島である、其島と大陸とに付き夫れく地形上の關係などと申しますると、何か漠然たる事を申上げるやうでありますが、然し總ての人事は地形に制裁せらるゝものである、皆様が三疊敷の部屋に御出でなさります時と二十疊敷の部屋に御這入りになります時と、現に御考が違つて來る、三疊敷の所に居つた時には細かいグジグジしたやうな御考が出ますが、二十疊の部屋に御出でなされば忽ち氣象が朗かとなつて胸の中も何んとなく大きくなる、かくて同じ人であつても其の出入する地形の大小に依つて、胸中即ち無形上の事にまで自から違つて來るといふ事は御分りになるのである、又二階の下に御出でになりました時には、餘り餘處も見えぬから細かいグジグジしたやうな御考が起る、然るに僅か十段かそこら即ち直徑から言ひますれば僅か一間半か二間位を上ぼり二階へ御上りになり四方の景色などを御覽になりますと、自分の胸の中が餘程違つて來る、然れば地の高度

に依つて胸中即ち無形上の事にまで自から違ひを及ぼすといふ事が分る、又自然界の境遇に依つて色々制裁されるといふ事は今日でも左様である、今日が若し晴天でございまして非常に朗かな日でありましたならば、有地中將、小笠原少佐が御演説にもなるといふ事であるから、多數の御方が「ドシ〜」と御出でになつたこと、思ふ、併ながら此の通り大雨が降ります故に一部の學校生徒諸君は多數御出掛になつたが、其外の御方の御出掛は少いと云ふ譯である、此の大都會であつて下駄もあれば靴もあり傘もあれば車もある、殊に又た近頃は廉い電車も出來ましたから往來にオツクは少いのである、それでも雨が降りますと先づ行かうと思つた者も迷うといふ事になる、自然力といふものが人事に大なる關係を及ぼすといふ事は以上の如き單純なる事實を以ても御分りになる。

是に至り地形上より觀察して、島國たる日本と大陸國たる露西亞、海國たる日本と内陸國たる露西亞と對抗運動をする時は、雙方に長所と短所とがあるといふ事が直ちに御分りになる、獨逸の學者は歐羅巴中の邦國を區分しまして(一)島國、(二)島多き國、(三)可なり島ある國、(四)島少き國の四つに別ちました、此の考察に依つて區分致しますれば、日本は純然たる島國、即ち一〇〇%島であります、歐羅巴露

西亞は各國中獨立國としては一番島の少い所で、即ち全面積に對し島が〇・一七%といふのであり、我が邦とは全く反對であります、即ち一方は單純なる島國、一方は最も島少なき國、極端と極端であるが故に比較をする上に都合が甚だ好い、それから國の面積に對する海岸線より云へば、誰も御承知の通り日本は世界第一の海岸線長き國、即ち日本は面積三六方里に付き海岸線一里である、歐羅巴露西亞は一五〇方里に付き海岸線一里であります、一方は三・六方里に付き海岸線一里の割合、一方は百五十里に付き海岸線一里の割合であり、即ち極端と極端でありますから、海國と内陸國との戦争に就き雙方を比較するに都合が殊の外好いのであります。

是に至りて元來島國といふものは如何なる長所ありやと申しますと、此處には多數の商船學校の學生又は海員の御方が御出でになりますから、自分に能く御考へなると直ぐに分る、島國といふものは船と同じものであります、洋海の中に島が孤立して居るのは、洋海の中に船が居ると少しも違はぬ、船の中に御這入りになれば其船の安危存亡は船長の徳望と手腕とに最も多く待つのである、依つて何事も船長を戴いて之を愛慕し之を尊敬する、而して船長も亦た乗組員なり同船者を愛撫し、是に至つて船長と乗組員との關係は離る可らざる様になる、浪風穩かな時には或は

トランプをやつたり、或は碁を打つたりし、其間に於て「貴様はソウ云ふ狡猾なことをしてはイカナイ」とか「己はさう云ふ積りぢやなかつた」など、言つて小なる争論は致しますこともあれども、さて船が岩に打當つて今にも毀れるとか、又非常な風濤の起つた時には、乗組員はいづれも利害を共にして居るから忽ち一致團結し、申合はせた如くにスツカリ一纏めになつて其船を救はうといふ考になるのであります、即ち船の大きくなつた島國でも同様である、船長を尊敬し船長を愛慕すると同時に、總て船中の安危利害の觀念が船長に集つて來ると同じことで、島國人は常に君主を尊敬し君主を愛慕するといふ事は我が日本は固より、何れの島國の歴史に於ても世界到る處に其例を見る、英吉利の歴史でもジュテチャの歴史でも島國の歴史を御覽になれば直ぐに此事が御分りになります、然るに是が若し島國にあらずして陸續きの國でありますれば、四隣から侵害せらるゝこともあるし、時には蠶食せらるゝこともある、或は敵國の侵畧を被つて君主の血統が斷絶することも問々ある、併しながら島國に於ては左様な事は無い、唯今も申す通り陸續きで無くして自分は自分で洋海中に孤立しチャンとして居りますから、外國から侵畧を受くることも殊に少いし、又侵畧を受けて其君主の血統が斷絶するといふ例は殆んど無いのであ

ります、此の如き譯でありますから君主の威嚴、君主に對する尊敬心は益々高くなり、而して君主も亦た人民を非常に愛撫し、かくて君臣は相互離る可からざる關係となり、益々勤王心が發達して來るのである。

これより段々順序を逐つて申しますれば、島國の住民は唯今申したる如く同じ船に乗つたやうなもので、別な顔を雜へて居りませぬ故に、一家族の如き感じをなして居り、相頼み相頼まれ合つて居る、然れば外難の來つた時には忽ち一致團結する、先刻も申しました通り船が岩に打當るとか或は難船する時には、乗組人が一致團結するといふ關係が御分りになりますれば、一家族一等親の位地にあるが如き國民でありますから外難に當つて互に一致團結するのは別段珍しい事でも無い、全く然るべきことである、それから又島國人は一つの船に乗つたと同じことで、洋海中に孤立して居りますから、他人の力を借りず、自から自分の處を守り自分の處を防ぐといふ觀念が非常に強く、隨て獨立心が強く、負けぬ氣が強く、自分の國の事は自分丈けてやつゝけると云ふ考になつて居る、是れも不思議でも何でも無い、こんな觀念は島國人には段々發達して來る。

それから又島國といふものは何處でも左様であります、四方より船舶交通の衝に

當つて居りますからアチラからもコチラからも往來の出入が多い、随つて色々の人種なり色々の民族なりが其島國に集つて来る、我邦にて申しますならば、是は私の一尙不案内の事であるが、先輩の人種學者や史學者は誰も申す事で、我邦には蝦夷人かコロポックル人か何れか分らぬが一種土着の人種が一つ、それから大陸より來た人種が一つ、更に又た南方より渡來せる馬來人種が一つ、此三つが我邦の人種を形造つたのである、所が四面水に圍まれて居る島國へ渡來せしより、假令三つの人種が來ても四つが來ても五つが來ても六つが來ても島といふ一個の坵場の中に這入つて仕舞ふたから、何時の間にか各種の人種は自然と一緒になつて結婚もし雜ざつて仕舞つて、而して同じ思想、同じ感情を所有し、同じ言語、同じ文字を使つて居る一種新たな人種になつて仕舞つた、即ち如何なる多種の礦物も坵場の中で鎔解して一つの新たな礦物となると同じである、國民全體の間に疏通し共通して居る國民的特性を作り、而して同一の君主を永久に戴いて居る、これは我邦ばかりでは無い、島國は何處でもさうである、英吉利の如きも皆さんが御承知の通り、或はアングル人、或はサクソン人、或はノルマン人、或はブリトン人、或はピクト人、或はデンマルク人などが方々より來たのであります共、矢張り一種のイングリシユ

と言つて宜いか、我々から見れば同じ言葉、同じ思想、同じ容貌を持つて居り、果して是がデンマルクの血統であるか、アングルの血統であつたか、我々日本人などより見れば一向分らぬ一種の人種を作つたのである、何處でも以上の如き事情でございませうから島國人は非常に能く凝まる、同じ島で同じ思想、同じ考を共通して居り、隨つて固く凝まつて居ります故に、島國に於ては人心がバラ／＼としたり又は分離するなどの事は無いのであります、それからモウ一つは唯今申す様に内は自ら守り自ら防ぐといふ負けぬ氣の人種が居りました、且つ同一の君主を永久に奉じて居りまするが上に、其人種といふものは假令澤山な人種が渡來いたしましても一つの人種になつて仕舞ふのでございますから、内の事は決して心配は無い、かく内顧の憂がありませんから、島國の歴史を御覽なさい、其島を根據地に致して居りました皆力を國外へ伸ばすのである、何處へ参りましたも島國に至つては内顧の憂が無くして内から反對する者は無い故に、力を十二分に外に向つて伸ばすことが出来る、是亦島國の地形の然らしむる所で、甚だ長所であります。

モウ一つは島といふものは何處でもさうであります、要害でありますから、其上に砲臺を築くに便利である、東京灣口にある猿島砲臺、洲を土臺とせる富津砲臺、

大阪灣口の友ヶ島砲臺、露西亞のクロンスタット島砲臺、獨逸のヘルゴランド島砲臺、米國ニューヨーク港口のガバナース島砲臺等、到る所島なり暗礁なり岩なり洲の上には土臺が出来て居るから其上に砲臺を築くのであります、然る所島國は何であるかと言ふと四方の洋水を城濠となせる天然の大なる砲臺であります、外國より襲ふて來る時には、外に於ては先づ第一に風と浪が之を防禦する、内には先刻申上げた通り負けぬ氣と獨立心とに強く、勤王心に富み、而して一人種に凝まつて居る國民が後詰をいたして居りますから、外寇は容易に島國に來襲し得ないのである、縦し來襲するも輒ち大に破らるゝのである、日本の歴史より申しても、又世界各國の歴史を御讀みになりましても以上申上げた各事實は直ぐに分る、先づ日本人が外難に當りました非常の大事件は今回の日露戦争と往時の元寇であります、元寇は忽必烈が亞細亞より歐羅巴の半部を併呑したる大勢力を以て日本を侵しに來たのである、其時に日本人が今日露西亞に當ると同じやうに非常の負けぬ氣と獨立心を發揮し、又非常なる勤王心を發揮し（其時は鎌倉の執權が權力を有し居りましたから勤王心を愛主心と換言すべきか）更に又大颶風と大波浪とが聯合して元寇を逐ひ除け、元史にすら十萬之師生還者僅三人とあります、此「三人」といふは近頃歴史

家の考證に依れば三の下に「萬」の字を落したのであるといふ事である、それにした所が十萬の師、生きて還へる者三萬人とは實に酷く破られたのであります、是は決して日本ばかりぢや無い、同じ例が西洋の歴史に幾らもあります、シ、リアは御承知の通り伊太利の西南に在る島である、佛蘭西王ルイ八世の王子シャル、が大兵を率ゐて此シ、リアを征伐し上陸して居つた、すると耶蘇昇天日の晩にシ、リアの島民が皆奮然として起り佛蘭西の大兵を塵にした、昇天日の事をヴェスパー(Vesper)と言ひますから此事件を歴史上に「シ、リアン・ヴェスパー」と申し有名なものであります、又バルチック海の中にボルンホルムといふ噴馬に屬する島があります、それを瑞典が征伐いたし、其大軍が此ボルンホルム島に駐在して居りました、さうしまするとボルンホルム島民は奮然として起り、瑞典の兵營を夜の間に襲ひ、瑞典の大軍を悉く屠つたのであります、其時に十二人助かつて本國へ敗報を齎らして行つた、此十二人も偶々兵營の外に居つた故に助かつたのであります、丁度シ、リアの例にそれが合ひますから特に耶蘇昇天日の晩に行つたのでは無いか、歴史家が之を稱して「ボルンホルム・ヴェスパー」と呼ぶのであります、それから次は西班牙が世界を殆ど包羅する勢ひを以てアルマダの大艦隊を率ゐる白帆天を蔽ふて英吉利の島を

襲ひ來つた、さうすると女王エリサベスは馬に乗つて劍を按じて將士を激勵し、艦長のドレーキは戦に出る時、『此役臣は西班牙王の命を燬くべし』と言つた、英吉利人は此の如き意氣込みにて奮戦し、アチラコチラで西班牙のアルマダ大艦隊を打破たと同時に、大なる颶風が起つて西班牙の艦隊は大概覆没して仕舞つた、是は丁度我邦の元寇の役と違はぬ、斯う云ふ例を申すと島國には幾らもある、此等は皆島國人が其長所を發揮したものである。

さて之に反しまして大陸國は如何であるか、面積は廣く、四面は水に圍まれて居らずしてバツとして居る、四隣と地續きとなり締りが無い、それでありませうからさう云ふ所に居りますれば人心は散漫となり、決して纏まつて居るものには無い、鑄型に入れてあるやうな島國とは大に違ふ、此席上には商船學校の生徒諸君や海員が多數御臨席でありますから、復た船の比喻を引きますが、船に乗らぬ前には今日は天氣が悪いとか、風が吹きそうだとか、雨が降り出すからなど言つて躊躇することなどもあるが、一たび決心して船に乗つて仕舞へば寧ろ彼岸まで行つて仕舞へといふ者になる、それが陸上にあると人心が散漫として歸着する所が無いのであります、此の如く内陸國にては人心が散漫として居る、人心が散漫と致して居りますれば國

民の一致團結も堅くない、又人心が散漫として居りますから勤王心も薄い、四隣と戦ひを交へて時に自國の領土を擴げることもあるが、時に又敵より領土を削られることもあるし、さうして又君王の家統を斷絶せしめらるゝことがございますし、君主自ら降参する様な事もある、隨て君臣の關係は薄くなつて來るのでありますから、大陸國は此に至つて損の點があります、以上の如く勤王心は少く、負けぬ氣が少く、總ての上に人心がバラ／＼と致して居つて要領を得て居らぬ、其上に四方と境を接して居りますからアチラからも別の人種が來、コチラからも別な人種が來るといふので一向纏りが附かぬ、是が島國のやうな所なれば先刻申しました通り一つの垣塙の中に入つて一民族となるのでありますけれども、内陸國ではこれが出來ず、各人種共に其固有の性質を有し、固有の言語を話し、固有の宗教を守つて居りますから、始終ガタ／＼として分離し易いのであります、例へば露西亞で申しますれば、先づ白人種の内には固有のスラヴ人種の外、多數の獨逸人が居る、商工上の權力を占めて居る者は此獨逸人である、多數の猶太人も居る、金融の權力を握つて居る者は此猶太人である、一スラヴ人種の内にも西部には波蘭人が居り、ボヘミア人が居り、ウエンド人が居る、南部へ行くとセルヴィア人が居り、ブルガリア人が居り、クロチ

ア人が居る、東部へ行くと大露西亞人、小露西亞人、白露西亞人が居る、スラヴ人種の外に蒙古人種が居る、此蒙古人種の内フィンランドに芬蘭人あり、韃靼人あり、カルマック人あり、チュルコマン人あり、チュングス人あり、ヤクト人あり、ゴリヤック人あり、サモエズ人あり、ラップ人あり、オステヤック人あり、ヴォグル人あり、皆思ひ／＼に違つた宗教を奉じ、別々な感情を所有し、別々な言語を使用して居る、先づ宗教といへば、國教たる希臘教の外に耶蘇新教、耶蘇舊教、自由神教がある、蒙古人種は回教、喇嘛教或は佛教を信じて居る、かく銘々言葉も違ひ思想も違ひ感情も違ひ宗教も違ふ人種が露西亞の如き大平原國に陳列されて居るが、實は中央に非常な権力があつてこれを壓服して居るから纏まつて居るのである、大なる威嚴のある中央政府があつて皆を抑へ付けて居つたから、縱令人種が違ひ言葉が違ひ宗教が違つても今日までは治まつて行つた、所が今日外國と戦争をして連戦連敗したといふ事になりますと、中央政府の権力が殺がれ、威嚴を大に失ひますれば是より各人種はバラ／＼に離れて來るのであり、是は地形の然らしむる所であり、大陸國の弱點が即ち此所にあるのであります、又内陸國にては四隣に境を接して居るから四隣の治亂興敗に依つて警戒をしなければならぬ、四方八方を防禦せねばならぬ、

例へばバルカン半島の紛糾とか、土耳其の問題とか、獨逸との國境問題とか云ふが如き四隣の境遇に依て様々な事が起り始終心配をする、それで決して國を擧げて或る外國と戦をするといふ事は出來ない、是が日本の如き島國であれば、例へば今日の如き露西亞に向つてもさうであるが、國を擧げて國の兵力を悉く擧げ兵力を露西亞と云ふ外敵に向つて傾注して當る事は出來ますけれ共、内陸國にありましては境を接して居るものが虚を擣き來ることなどもありますから、之を慮つて、それだけの警戒は加へそれに應ずるやうにして置かねばならぬ、されば露西亞の如き日本と戦としても自分の力を一方の日本に向つて傾注する事は事實に於て出來ない、斯う云ふ様に力を一方に専らにすることが出來ないのが内陸國の弱點であつて、即ち我日本など、大に違ふ、今日我邦は婦女童幼に至るまで一絲も紊れず露西亞に當らうとするが、露西亞は大學生や不平黨が色々の反對的宣言書を出したりする、バルカン半島の問題には警戒する、此等の事實は私が申し上げぬでも御承知と思ひます、島國と大陸國との事情の違ふといふ事は是に至つて能く御分りになるのである。

以上は島國と大陸國との對抗運動に當り、島國の短所とも申し上げましたるが、併しながら島國に決して長所ばかりある譯は無い、又大陸國にも短所ばかり

りは無、先づ島國の短所の方から申すと、島國は地積にした所が山河の様子にした所が動植物にした所が總べて小さい、此の如き小さな地形の間に生れ小さな地形の間に人と爲り小さな地形を見聞して居るより、隨て腹の中が小さい眼界が小さい、どうしたつて見聞が狭い、而して今回の戦争は日露兩國の運命に關係する大變動なれば、今回の戦争程地形上より由來せし兩國人の長所と短所とを露骨に證明したものは無い、日本人が島國人としての長所を悉く發揮したと同時に亦た島國人としての短所を悉く發揮した、開戦以來日本人は非常な切迫をいたした、例へば露西亞の軍艦が何處かチョツと日本海へでも出て來たといふ評判があれば、先刻有地理事長の御話の通り僅かの貯金をも我れ先きにと争ふて引出しに行つたといふやうな切迫したことは、御互日本人としてどの位最負眼に見ても島國人の短所は現はれて居る、總てさう云ふ考だから、ヤレ辨當は梅干のみにして仕舞へとか、九州の或る學校では生徒は決して下駄を穿いて來ちやいかぬといふことを喧ましく行つて居る由、其他の縣にては多數の學校教員を解備して仕舞つたといふ所もある、此等は全く島國民の短所を現はしたもので、是は日本ばかりで無く島國たるヴェチチアの歴史を見ると萬事に付け日本に能く似て居るものがある、ヴェチチア即ちヴェニス

矢張り一〇〇%の島で出來た國である、ヴェチチア人は愛國心が強く、其使節公使の本國に對して忠愛なる事、軍人の清廉潔白なる事は「歐羅巴の歴史中にヴェチチアに並行するもの無し」と幾らも書いてある、又「忠臣事二君」といふ意味は歐羅巴人の道徳に之を發見しないが、唯々ヴェチチアに於ては一人は二個の主人に用立つべからず」といふ言葉があり、ヴェチチアの歴史に限つて此事蹟があります、さうして一方に於ては國民は一致團結して大に軍備を擴張し、又商船を擴張し、造兵造船所の大なるものを作つた、土耳其と戦争の時には完全に武装せるガレノ形の船を一日の間毎朝一艘づつ造つたといふ程である、夫故にヴェチチアの造兵造船所といふものは歐羅巴列國が實に恐れて居つた、故に或は探偵を發し、或は策士を遣して内部の秘密を探り且つ職工を出來る丈け離間中傷し、以て造兵造船所を打ち毀はそうとした所が、どうしてもそれが出來なかつた、さうしてヴェチチアは小島國であるにも拘らず、伊太利大陸の一部分及アドリアチック海の沿岸は固より、更に東羅馬の帝國に入つて之と戦ひ、有名なる東羅馬の帝都コンスタンチノープルまでも取つて仕舞つた、コンスタンチノープルよりして多島海の沿岸及び其各島嶼をもズツと取つてしまつた、多島海及地中海にヴェチチアの旗即ちセント・マルク

の旗章は翻へらぬ港とはなかつた、其後ヴェネチアは其競争者たる伊太利大陸のジェノヴァと戦をした、其時ヴェネチアは國庫が大に缺乏して居つた、すると其頃は東洋と貿易をして居つたから随分色々な美術品や財寶がヴェネチアにあつた、それを皆競つて献納して鑄型に入れて或は武器を作つたり或は貨幣を鑄造して仕舞つた、ドンな美術品でも惜氣なく皆鎔解してトウ／＼仕舞ひには基督教の御寺の聖壇の裝飾金具の立派なるのを打毀はして鎔解した、さう云ふ勢を以てジェノヴァを破つた、かくてヴェネチアの位地は隆々として上ぼり各國の帝王及び法皇は自ら屈してヴェネチアに同盟を求め來り、遂にヴェネチアは一小島國を以て「歐洲列國會」の仲間入りをなした、土耳其が亞細亞、亞弗利加、歐羅巴の三大洲に跨がる大勢力を以てヴェネチアと戦ふた時、ヴェネチアは西班牙及び羅馬法皇と同盟して土耳其に當り、レバントの海戰に於て土耳其の海軍を根本的に破壊せしに拘らず、同盟の諸國はヴェネチア人が戰勝に馴れて驕慢となつたのを見、漸次に離れ去り、遂にキプロス島を土耳其に割讓せざるべからざるに至り、更に又戰勝の餘威に乘じ島國を以て餘り過大の領土を大陸に擴張せし結果、四方八方の防備に暇なく、奔命に疲れ、國力日に衰へ、遂にナポレオン帝の爲めに滅ぼされました、以上の如く島國

は非常な長所があると共に、短所のあるは免れませぬから、短所はどうしても御互に矯正しなければならぬ、長所は益々助長して行くと同時に、短所は十二分に排斥しなければならぬ、果して日本の今日は島國人としての短所を十分に現はして居る、過度の節儉論などは宜しく無い、勤儉は誰れも御承知の通り大變宜しい、勤勞して儲けてそれを儉約することは大變宜しいが、それを「勤」はせずして「儉」ばかりして居り、即ち勤勞して一錢を儲けるにあらずして儉約して一錢を貯へるから、世の中に二錢の融通が塞がる故に、不景氣の來るは當り前であります、又不景氣不景氣といふ如き言葉は故らに立てても宜いのに、神經質でそんな聲を口癖の様に立てます、是等も島國人の短所を現はして居る、又御互健康なる者が酒を飲めばこそ大きな聲を出したり或は亂暴なことをも致しますが、アルコール中毒に罹つたり又は腦の不健全な者は、酒を二三杯飲まねば手紙を書くことも出來ぬ、それと同じく十日に一遍二十日に一遍位何處かで鷲を捕へたとか又鷹を捕つたとか、靈火が霧島山から發したとか、箱崎八幡の鳩が西へ行つたとか、そんな事を以て人を勵ますのは、到底長久に國民を刺激する所以で無く、腦の不健康なる者に一時酒を飲ませたやうなことである、當座は宜いけれ共、實を云へば國民を病人視したる譯であります、一鉢

鳩といふものは卵の原産地に向つて歸るべき性質を持つて居る、それだから鳩は使鳩として用ひる、何處へでも飛んで行つて卵の孵つた所へ歸るものである、即ち偶々何處か同一の方角を指して飛んで行つたものであるのに、それを以てヤレ箱崎八幡宮の鳩が西の方へ行つた、アレは露西亞の方へ行つたのだと言つて騒ぐ、又霧島山にしてもあの火山は時に噴出して來ると非常に煙を噴くことがあります、それであるから此頃の大噴火は偶々氣象の變化に依て生じたに違ひない、それから又鷹にしても朝鮮海は舊北地方で鷹の多い所であるから、森へ止らうとか山へ止らうとか思つて居る所へ、近頃船の出入が多いから、偶々帆柱の上に止つたに過ぎない、遠洋航海の時、帆柱の上へ信天翁ちんてんとうが止つたりする、又他の鳥が澤山止つたり致します、それを水兵が捕へて籠へ入れて楽しんで飼つて置くなどは能く見ることでも何も不思議なことではありませぬ、さう云ふ不思議でも何でも無いことを以て、國民を奮興せしむるなど、云ふ様な薄弱なることでは、長久に露西亞に當る思想を却て弱からしめる譯だから、是等はどうしても御互に注意しなければならぬ、島國の短所は飽く迄も矯正しなければならぬ、長所は益々發揮させて短所はどうしても矯正しなければならぬ。

それに付て如何したならば島國人の短所を矯正し得るかと言ひますと、是は私が發明した議論ぢや無い、其の議論の發言者たる先輩の名前を出しますが、彼のプロフェッソル・キルヒッフが「島國の人は、後ろを向けば小くなるが、前を利用すれば規模は大きくなる」と言はれました、成程ツイ後ろを見ると、山が聳へ陸が限つて居るから版圖は是外ないかと思つて小さな考が出るが、前は四面海で是が我が領分である、我は之を利用して行くといふ考さへ出れば、決して規模が小さくなる譯が無い、彼のノルマン人なり、嚙馬人は極く小なる半島から出てアイスランドを發見し、グリーンランドを發見し、コロンブスの發見前五百年に北亞米利加の一部を發見した、又ノルマン人は佛蘭西、英吉利を征服し、又古の希臘なり中世のヴェネチアなり今の英吉利なりは或は小半島或は島に國して居つて、皆海を利用し行つたから、それで規模が大きくなつたのである、島國人の短所を矯正して日本國民の度量を擴げ國民の眼を開き國民をしてモツと規模を大きくせしむるには、後ろの山を見ずして前の海を利用せしむるにあり、あらゆる方面に海を利用せしむるにあり、此の海を利用する方法に就きましては、此帝國海事協會の御方などが非常に辛苦經營をなされて居ることと思ひますが、詰る所が四面の海を我が物にするといふ考に

なりさへすれば、島國人としての短所を矯正するに決して困難をすることは無いと思ふのである。是は小さな例であります但我邦でも左様であります、極く豆粒見たやうな地積の小さい所で米も十分に出来ぬ、山が多くて仕方が無い所があります、それは志摩國とか安房國とか若狭國とかいふ所である、ア、云ふ所では人民はどうするか、さう云ふ所の者は當面の海を利用する、安房國であると伊豆の七島をステーションにして遠洋漁業をするし、若狭の人はどうしても餘所へ出て行かねばならぬ、今の北海道——蝦夷を初めて平定した松前家の祖先武田氏は若狭から行つた、又若狭よりはドシ／＼布哇へ出稼に行く、それならば志摩國はどうであるか、志摩國からは日本で初て海軍を發達せしめた九鬼嘉隆、徳川幕府の御船奉行でありました小濱、向井の二氏も志摩から出た、伊勢の度會郡の南岸が矢張り志摩に引附いて居り昔は志摩の部であつた、所が其處からして徳川幕府三百年間の航海業を殆ど比物の無い程に發達せしめた河村瑞軒を出した、又近世に於て日本の海軍及び商船を今日まで發達せしむることに最も力あつた攻玉社長の近藤眞琴先生は志摩鳥羽藩士である、山ばかりあつて百姓することも出来ない仕方が無い所、餘程下等な下等な所からは却て前陳の如く海を利用した人が出るのでありますから、日本人が銘々前

の海を利用することになつたならば御互に規模が大きくなるのであります。

付きまして島と海國との御話の序でに私が皆様に御記憶を願ひたいことはコマンドルスキー諸島の事である、日露の戦争が終局を告げました曉には、諸君と俱に輿論を動かしてコマンドルスキー二島の處分を致して貰ひたい、樺太の事に付きましては皆様も御承知の通り元とく日本の物であつたから之を還付せしむるといふことは無論のことであるが、それでも議論が喧しく樺太還付同盟會などいふものが設立になりました、然るにコマンドルスキー二島——二島と言つても實は大きな島が一つでそれに喰付いて居る一小島がある、是丈けであります——を冷視して居るは如何かと思ふ、コマンドルスキーといふのはカムチャツカ半島の東沖九十哩ばかりで、我占守島より程遠からぬ所にあります、二島より成つて居りまして一つをベールリングと申し、一つを露西亞語でミエッド(銅の義)と言ひ、英吉利人が翻譯してコッパ、アイラント(Copper Island)と言ひます、露西亞語で銅をミエッドと言ひ英吉利でコッパと言ひますから日本では銅島と申したら宜うございませう、さてベールリングと銅島との二つであるが、ベールリング島は八十五方里ありまして、銅島は十方里しかありません、即ち小さな二島ではありますが、是が露西亞の臘肭獸獵

と臘虎獵の根據地になつて居りまして、露西亞はベリリング島の方に臘納獸の北大生殖場と南接息場との二ヶ所を持つて居ります、銅島の方にも二ヶ所の生殖場を設けまして、かく臘納獸の生殖場を大小四ヶ所持つて居ります、是へ軍艦を巡邏せしめまして近海に來る臘納獸、又は臘虎の獵船があると之を捕獲するのであります、所が日本から今日までそこへ行つた臘納獸獵船、臘虎獵船などは、露西亞の巡洋艦又はガンボートより大砲を撃ち掛けられ、船長も乗組人も捕獲されたことも度々あります、或時には一度に何十艘も捕まつたこともあり、或は船が打ち沈められたことも澤山あります、そこで平和克復後、日本にては露西亞より償金を取るか地面を取るかといふ議論が起りませうが、償金を取るのも宜いであらう。然かしこれも困つたもので相手がアー云ふ國柄であるから果して約束通り償金を支拂うかどうか分らぬ、夫故に償金を拂はぬ間は大陸に兵隊を廻はして置かなければならぬ、隨分骨の折れた話であります、又假令沿海洲位取りました所が山林、農業の利益は無いといふことは専門家の言ふ所でありますから之を取つても如何かと思ふ、ニコライスクの砲臺、浦鹽斯德の砲臺などを打壞はさしむるのは宜いであるが、沿海州を取つた所で軍事及經濟上から言つたならば如何であらうかそは今日から問題だと思ふ、

寧ろ樺太還附の外にコマンドルスキーの如き小さな島を得るのが名に於ては日本人の食らざる所、公明正大なる所を示して、外交上に一機軸を開きたる所を示し、其實は實利實益を占めるのである、要するにコマンドルスキー島は日本人がベリリング海へ臘納獸獵及臘虎獵に參りますのに、何時までも眼の上の瘤であります、コマンドルスキー島といふものは我邦が平和條約を締結する時に伴ふべき問題であるといふ事を皆さん今日より御記憶を願ひたい。

以上色々な事を申し上げましたが、要するに今日日露戦争に當つて島國と大陸國との得失に付き地形上から御研究あらん事を促し、並に島國の長所を愈々助長し、短所は益々矯正するといふ事を願ひ、而して終に臨みましてコマンドルスキー島の事に關し諸君の御記憶を願ふたのであります。

戦時に於ける商船の効力

遞信書記官 湯 河 元 臣

私は茲に「戦時に於ける商船の効力」といふ題を掲げて御話することになりました

が、此問題に付きましては、チヨツと一讀しますといふと、何か御用船にでも乗組んで居つた者が、軍事輸送の細かい状況でも御話するかの如き感じを御抱きになる方もあるかも知れませぬが、私は海員でもございませぬ、又海軍に關係のある者でも無いのでございまして、詰り遞信省に居つて此船の事務の或部分を扱つて居りますから、其職務上多少感じました事柄、及び職務上に關聯して變動のあつたことなどを御話したいといふ考であります、或は問題のみ非常に聲が大さうございまして、實質は甚だ不完全な御話になるかも知れませぬが、其點は御諒承を願ひます。

商船と申しますものは簡單に觀察いたしますといふと讀んで字の如くに商賣に従事する船といふ事でありまして、即ち甲の土地と乙の土地との間で、荷物又は乗客を運搬するといふ物でありますので、此意味から申しますといふと、商船といふものは、人力車、荷車といふものと少しも違はないのであつて、唯々其規模に大小があるといふ位なことに過ぎぬのでございませぬ、併ながら各國の法律規則等を見ますといふと、此商船といふものは、決して單純なる一つの商賣道具とのみ見て居らぬので、色々特別な取扱をなして居るのでございませぬ、先づ一例を申しますといふと、外の商賣道具には名前などいふものはありませぬが、船には必ず名稱

があります、國籍(ナシヨナリチ)といふものを持つて居りますし、又本籍をも持つて居る、色々六つかしい規則がありまして、其國籍を持ちまするにも種々の條件があります、例へば日本の船舶となつて、日本の國旗を掲ぐることの出来るといふ船は如何なるものであるかといふと、先づ以て其所有權の全部が日本の臣民に屬して居らねばならぬ、會社團體に於きましては、其團體を代表するところの取締役とか理事とかいふ者が全部日本人で無ければならぬのであります、其他の者の所有に係ります船といふものは、日本船舶といふ特典を受けることは出来ないものであります、外國の例などを見ますといふと是より尙一步進みまして、其商船を操縦いたします所の船員といふ者は、例へば船長、士官といふ者全部自分の國の人でなければならぬ、又其他の下の海員即ち水火夫の如き者の全體の四分の三以上は自分の國の人間を以て組織せなければならぬといふが如き嚴重なる規定があります、一つの商賣道具の性質を持つて居る所の船舶に對して此の如く嚴格なる規則を適用いたしましたのは、即ち此商船といふものが一つの國の貿易とか經濟とかいふ事に非常なる關係を持つからである、さう云ふ大關係のあるものであるから、成るべく自分の國の資本と、自分の國の勞力を以て獨立して運航をさせやうといふものが立法

の趣意だらうと思ひます、が併しモウ一つの原因とも見るべきは、即ち今日申上げやうと致しまする商船といふものは、單に商賣の道具たるに止りませずして戦時の方つて非常なる任務を持ち、非常なる働きをなすものであるからして、此の如き機關には、平時からして外國の分子といふ者を成るべく排斥して、自分の國の獨力で經營されなければならぬといふ趣意が、一つの大なる理由であらうと思はれる。

商船が戦時に於きましてどう云ふ効力を持ちますかといふことは、モウ此處で私が申述べる迄もございませずして、今日日々の出來事、即ち時局に關係して居る出來事が諸君に證明をいたして居るのであります、分り切つた話で、非常な効力を持つて居るのであるが、チョツと其書物などを見ましても、實際の事に付て見ましても、先づ第一に商船の任務といふと、言ふ迄もなく軍隊輸送だらうと思ひます、抑も今日日本の大兵が危機一髪の時期を誤らずして敵地に侵入し、さうして連戦連捷といふことの名譽を得て居るのは、固より 陛下の御威稜と軍人諸君の忠勇なるに原因いたしますけれども商船があつて此忠勇なる働きをされる所の軍人諸君を敵地に運搬し、さうして其時を誤らずして作戦をなすといふことが大切な根本であると思はれる。即ち今日の名譽ある戦局を維持して居るのは、少くとも商船及之を操

縦して居るところの海員といふに此二つの者が與つて力あるといふことは、充分に認めなければならぬと思はれる、商船の任務といふものは固より軍隊輸送、其外軍馬、鐵砲一切の軍需品、又大軍を給養すべき糧食飲料水等、總ての物を輸送しなければならぬ、或は病院船となつて病兵負傷兵の收容をいたします、又石炭を搬んで艦隊及其根據地に常に供給するとか、或は通信船となりましてあちらこちらの情報交換するとか、又極端に行きますと武裝をして軍艦と同一なる働きをする場合もありませう、甚さに至りますと、御承知の通り敵の港を閉塞すると云ふことにも使はれるといふことが先づ商船の重なる働きだらうと思はれます、斯様に列擧して來ますといふと、商船隊の戦時に於ける効力といふものは、餘り軍隊若くは艦隊と替らぬ位の力を持つて居るものだらうと思はれる、唯々異なる所は自分は武裝を致しませぬ、随つて直接の戦闘力を持つて居らぬといふ位に過ぎぬだらうと思ひます、斯う云ふ性質のものでありますからして、苟くも其國に沿岸を持つて居る國でありますれば、今日の情況から見ますと、商船が無ければ戦さが出來ぬといふことを申しても、誤つた言葉ではあるまいと思ひます、即ち近頃世界の各海國が、此商船の發達に非常に力を盡して居るといふことは、即ち此軍國の場合に於て商船

の効力といふものを認めたと歸するだらうと思はれる。戦時に於きまして商船が効力を顯はしたと言ひまする例をチョットと申上げて見ますると、日本に於きましては、臺灣の役、降つては西南の役、二十七八年の戦役、及此度が四回目になると思ひます、少くとも維新以後商船と軍艦と立派に區別が附いてからは、右の四回であります、外國に於きましては、彼の亞米利加と西班牙の戦争、それから英吉利とフランスツアルの戦争、是が先づ近頃の例だらうと思はれます、西南の戦争とか、若くは臺灣戦争の場合に於きましては、未だ日本の國運が今日程膨脹致しませぬが故に、其戦時に於ける商船の活動といふものも左程でありませぬでしたけれ共、何しろ船が不足して、非常に運輸機關の缺乏を感じ、時の政府は忽ち或必要の船を買上げられて、さうして之を軍事輸送の任務に使はれ、亂平いで後に之を以て當業者に抛下をした、さうして商業航海に従事せしめたりといふ事になつて居りまするが、此等の船が即ち今日日本のみならず、世界にまで名前を顯はして居る郵船會社の航海事業の基礎になつたのであります、又西米戦争の當時の情況は、書物に書いたものなどを見ますると、あの時は御承知の通り、例の巴理宣言といふもの、即ち私船を以て他國の商船を捕獲してはならぬといふ、あの宣言に

米國も西班牙も這入つて居りませぬが故に、あの時の戦さでは、互に商船の捕獲を競争してやつて居りましたが、之が爲に亞米利加あたりで通常の私船を巡洋艦的に使用して居つたものは實に数が多かつたといふ事でありますが、其外にも是丈けの船を使つたといふことは書物に見へて居ります、石炭を運送いたします船が十八艘、糧食を運搬します船と、又糧食の腐敗を防ぐ爲に氷を拵へます仕掛になつて居ります船が合せて六艘、それから船員、又は其外總て船に乗つて居ります人に供給します飲料水、及汽罐に供給します水を製造します即ち蒸溜船と申しても宜しうございませう、蒸溜機械を備へた船が二艘、病院船が六艘、非常な大きな工作船即ち艦隊などの破損を修繕いたします大機械を備へて居る船が一艘、それから海底電線を敷設し、或は切斷します用に使ふ海底電線の工作船が二艘、是丈け使つて居つたといふのであります、右の補助巡洋艦の外に是丈け使つて居ります、其噸數合計が二十萬噸であるといふ事であります、其書物にありますのに、此西米戦争の當初の有様に於きましては、亞米利加の軍事當局者は餘り運送船といふことに重きを置かなくつて、随つて設備が充分で無かつたが爲に、非常な困難を感じまして、俄かに議會に豫算を提出しまして、譯して申しますると補助艦隊局とでもいふべき一つの

役所を置きまして、そこで商船借上の事務を司らしめ、各地より適當な船を借上げ、適當に模様替をして、戦地に向はしめたこととあります、之が爲に亞米利加の海軍は非常な便利を得まして、彼サンチャゴの長い間の封鎖も、格別疲れること無くして之を行ひまして、遂に戦局を収めたといふこととあります、どうも亞米利加の當局者が戦時に方つて運送船の設備に氣が附かなかつたといふが如きは、どう云ふものであるか、私は疑を存して置くのでございます。

それから英吉利とフランスツアルの戦の如き、或報告書に書いてありますのを見まするに、開戦以來に收用いたしました御用船の数が百十六艘でありまして、一艘平均の噸數は六千四百噸其最大なるものは一艘で一萬二千六百噸、小さなものが三千五百噸、速力は十九海里半位から、十一海里半位であるといふことを報告してあります、之を合計して見ますると、買上船が七十四萬二千四百噸になります、隨分大きな數で、英吉利から見ますると左程ではありませぬけれ共、日本の唯今の數に較べて見まして、今年の五月の末日の日本全體の登簿船としまして免状を持つて居ります二十噸以上の汽船の数が七十萬九千四百五十三噸でありますから、英吉利の當時の御用船の方が、今日の日本全國の汽船よりも非常に多かつたのであります、

併ながら御承知の通り、英吉利は名に負ふ海上の王でありまして、此種の御用船は全く九牛の一毛で、之が爲に内外全般の航海等に少しも影響を受けずして、立派に繼續して居つたといふ事でありませぬ。

今申しました實例は日本の舊い例と、外國の例であります、私共が非常に感じを持ちましたのは、二十七八年の戦役當時に於ける御用船の情況であります、其事を少し御話申上げて置きませう、抑も此二十七八年に於きまして、初て朝鮮に出兵を致しました時に、御用船を借上げましたのが、二十七年の六月五日といふときであります、丁度今日から振返つて見ますると、滿十ヶ年になりますのであります、此十ヶ年といふものは、實に日本の第二の維新と言つても宜いやうな時代でありまして、事々物々面目を改めて、盛んになつて來ましたが、殊に海運事業の如きは、各事業の中で著しく膨脹した仕事でありまして、此戦後の情況を較べて見まするといふと、若しも今日の日本海運の情況が二十七八年頃の通りであつたならば、今日の半分の仕事も出來ぬだらうと思ふので、誠に今日此の如く進歩をしたといふものは、國家の爲に非常に慶賀すべき事であらうと思はれる、今日の商船が二十七八年頃の狀態と同一であつたなら、今日の半分の働きも出來ぬといふは、少しく過激に

渉る言葉かも知れませぬが二十七八年頃の統計と今日の統計とを比較して見ますると、決して誤りの無い事だらうと思ふのでございます、申す迄も無く、戦時に關係のある船は汽船に限るのであります、二十七年の五月末の汽船の数を申し上げますと、四百十七艘、十八萬千八百十九噸でありまして、今年即ち十ヶ年立ちました後の統計で見ますと、汽船の艘数が一千百二十七艘、噸数が七十萬九千四百五十三噸、即ち艘數から申しまして二倍七割の増加、噸數から申しまして四倍弱の増加でございます、噸數の割合に艘數が増加して居らぬといふことは、大きな船が殖へたといふことの意味になるのでございます、それから二十七年開戦前の定期航路の船は、郵船會社が三十一艘、五萬二千七百二十三噸、大阪商船會社が四十七艘、一萬六千八百三十五噸でございましたが、是は今日郵船會社の定期航海の船ばかりでも非常に増加して、四十五艘、十七萬六千七百四十噸、殆ど三倍以上でございます、其外東洋汽船會社も出來まするし、大阪商船會社の揚子江航路の定期も出來ましたし、支那の蘇州、杭州、上海などに今日往復して居ります定期航海も開け、湖南汽船會社は湖南地方をやつて居る、又定期航路の範圍と申しますものも、二十七八年の際の際に印度の方面、孟買から起りましてズツとコチラの支那の方へ參つて北清地

方から韓國沿岸、浦鹽斯德と、是丈けが日本の船の通つて居る區域でございましたが、今日は世界到る處、日本の國旗を翻さない所は無位で、唯だ大西洋の航路と南亞非利加、南亞米利加の二つが日本の船が通はぬのみであります。

それから海員の事を申しますと、二十六年の末でございしますが、其時の統計に、海員と申しても、即ち高等海員で免狀を持つて船を操縦する人でございしますが、其總躰の數が四千六百二十三人、其中で日本人が三千八百九十六人、外國人が七百二十七人、之を昨年と暮に比較して見まするといふと、總躰一萬六千八百九十一人、即ち三倍以上の増加、其内内國人が一萬六千五百四十八人で、是が四倍以上の増加、之に反して外國人は丁度半分ばかりに減じまして、三百四十三人になつたのでございます、是は誠に結構な現象でありまして、即ち前に申しました通り、我國の商船の事業からして、外國の分子は少くも半分は遠かつて、而も船は非常に殖へて居るといふ現象になつたのであります。

そこで斯う云ふ違ひがありますから、戦争といふものが海運事業に及ぼした影響といふものも、二十七八年と今日とは莫大な相違がありますので、此度の戦争は前の戦さと比しまして、其規模が非常に大きいに拘らず、此度の經濟上に於きまする商

船の不足の爲に經濟上に及ぼす影響といふものは、前に比して非常に平穩であり、するので、元來商船といふものは、申す迄も無く、丁度血液が人間の身體を循環して居ります通りに、經濟上アチラコチラと脈絡を通せしめまして、各部の需要供給を調和するものでありますから、新たに此道具を商業界から抜去つて仕舞ひますると、非常な經濟上の狂ひを來すといふことは、當り前の話であつて、殊に内國の沿岸に使つて居ります船を引揚げるといふことは、其影響が誠に直接であつて、非常に急激なものであります、然るに二十七八年の當時に於きましては、外國航路といふものが未だ餘り盛んでありませなかつた故に、御用船となりますものは、多くは内國沿岸とか、又前に申しました日本近海に使つて居つた船でありますから、之が爲に日本の沿岸の航海といふものが、直ぐに止つて仕舞ひまするし、各地の物産は堆積して、商品が必要する土地に於きましては、非常に價が高くなり、之を生産する土地に於きましては、價が下つてもどうしても、運搬が出来ぬといふやうな譯になつて、極端な例を一二申上げますると、二十七八年の頃に於きまして、北海道で鯨のメ粕の運賃が小樽と東京との間平時一斛に付て二十四五圓でありましたのが、百二十圓になり、五倍の騰貴となり、金融も必迫しました爲に、例年鯨の事業

に従事する爲に、津輕海峡を渡つて、三越地方から北海道へ参ります數萬の人夫が、給料を取ることが出來ずして、雇主に迫つて非常に騒ぎ出したといふやうな例もありまするし、それから新潟、酒田の方面の如き米の産地であつて、數萬石の米が溜つて居るが、どうすることも出来ぬといふやうな情況である、反對に東京の方は新聞で見ますると、深川の米倉に米が最早市民の一週間の分丈けしか無いといふ極端に至つたことは、當時の新聞の報道を記憶して居ります、それから新潟の如きは、北海道から石炭の供給を受けて、汽船とか工場の機關を運轉して居りましたが、其供給が絶えて仕舞つた爲に、或船の如きは石油の滓を燃いて、僅かに運轉して居つたといふことがあるのであります、是等は極端に起つた例を二三申上げましたのです、けれ共當時の經濟上に斯う云ふ影響を及ぼしたので、實に一大事でありました、さう云ふ所からして其時の當局者、當業者共に力を盡して救濟策を講ぜられ、或は外國船を借入、買入等いたしました、僅かに之を救濟することが出來たのであります、其結果として丁度戦争が開けましてから一年後、二十八年五月の統計で見ますると、汽船の数が四百九十五艘、三十萬四千五百九十六噸になりました、前に較べますると七十八艘、十二萬二千七百七十七噸、殆んど二倍位の増加に俄かにな

りました、所が之を當時御用船の數に較べますと、當時の御用船は百四艘、十二萬千二百八噸であります、故に丁度御用船の數丈け汽船が増加いたしましたのでございませう其外雇入の外國船がりましたが、御承知の通り外國船は日本の沿岸貿易に従事するとか、日本の開港場以外に這入ることは國禁であります、戦争の如き事變の場合には、特別に許すことになつて居りますが、此特許を受けまして日本の沿岸貿易に従事しました外國の船が四十二艘、八萬四千九百六十四噸といふ數になつて居ります、斯様の次第でありますからして日本の海運力は開戦前より増加して、其結果といたして彼の媾和談判の時などに李鴻章が參つて、コチラの全權大臣と馬關の春帆樓で媾和談判の最中、其軒下の馬關海峡を御用船が數十艘舳艫相啣んで出掛ける盛んな有様を呈したに拘らず、内地の沿岸の商業、航海の情況も、大變回復して穩かになつて、遂に戦局を收めるといふ情況になつたのであります、誠に結構でありましたが、兎も角も當時の經濟上の情況は、随分恐るべき有様であつて、此商業上に與へた恐るべき情況といふものは、其程度丈けそれ丈け商船が當時の戦局に效力を現はして居つたといふことを反對に推測することが出来るのであります。然るに此度の時局は前の時局に較べて非常に規模が大きいに拘らず、又前の時には

嘗て經驗の無い敵艦が日本海に出沒して商船を撃沈するとか、或は敵の港灣を封鎖して沈没せしむるとかいふやうなことがありましたにも拘らず、此度の事變といふものは、海運の事業に左程の影響を與へないのであります、成程貨物の堆積とか、或は運賃の騰貴とかいふことは、開戦後僅かの間はありましたが、モウ今日に至りまするといふと、平時の情態に復つたといふて差支ないのであります、之を要しまするに軍事當局者の一令の下に、御用船がメンク任務を盡しまして、輸送を充分に働いて居る一方に、通商航海の情況も至極平穩に行はれて居るといふものは、日本の商船の増加したといふ結果に外ならぬのであります、併ながら今日の事變は誠に未曾有の出來事でありますから開戦後の日本の商船にも種々な變動を起したのである、チョツと其數を申して見ますといふと、千噸以上の汽船が戦争の影響を受けまして減じましたものが第一として、所謂閉塞船、此第一回が五艘、一萬四百五十一噸、第二回が四艘、一萬七十四噸、第三回が八艘、一萬七千三百四十噸、併せて十七艘、三萬七千八百六十五噸であります、又敵の撃沈を受けました船が六艘、一萬五千二百三十六噸、併せまして二十三艘、五萬三千百一噸になります、之が減じた數であります、それから又新規に日本の籍に這入りました船といふものは、即

ち今年の一月から六月までに増加になりました千噸以上の汽船が三十三艘九萬七百二十四噸でありまして、此中の一艘に九百八十噸といふのが這入つて居りますが、それより小さい船は丸るで算盤の外に置いてある、尙此外に敵からして捕獲して來ました商船といふものは、まだ捕獲審檢所の審檢が確定しませぬから、其數がハッキリ分りませぬのですけれ共、擊沈せられた船などの數よりは無論多いだらうと思はれます、それから五月の末に至りまして、前に申した雇入れて我沿岸貿易に従事しまする外國船の數は是はナカク多く、七十六艘、十六萬六千四百四十九噸でございます、殆ど二十七八年戰役の時の二倍に達して居ります、斯う云ふやうな情況でございますが故に、今日海運事業は餘り軍事上の影響を受けずして、圓滿に先づ行はれて居りますが、唯だ或部分の定期航海の如き、多少の缺航がありますのは、是は或は敵艦の航路に當るとかといふ理山もありませうし、又さう無いとしても斯る大事變の場合に全部圓滿なことを望む譯に行かぬ事は勿論當然の事であるから、是は別に深く着目するに及ぶまいと思ひます、兎も角經濟上左程に影響を受けて居らぬことは分るのであります。

抑も二十七八年から今日まで斯様な進歩をいたして來ました理山といふものは、即

ち其以來海運事業といふものが、戰後經營といふことの一つの事業として政府並に當業者が非常に盡力をして發達を謀つた結果に過ぎないのであります、即ち政府に於きましても航海獎勵法とか、造船獎勵法とか又は航路擴張とかいふことを制定し、民間の當業者もそれに應じて盛んに資本を増し經營を凝してやつて來た結果であるのであります、誠に好い鹽梅であつたと言はなくちやならぬ、併ながら今日に於て極圓滿の希望を申しますと開戦の爲に外國の船を俄かに買入れるとか、又は之を借入れるとかいふことは決して望むべきことでは無からうと思ふ、即ち前に申しましたる商船の立法の精神より視ても、經濟上及國の品位上より視ても、餘り望ましく無いことだと思ふ、語を換へて言へば平時から其位の用意はして居らなくちやならぬと思ふ、今經濟上どう云ふ變化が起るかと思ひますと、例へば前に舉げました借入船十六萬六千餘噸といふものには、一ヶ年どの位借賃を拂ふかと言へば、假に一噸を一ヶ月五圓出して借入れるものとして見ると、アレ丈で一年に殆ど九百九十四萬圓……千萬圓近くの金を外國人に拂ふやうな結果になります、又斯う云ふ場合に外國の船を買入れるといふことは、即ち足元を見られるといふやうな疑があつて、甚だ不得策であらうと思はれる、斯かる次第でありますからして、今

日世界の方々の國々が、苟くも海を持つて居りまする國は、種々なる方法を以て豫め商船の數を殖やす事を計畫して居ります勿論其一つの理山は商業擴張といふことにありまするが、他の裏面には確かに平時より戦争の用意をして居るのである。どう云ふ方法で保護をいたして居るかと申しますると、其形は色々變つて居りますが、詰り國庫から或金を出して之を當業者に交付いたしましたして、當業者をして堅牢なる商船を維持せしめ、軍事の時に之を公用に供せしめて、充分な働きをさせるといふ精神に於ては、何處も一つでありまして、例へば英吉利の國に於ては、各種の命令航路に補助金を與へますると同時に、巡洋艦に代用することが出来る商船を保護する規則がありますし、佛蘭西に於きましても、航海奨励法、造船奨励法といふやうなものの中に佛蘭西の海軍省の認可を受けて設計しました船、即ち戦時に於て大に働きをなし得る船には、特別に割増奨励金をやるといふやうな規則もあります、獨逸にも命令航路の命令書の中に、戦争の場合の規定があります、露西亞には御承知の通り義勇艦隊といふものがあります、其外幾らも保護金を受けて居る會社があります、それから亞米利加には郵便航路の船を保護する規則があるが、其中に矢張り戦争の時に武装する船の特別保護の規定があります、各國の例を見まする

に、戦時の準備のみではありませぬけれ共、商船を保護してやることは色々ありまするが、要するに是等の事柄は日本に於ても既に〳〵行はれて充分効力を奏して居るのであります、最早此上に充分な名案といふものは無からうかと思はれるが、併し前にも申しました通りに、今日の雇入外國船十六萬噸といふのが、完全の事を申せば、是丈けの海運力が今不足を生じて居ることになる、即ち自分の國の船では不足して居るから借入れたのであるといふことは、モウ明かであります、是等を以て見ましても、どうしても日本の將來……尙ほ進んで將來は商船の増加を謀らねければならぬといふ事は争はれぬ事で、而も其増加を謀る方法といふものは、今日業に已に充分に盡されて居るといふのである以上は、最早是れからは法律とか若くは規則とかいふものゝ下で無く、どうしても國民が自力を振つて充分の經營を盡さねければならぬだらうと思ふ。

唯だこゝに注意を必要と致しまするのは商船とか航海とかいふ仕事といふものは、自分自身で効用を爲すものでない、獨立の目的を持つて居るもので無く、詰り外の仕事の補助的の任務を持つて居る、自分さへ動いて居れば宜いといふ性質のものでは決して無からうと思ふ、即ち荷物とか、乗客とかいふものが一方に在つて、之が

運搬をしなくちやならぬ必要が他方にあるから、其必要に使はれる道具でありますから、荷物と乗客の如きもの、増加を謀らずして、單に商船を増加させやうといふことは間違つた話であります、即ち私共の考では、極漠然として居りますが、どうしても商工業とか、或は移民、外國へ日本人が行つて働くといふやうな氣風を段々に盛んにして行かなければ、結局商船の増加することは六つヶしからうと思ふのであります、詰り今日の日本人の氣象精神といふものは、軍事に於ては誠に能く顯はれて居る、能く人が申します通り、今の戦争といふ者は、敵味方兩々相對し、各々陸に海に軍隊の粹を抜いて戰つて居るので、武器と云ひ、兵隊の數と云ひ、左程の違ひは無い、然るに連戰連捷をして居るのは、即ち日本の軍人には一つの精神が違つて居るのである、所謂日本魂の効能であるといふことを言ひますが、此日本魂といふ奴は、單に軍事上に於て發揮されて居つて、商賣とか、工業とかいふ上に於て、充分光を放つて居らぬやうに思へるが、私の考では、是が今日の現狀ではある様だが、前の歴史などを見るといふと、商工業、貿易とか冒險とかいふことの上に、日本の特別の氣象を發揮した例は幾つもあると思ふ、彼伊達政宗が戰國の餘威を籍りまして呂宋を取つて、盛んに貿易をしやうとしましたのは、慶長十八年の時で、

即ち今より凡そ四百年許前……西曆千六百十三年であります支倉といふ重臣が使になつて、自分で船を造つて、方々廻はつて羅馬へ行つて、外國に八年居つて歸つて來たこと、或は又秀吉と家康の時代に、御朱印船といふものがありました、是等がズツと印度南洋地方までも往復して居りまして、立派なる日本の町といふものが其方面に出來て居つたといふことも歴史にアリ／＼残つて居ります、最著しい例は山田長政が暹羅に行つて有名な奇談があります、是等を以て見ますと、日本の商工業者も一つ充分に發憤して、軍事商業併び立つといふことの計畫をせなければならぬだらうと思ひます。

どうも御話が甚だ不秩序に涉りましたが、要するに右に申しますことは、商船といふものが、戰時に於ての効力といふものは、内外の事蹟に考へて見て、非常に重大なものである、又一方に於て其商船の缺乏といふことは、戰時の經濟上に非常な影響を及ぼすものでありますから、商船といふ物は戰時の準備として、平生からして充分用意をして置かなければならぬといふのであります、詰り其準備をするにも、國民が最早獨立經營を盛んにして、或は海外へ出るとか、或は商工業を發達させて、詰り漸々と荷物を殖し、運賃を増して、商船の食物を殖して行かぬければ、

其發達を謀ることは出来ぬからして、是からして充分さう云ふ方針を立てなければならぬといふ、極漠然たる話でございます、が是で御免を被ります。

義勇艦隊に就て

海軍中佐 子爵 小笠原長生

理事長閣下から義勇艦隊の事に就て何かお話をするやうにと云ふことを軍令部長に御依頼でございます、部長から私に出て申上げると云ふこととございましたが、私は今日迄餘り補助巡洋艦或は義勇艦隊のことに付きまして研究を致したことは無いのでございまして、却つて貴君の方が是迄御研究が積んで居ることであらうと私は信じて居ります、殊に又此度協會で以て御創設になります補助船舶のことは、それぞれ創設委員に於て種々御研究の上で御定めになるのでございまして、其邊の事に就ては私は一切自分の意見は申上げませぬで、唯だ現下世界に於て各國がやつて居ります補助船舶の状況を少し許り申上げたいと思つて居ります、それを申上げます前に極く最近の調べて即ち今年の始め丁度日露戦争の起りました前後に於

ける各國の海軍力を一應申上げて置く必要があらうと私は思ふのであります。或二三の絶對的に海に縁の無い國を除きました外は各國とも出来得る限りの方法を執つて海軍を擴張しつゝあるのであります、就中英米露獨佛伊それから日本あたりは最も海軍に力を注いで居るのでございますが、併し日本帝國のことはもう申上げて御承知でございますから申上げませぬ、で其外の六大海軍國に就て申し上げます、英國は一等戰闘艦が四十八艘合計排水量が六十九萬五千九百十噸でございます、二等戰闘艦が十一艘合計排水量が十一萬七千二百五十噸でございます、三等戰闘艦が六艘合計噸数が四萬九千九百噸でございます、一等巡洋艦が四十二艘其噸数が四十八萬八千噸でございます、二等巡洋艦が三十八艘其噸数が二十四萬三千五百十噸でございます、三等巡洋艦が六十九艘其噸数が二十一萬五千九百九十五噸でございます、水雷砲艦が三十一艘其噸数が二萬四千八百六十五噸でございます、是れだけ持つて居ります、合しますと驅逐艦以下を除きまして即ち軍艦と云ふもの、数が二百四十五艘、合計排水量が百八十三萬五千四百三十噸となります、第二位に位して居りますのが佛國でございます、是は一等戰闘艦が十七艘其噸数が二十一萬五千六百八十七噸になります、二等戰闘艦が十艘其噸数が十萬六千二

其發達を謀ることは出来ぬからして、是からして充分さう云ふ方針を立てなければならぬといふ、極漠然たる話でございます、が是で御免を被ります。

義勇艦隊に就て

海軍中佐 子爵 小笠原長生

理事長閣下から義勇艦隊の事に就て何かお話をするやうにと云ふことを軍令部長に御依頼でございまして、部長から私に出て申上げると云ふことでございしましたが、私は今日迄餘り補助巡洋艦或は義勇艦隊のことに付きまして研究を致したことは無いのでございまして、却つて貴君の方が是迄御研究が積んで居ることであらうと私は信じて居ります、殊に又此度協會で以て御創設になります補助船舶のことは、それぞれ創設委員に於て種々御研究の上で御定めになるのでございすから、其邊の事に就ては私は一切自分の意見は申上げませぬで、唯だ現下世界に於て各國がやつて居ります補助船舶の状況を少し許り申上げたいと思つて居ります、それを申上げます前に極く最近の調べて即ち今年の始め下度日露戦争の起りました前後に於

ける各國の海軍力を一應申上げて置く必要があらうと私は思ふのであります。或二三の絶對的に海に縁の無い國を除きました外は各國とも出来得る限りの方法を執つて海軍を擴張しつゝあるのであります、就中英米露獨佛伊それから日本あたりは最も海軍に力を注いで居るのでございす、併し日本帝國のことはもう申上げぬでも御承知でございすから申上げませぬ、で其外の六大海軍國に就て申しますると、英國は一等戰闘艦が四十八艘合計排水量が六十九萬五千九百十噸でございす、二等戰闘艦が十一艘合計排水量が十一萬七千二百五十噸でございす、二等戰闘艦が六艘合計噸数が四萬九千九百噸でございす、一等巡洋艦が四十二艘其噸数が四十八萬八千噸でございす、二等巡洋艦が三十八艘其噸数が二十四萬三千五百十噸でございす、三等巡洋艦が六十九艘其噸数が二十一萬五千九百九十五噸でございす、水雷砲艦が三十一艘其噸数が二萬四千八百六十五噸でございす、是れだけ持つて居ります、合しますと驅逐艦以下を除きまして即ち軍艦と云ふもの、數が二百四十五艘、合計排水量が百八十三萬五千四百三十噸となります、第二位に位して居りますのが佛國でございまして、是は一等戰闘艦が十七艘で其噸数が二十一萬五千六百八十七噸になります、二等戰闘艦が十艘で其噸数が十萬六千二

百〇四噸なおります、三等戦闘艦及び海防艦が十艘ございまして、其噸數が六萬六千五百三十九噸でございます、一等巡洋艦が十四艘ございまして、其噸數が十五萬二千二百二十四噸になります、二等巡洋艦が十五艘ございまして、其噸數が九萬六千五百八十五噸でございます、三等巡洋艦が二十七艘ございまして、其噸數が八萬六千四百四十一噸でございます、水雷砲艦が二十一艘ございまして、其噸數が一萬六千五百四十七噸でございます、合計で百十四艘になります、排水量が七十三萬九千二百二十七噸になつて居ります、第三位に居りますのが米國でございます、それが一等戦闘艦が二十四艘で、其噸數が三十二萬二千七百七十七噸でございます、二等は持つて居りませぬ、三等戦闘艦十一艘で、其噸數が四萬五千三百三十五噸でございます、一等巡洋艦が十三艘で、其噸數が十五萬七千五百九十五噸でございます、二等巡洋艦が三艘で、二萬六千二百二十噸でございます、三等巡洋艦が十八艘で、其噸數が六萬一千六百十三噸でございます、水雷砲艦はございませぬ、合計六十九艘で以て排水量が六十萬五千四百四十噸になります、第四位に居りますのが露國でございます併し是は開戦後に沈みました船も澤山ございまして、或は破壊した船も澤山ございするが、一艘も沈まない即ち開戦前に於ける勢力として算用してあるのであり

ます、一等戦闘艦十九艘で、其噸數が二十四萬八千五百六十四噸でございます二等戦闘艦が十艘で、其噸數が十九萬九百三十四噸でございます、海防艦が三艘で、其噸數が一萬三千五百六十六噸でございます、一等巡洋艦が三艘で、其噸數が三萬二千二百八十噸でございます、二等巡洋艦が十二艘で、其噸數が八萬五千四百十三噸でございます三等巡洋艦が八艘で、其の噸數が二萬八千四百七十七噸でございます、水雷砲艦が九艘で其噸數が四萬三千三百九十一噸でございます、合せて六十四艘、總排水量が五十一萬三千二百九十五噸でございます、第五番目になりますのが獨逸でございます、それが一等戦闘艦が二十二艘ございまして、其噸數が二十五萬六千五百五十七噸でございます、二等戦闘艦はございませぬ、三等戦闘艦及び海防艦が十三艘で、其噸數が六萬六千六十噸でございます、一等巡洋艦が六艘で、其噸數が五萬五千七百四十三噸でございます、二等巡洋艦が六艘で、其噸數が三萬四千二百四十五噸でございます、三等巡洋艦が二十三艘で、六萬六千四百七十八噸でございます、水雷砲艦が三艘で、三千九十二噸でございます合せて七十三艘、排水量が四十八萬二千七百七十五噸でございます、それから第六番目に居りますのが伊太利でございます、それが一等戦闘艦が八艘で、其噸數が九萬四千二百十八噸でございます、二

等戦闘艦が八艘で、其噸数が十萬四千五百二十五噸でございます、海防艦が一艘で、其噸数が一萬二千七十二噸でございます、一等巡洋艦が三艘で、其噸数が二萬一千八百八十二噸でございます、二等巡洋艦が三艘で、其噸数が二萬一千八百八十二噸でございます、三等巡洋艦が十四艘で、其噸数が三萬八千八百四十四噸でございます、水雷砲艦が十四艘で、其噸数が一萬二千二百八十噸でございます、合計五十一艘で排水量が三十萬千二百二十二噸になります、是れだけが現在の勢力でございますが、其外に尙ほ一等戦闘艦は英國では計畫がチャンと出来て居つて未だ着手しないのが二艘ございます、露國には矢張り計畫が出来て居つて未だ着手しないのが數艘ございます、伊太利には三艘、獨逸には二艘、米國には一艘、是れだけ一等戦闘艦は着手をしないで計畫が出来て居るのがあります、一等巡洋艦は英國に着手しないのが三艘、佛國に十六艘、獨逸に一艘、米國に二艘、それから三等巡洋艦は露國に二艘着手しないのがございます、是れだけ皆海軍力を持つて居るのでございます、持つて居りまするけれども之を以て足れりとして居らないで、詰り海軍の擴張の出来るだけはしやうと云ふことを何國でも考へて居るのでございます、それは無論幾ら多くても決して差支ないのであります、けれども國力に限がありますから或程度

を超えては中々擴張をすることが出来ませぬ、従て一つの手段として平常には比較的普通の軍艦よりも生産力があつて、さうして戦時には軍事に使用し得るものが欲しいと云ふ考が自然に起つたのが、即ち補助巡洋艦の出来た所以であらうと思ふのであります。

勿論理事長からも御話のあつた通り唯だ單に補助船舶と言ひましても、假裝巡洋艦に使ふのもあれば、或は運送船に使ふのもあれば、若くは又供給船に使ふのもありまして、一概には申せないでございます、併ながら兎に角假裝巡洋艦にして之れを以て敵の戦闘艦に當らうと云ふことはそれは到底出来ぬ話であつて、戦線に臨ませると云ふよりも寧ろ他の戦時の任務に使ふことが多からうと思ふのであります、一例を申しますと、戦時衛生に補助船舶が非常な關係を持つて居ると思ひます、今度の開戦で海軍の病人の比較を取つて見ますと、昨年唯今頃即ち平時に於ても一萬人に付て百何人と云ふ割の病人があつたのでございます、即ち百人に付て一ポイント幾らと云ふ病人の割でございましたのが、今年になりました戦争になつてからは、艦隊々々で分けてございますが一番多い艦隊で一萬人に付て九十六人と云ふ病人の割でございます、此前の日清戦争あたりと比較すると非常に少いのです、そ

れは重に何に原因して居るかと申しますると、即ち補助船舶が澤山に在つて、さうして食物も腐敗をせないものを給することが出来る、或は水も不足なく始終供給することが出来る、或は其外の軍需品も充分に遣ることが出来ると云ふのが最大原因であらうと私は思ふのであります、是れは補助船舶の著しい効能ではあるまいかと思ひます、それから尙ほ假りに敵と味方とが五分々々の海戦をした場合に艦隊と艦隊とが戦つて同じやうに傷んだ時には、一時雙方とも夫れ／＼近い處の港に歸つて来て船渠に入れて修覆をするなり又船渠に入れぬ迄も相當の修理をしなければならぬ、其間に海上を制すると云ふにはどうしても一つの補助力が必要であらうと思ふのであります、是等に最も必要ではあるまいかと思ひます、さう云ふ關係からでございます、今申上げた六大海軍國何れも皆假裝巡洋艦と云ふものを持つて居るのでございます、其状況を大畧申上げますと、英國では略ぼ戦時に用ふる船を三種類に區別してございます、第一種類は詰り海軍の設計若くは其認可を得て始めて製造したものでございます、それは少くも一時間に十七海里の速力を要する、さうして一定の武器を備へるだけの準備が整つて居りまして、何時でも武装し得るやうになつて居ると云ふのを第一種類に入れてございます、尙ほ念の爲めにチョツと申

上げて置きますけれども今の水船や或は食料品を送るやうな目的のものであれば、特に補助船舶と云ふものを要しないでも、即ち會社で使つて居る船を直ぐに徵發してそれで間に合ふべきでございますけれども、假裝巡洋艦とするにはそれだけの資格が要るのでございます、砲を積んし發しなければならぬからデツキをそれだけに丈夫にして置かなければ直ぐ壞れまするし、又大砲を積む以上はそれに火薬が入用で即ち火薬庫を設けなければならぬ、又敵の丸が中つた時に水が這入らないやうに船の中を幾つにも仕切りもしなければならぬ、又船の致命の場所、極く大事の場所には相當の防禦を施さなければならぬ、それは殊更に鋼鐵を張りませぬ迄も石炭庫を以てそれを掩ふとか、或は其外の施設を施さなければならぬ、又速力も充分に出さなければならぬと云ふ風に特別の資格を要するのでありますから、従て平常用ゐて居る商船を假裝巡洋艦にすると云ふことは云はゞ窮策なのでございます、て英吉利では今申上げたやうに武器を備ふる準備が整つて居る船舶即ち海軍で認可を得て製造したものはそれだけの資格を備へて居る船でございます、之を第一種類として置きました是れに補助年金を政府から與へて居るのであります、第二種類は十七海里以下の速力を持つて居るもので、是は海軍本部が澤山の會社の中で是々の船と

云ふて兼て指定をして置いたものに限って居る、之れに對しては補助年金を與へない、唯だ使用をして居る間に一定の月手當を與へるのであります、之が第二種類、それから第三種類は今の第一種類第二種類の外の商船であつて、運送船とか或は病院船とかに用ゐ得るものを第三種類に置いてある、そこで政府からして特約をした會社は幾つあるかと、言ひますると七會社ある、即ち「キユナード」會社、彼阿會社、白星會社、加奈陀太平洋鐵道會社、「オリエント」會社、「バシフィック」會社、「ローヤルメール」會社、此七會社でございます、そこで補助巡洋艦と認められた船の數はどの位かと申しますると、六十艘で其噸數は四十六萬四千八百四十七噸でございます、其中の最も大きな船は二萬千噸、最も小さいのが三千三百八十二噸、それから速力の最も早いのが一時間に二十二海里最も遅いのが十二海里でございます、又小區別をすると其六十艘の中年々補助金を受けて居るものが十八艘、其噸數が十五萬五千五百二十八噸になります、其又中に就て大きいのは一萬二千九百五十噸、小さいのが五千九百〇五噸、速力で申しますると、一番早いのが二十一海里、遅いのが十六海里、それから年々補助金を受けなくて一朝事有つた時に海軍省の御用船とならうと云ふ約束を結んで居る船が残りの四十二艘でございます、其噸數が三十萬九千三

百十九噸、最も大きいのが二萬千噸、最も小さいのが三千三百八十二噸、速力から言ひますると十九海里五と云ふのが一番早く、十二海里と云ふのが一番遅い、斯うなつて居る、所が是だけを持つて居つてまだ英吉利は満足して居らない、今既に理事長からもチョツとお話がありましたけれども、非常に大きな船を造らうとして居る、速力を早くするには勢ひ大きくせねばならぬと云ふことでありましたが、英國は「キユナード」會社に申付けて、苟くも世界何れの國の持つて居る船、何れの國なりと英吉利が戰つた時に其船に追付くことが出来ない、それを捕獲することが出来ぬと云ふのは英吉利の海軍に取つて甚だ遺憾である——チョツと速力のことですが、是は申上げる迄もございませぬけれども、能く新聞記者諸君あたりが私に御問ひになることがある、向ふの船が二十海里出るのに此方の船が二十一海里出るのであれば追付きさうなものだ、斯う云ふやうな質問を起されますけれども、大概海上で以て敵の船を見出し得る距離は、十哩から十五哩位の距離で以て向ふを見出し得る、それも霧でもありませんれば始めから見ませぬが極く晴れた日に十哩位の處で見出したとしまして、それを先づ假りに午前十時に見出したとしますると、午後の五時迄逐駈けて七海里だけ多いので、まだ差引三哩離れて居る、其内夜にでもなつたな

らば向ふの船がどう方針を向けて居るか、それとキツカリと此方の方向が合つて居れば兎も角、若し方向が違つて居つたならば無論追及し得ない話で、勿論速力の早いのを必要と致しますが、一海里或は一海里半位早くても追付くことは困難であります、況んや同速力では到底望みがない、そこで英國では思切つて速力の早い船を造らうと云ふことを考へたのでございます、丁度一昨日始めて二大汽船を社債として着手すると云ふことが参りました、此船は前記六十隻の外で長さが六百六十呎でございます、幅が八十八呎、噸數は貨物を搭載しなくても尙ほ三萬二千噸乃至三萬三千噸でございます、そこで速力を二十五海里にすると云ふ計畫なんです、速力を二十五海里にすると云ふことになりまると是れだけの大きなものを造らなければ其準備が出来ない、馬力が六萬五千乃至七萬馬力、其一艘に費やす石炭量が一晝夜に千噸を超えると云ふのです、非常に大きなものです、其代り又之を造る金と云ふものは大變なものであります、一艘で千三百萬圓程要しますから、二艘で以て二千六百萬圓になります、丁度一等戰艦を造るのと同じ位の費用を要するのであります、併し流石に英國人の言ひさうなことである、世界何れの國と戰闘を開いて如何なる早い運送船に逢ふても必ずそれを捕へるだけの船を拵へる、斯う云ふ所から

計畫をしたのであります、是は遠からず海上に泛ぶやうにならうと思ひます、又海軍國の第二位に居りますのが前に申す通り佛蘭西でございます、此佛蘭西では二會社に補助金を與へて戰時の用に供すると云ふ義務を持たせて居る、それは「メサジユリ」マルチーム會社、「トランザトラ」ランチック會社、此二會社でございます、尤も此外にも航海獎勵法で獎勵金を受けて居る船舶は總て戰時に徵用せらるゝと云ふ義務を持たしてある殊に海軍省から指定した特別の設計に従つて拵へた船は、普通獎勵金の外に二割五分を増給するのであります、其資格は規定の武装を完備して四時間間の試験に十七海里半の速力を有するものに限つてあるのです、之を以て純然たる假裝巡洋艦に充てやうと云ふ考でございます、其數は三十三艘でございます、是は登簿噸數で上がつて居りますが、登簿噸數十八萬千三百噸になります、其中の最も大きいのが登簿噸數一萬千八百六十九噸、小さいのが千八百七十三噸、速力で申しますると一番早いのが二十浬、一番遅いのが十五浬でございます。

それから海軍國で三番目に居ります、亞米利加は、各商船會社に就て十二浬以上若くは構造上に特定されたものを選択するのでございます、之に補助金を與へまして、殊に二十浬以上の速力を以て航海するものには一海里に四弗の保護金を與へることに

なつて居ります、併し亞米利加は少うございます、僅かに今假裝巡洋艦に指定して居るのは四艘であります、其噸數は四萬四千八百五十四噸で、是は登簿噸數ではございませぬ總噸數でございます一番大きいのが一萬千六百二十九噸、それから一番小さいのも一萬〇七百九十四噸、速力は早いのが二十二哩半、遅いのが二十哩六でございます、五番目に居りますのが獨逸でございますが、獨逸は「ハンブルグアメリカー」運輸會社、それから北獨逸ロイド會社、此二會社に非常に澤山の保護金を平時與へて居り其上に戦時になりまして徵用船舶に損害があつたならば、總てそれは政府の負擔としてあります、さうして五千噸以上の船舶より拔擢して假裝巡洋艦としてある、そこで此假裝巡洋艦にする船の資格を定めてあるのです、それは自から英吉利でも極まつてありますけれども、故らに獨逸では船内に多數の區劃を設けて居る、それから彈藥庫を喫水線下に備へてある、それから極く必要な部分を水線下に設けてある、氣機であるとか、汽罐であるとか、操舵機であるとか、揚彈機であるとか、ダーヂであるとか云ふやうなものは、總て水線下に設けあることにしてある、其上に豫備炭庫で必要な部分を蔽ふやうに拵へてある、丁度甲鐵の代りをするやうに出來て居る、近頃快速力の大きな船を皆此要件に適するやうに拵へて居りま

す、そこで其船の數は十三艘でございます、其噸數は登簿噸數で十三萬四千六百七十七噸になります、大きいのが一萬九千五百噸、小さいのが五千百噸、速力は早いのが二十四哩、遅いのが十六哩、今度英吉利で設計して居りますのは「マア」凌駕するものであらうと私は思ふのであります、それから六番目が——是は間違ひました獨逸の前に露西亞を入れなければならぬ、四番目が露西亞になつて居ります、露西亞は御承知でもございませう、是は特別に少し外のよりも違つて居ります、尙ほそれに密接な色々な關係がございますから御承知であらうと思ひますが細かい會社まで入れますと露西亞には殆ど十三ほど徵發に應じ得る會社があるのであります、併し特に是れとして挙げます大きなのは二つであります、義勇艦隊とそれから黒海航業貿易汽船會社、此二つであります、此二つは共に戦時に起つたやうに私は覺えて居ります、黒海會社はグリミヤ戦争の當時ではなかつたかと記憶して居ります、それから義勇艦隊は露土戦争の時ではあるまいかと思ひます、殊に此義勇艦隊は露西亞の東洋の政策を非常に助けたやうに覺えて居ります其代り政府からも餘程保護を與へまして、現今の所では年々六十萬留の保護金を與へて居ります、其外に蘇士運河の通過税と云ふものは政府が拂つて遣るのでございます、其代り年々東洋に向

つて少くも十八回だけの航海をしなければならぬと云ふ義務を負はせてあるやうに思ひます、それから黒海航業貿易汽船會社の方は六十一萬六千留を年々政府から受けて居る、其代り戦時になると其船舶を供するの義務を會社が有つて居る、以上二社の外に千八百九十九年に成立しました東亞汽船會社と云ふのがあるのであります、是は矢張り義勇艦隊と同じ義務を有つて居ります、政府から此會社に對しては一ヶ年に其原價の百分の五と遞減價百分の六を給して居つて、其船に破損があつた時には政府の手で直してやる、沈没した時には遞減價に基いて決定價額を政府より仕拂ふ、斯う云ふことになつて居る、其外に東清鐵道會社と云ふのがある是れも矢張り三十萬留の保護金を政府から受けて居りました絶東沿岸の航路を開いて居るのでございます、露西亞の船は開戦後我が爲めに捕へられたのも御承知の通りありますけれども、戦争の起る當時には、義、黒二會社で假裝巡洋艦になるべきものは二十三艘あつたのでございます、其噸数が十五萬四千百五十九噸、大きいのが一萬千八百五十噸、小さいのが七百六十噸、速力は一番早いのが十九浬半、遅いのが十二浬、其二十三艘の内、義勇艦隊に屬して居るものが十四艘、其噸数が十三萬二千七百五十九噸、それから黒海會社に屬して居るものが九艘である、それが二萬千四百噸、

斯う云ふことになる、之が詰り戦争の初めに於ける露西亞の假裝巡洋艦の數でございましたが、今日では戦争の結果、もう大分減つて居ります、併しながら之れが今日迄露西亞の亞細亞に於ける政策を輔け、又旅順其他の今日迄の設計を輔けたことは非常に多からうと私は信じて居ります、それから六番目が伊太利でございます、伊太利は「ツエロゼ」會社と「ナヴィガシヨチ、ゼテラレイタリヤナ」會社の二會社に補助金を與へて居りまして、さうして假裝巡洋艦に使つて居ります、是は噸數は能く分りませぬが、兎に角此二會社から徵發し得る船は殆ど十艘でございます。以上の六大海軍國は有力なる海軍力を持つて居るに拘らず尙ほ是だけの補助船舶を持つて居るのみならず、愈々研究をしまして、小さい船三艘なら三艘造るのを大きな船一艘にするとかして、種々工風を凝して居る、時に其船の大小は違つて來るかも知れませぬが正に假裝巡洋艦に重きを措て居ると思ひます。で早い話が今度の日露の戦ひに於て既に實地に就て御承知であらうと思ひますけれども、即ち露西亞の義勇艦隊が地中海に現はれたり、或は南阿邊に現はれたり、又此間桑港に行つたのが一艘ありますけれども、あの一艘なり二艘なりが動く度びにでございます、即ち敵國として相手になつて居る日本の經濟界に及ぼす影響と云ふものは非常なもので

あらうと私は思ふのである、又浦鹽艦隊の行動がどつちかと云ふと假裝巡洋艦の任務を爲して居る、尤も浦鹽艦隊は装甲もして居りましたけれども、石炭持續力が多くて速力が早くてさうして目的とする所は、相手國の商船を拿捕し或は撃沈して商業に影響を及ぼすと云ふのが目的なものであります、詰り浦鹽艦隊の目的は先頃撃破せらるゝ迄は慥かに或程度迄は達せられて居つたと私は思ふのであります、御承知の通り北海道に現はれて見たり、或は對馬海峡に現はれて見たり、又ツイ先頃は東京灣附近に迄來てからに餘程損害を日本の商船に與へて居るのでございまして、あの爲めに日本の經濟界が苦痛を感じたと云ふことは非常に多いのであります、あれが何よりの例であつて、詰り裝假巡洋艦の必要と云ふものは認められて居らうと思ひます、若し假りにあの當時英吉利の二大汽船には及ばないにしても、速力の優等な、さうして或程度迄武裝の出來る即ち假裝巡洋艦となり得る船が三艘なり四艘なり日本に有つて、それが或樞要なる地點を扼守して居つたとしたならば、決して其當時彼れをしてあれ程の傍若無人の振舞をさせはしなかつたらうと私は信じて居ります、で實際にそれだけの利益があると同時に假裝巡洋艦の設置は更に國民に精神的訓化を與へることがまた非常に多からうと私は思ふのであります、御承知でもご

ざいませうが、マハンが海上權力史で以て、海上權力の發達する資格として擧げたものがございしますが、其國の位置、それから海岸線の長さ、それから港の多寡、それに次で擧げましたのが國民の性質と國民の海上生活を營む者の數、それから政府の方針、此六つを擧げてあります、初めの三つは天然であつて人力では出來ない、が後の三つは即ち國民の考へ一つで行けると思つて居ります、國民の性質即ち言ひ直すと海軍思想の發達の程度でございしますが、幾ら日本人の海軍思想は幼稚だ〜と言つても、或方法を施さねば何時迄經つてもそれを普及させることは六ヶ敷いことであると思つて居ります、幸ひに斯ふ云ふやうな日露戦争があつて、敵の巡洋艦僅か二艘や三艘の爲めに非常な打撃を國民一般に受けた際に、それに對して防禦し得るものを拵へて、それは日本國民が假令ひ僅かでも、一人が一錢の金を出さうとも二錢の金を出さうとも、其出した金に依て現在其處に一つの物が現はれて來て、それが或時期に於て効力を奏したならば、直ちに人の頭に向つて成程斯う云ふ國に於ては海軍思想は大事である、又海運業並にそれと並行する所の海軍の擴張は必要であると思ふことが直ちに證據立てられはしないかと私は思ふのであります、それからもう一つ海上生活を營む者の數と云ふものが直ちにそれが海軍の豫備力にな

る、幸ひに日本は此前の二十七八年の戦ひでも、今度の戦ひでも、機先を制して直ちに畧々海上権は握つて仕舞ひましたけれども、必ず戦ひが何時でもさう行くものでは無いのであります、終局の勝利を得るには幾多の激戦を経て始めて勝利を得るものと認めなければならぬ、其激戦をして或は負け或は勝ち、それを幾度もする中に兵員の数は澤山減る如何に立派な船があらうとも、如何に立派な機械があらうとも、或程度迄熟練した兵員がそれに乗らねば決して船の勢力を充分に發揮することが出来ないのであつて、既に英國の或將軍は、少くも一年は同一の兵員を乗せねば艦の勢力を發揮することは覺束ないと云ふことを言つて居る位に大切であります、さう云ふ兵士が斃れた時に正式の豫備後備の兵員が出て、其後とを今度誰が補ふかと言へば、詰り國民の中に海上の生活を營む者の數が多ければ豫備力となつて直ちに補充して行くことが出来るのであります、今度若し假裝巡洋艦になるべき補助船舶が出来たならば、唯の商船とは違つて幾分か初めから乗る人の觀念も違へば、造る時からの觀念も違つて居つて、戦時になつたならばそれが直ぐ戰闘的行爲をしなければならぬと云ふ觀念が這入るから、只の水夫や火夫を連れて來て軍艦に乗せたのとは違はうと思ひます、さうするとそれが直ぐ海軍の豫備力となる、一方には

一般の海事思想を養成すると同時に、一方には豫備力を養成して行くことになると思は信じて居ります、既にマハンが例を引きまして、英國に於ては機械製造業が發達して居る、さうしてそれに使はれて居る技師あたりは甲鐵艦に移しても、直ちに機關士となつて機關を動かすことが出来る、之が外の國よりも英國が得意であるのだと云ふことを言つて居る、若し此協會の事業が充分に成立つた場合には全くそれと同じことでありますので、實際に於ても利益があり且つ精神上に於ても非常に効力があると私は信じて居ります、今申した通り日本よりも多きは七倍若くは八倍、少くも二倍からの海軍力を有つて居る國が、何十艘と云ふ補助船舶を有すると云ふことは、海國にはどうしても多少に拘はらず補助船舶の必要があると云ふことを證據立て居るのでありますから、尙ほ之に就て御研究下さいましたならば愈々此必要も御承知にならうかと思ひます、何分にも調べて居ります暇がございませぬで、唯だ大體の事に付て申し上げただけでございます、どうぞ其積りで御聽取を願ひます。

義勇艦隊の起原並に任務一斑

海軍少佐 田中耕太郎

今日は海軍協會總裁宮殿下の御成ありまして閣下方の御集りになります所へ私が罷り出まして講話を申し上げることを得ましたのは偏に私の光榮と存じて居る所でございます、就きましては此席に於きまして此義勇艦隊と申し又補助巡洋艦と申して居るもの、縁起とそれから平時戦時に於きまする任務のこの一斑を謹んで申し上げます、たいと思ひます此義勇艦隊と申し或は補助巡洋艦と申して居りまするものは平時に於きましては通商に使用して居りまするが一旦戦争になりまするといふと政府の御用を承りまして戦闘の一方の任務に就くと申す、先づ申せば兵商兼備の組織でございます、此組織が出来ましたことの起りを尋ねて見ますと是はナカク古いことですが歐羅巴の歴史では十二世紀から十三世紀丁度今から七百年六百年の昔であります、其頃歐羅巴の通商の中心は何處であつたかと申しますると地中海であります、其頃地中海の通商の盛んなこと、いふものは亞弗利加の北岸及び亞細亞の西岸から歐羅巴沿岸へ掛けまして商船の往來することは餘程多うかつた鹽梅でございます、

是がコロンブスの亞米利が發見と共に一時榮えた、地中海の商業の中心は大西洋に移つたと申すことであります、兎に角義勇艦隊の本の起りは地中海に商業の中心があつた頃に基を起したものでらしく見へて居ります、何分其頃のとでございますからして未だ文化の開けない極く野蠻の時代であります、其頃の海戦の模様即ち海軍の戦争の模様を歴史に依て尋て見まするといふと無論帆前船のことでありますからマルで想像の附かぬやうな有様で全く今日から考へて見ると海賊行爲が行なはれて居つたといふやうなことで交戦國の養ふて居る軍隊のみならず商船までが出て敵國の商船を捕へるといふことがあります、即ち私船であります、正式の軍艦の外に商船が出て敵國の商船を捕へる、是は成るほど其善であります、其利益といふものは随分莫大なものでありますから自然と人文が啓けなければさう云ふことは有り勝ちのこととあります、詰り交戦國のものであればナンでも構はぬ押へるソコデ船が多數を持つて居るものが勝といふ有様になつて居りました、それが段々と世の開けるに随ひまして、國際法の戦時海上法が發達して參りまして交戦國の軍艦同志が、戦時に商船を押へることは宜いが私船を以て互に商船の押合ひは止めやうと云ふことになりました、それが段々發達しまして終に千八百五十六年の巴里宣言と云ふもの

になりまして是から將來の海戦には私人の所有して居る船を以て敵國の船舶を抑へることは止めやうといふ宣言をして、それに各國が加入することになりました、コウ云ふ有様に私船の拿捕と云ふのが發達して、今日の義勇艦隊とか補助巡洋艦とか云ふものになつたらしいと思ひます。

歐羅巴では先づ斯う云ふ風な有様でありますが我國に於きましても随分斯う云ふためしが無かつたてはありませぬ、それは丁度近頃小笠原子爵が著述されました帝國海上權力史論といふ本が出来ました、それを見まするといふと能く書いてあります、が足利の末葉と思ひます、其時に諸國の國守が皆それ／＼の船を造つて朝鮮との貿易を開いたことが見えて居ります、其後降りまして徳川幕府にありまして御朱印船といふものがあります、其頃に幕府の命を受けて船を造りました諸侯の中には島津家を初めとしまして鍋島家細川家それから松浦家本多家龜井家斯う云ふ諸侯が見へて居りますが、是等の諸侯が船を造られたと云ふのは鎖國の御制度を重んずるも外國貿易と云ふものは随分利益があるといふことを認めまして、それで之れに適する船を造られました、船を私費にて造る代りに外國貿易を許される、禁じてある者を許すといふことでありますから前記の諸侯に對する一種のモノポリー（特許）になつ

て居りますが船は自費で造らねばならぬ其代り利益の有る貿易に許すといふことであります、其頃の航路なんかも精しく此本に見へて居ります、之を見ますと云ふと我國にもチャンと今日の法に適つたものが昔あつたのであります、詰り今日の造船奨励法航海奨励法に丁度ソックリ當つて居るかと考へるのでございます、シテ其頃の外國即ち朝鮮や支那征伐となれば此等の船を徵發して運兵船にもし軍船にもしたのです日本帝國の昔の歴史に於ても歐羅巴に於けると同様に是だけの事柄があるのであります。

ソコで今申上げました通りに義勇艦隊と云ふものは詰り私船が發達して今日の有様になつたと云ふ解釋を下します中にも、具體的に義勇艦隊の出來したのは是は幸佛戰爭に於て初まつたもので千八百七十年の幸佛戰爭でございます、是は分つて居ます通り獨逸の連戦連捷で佛蘭西は大敗をして局を結んだことであります、一ツ餘り注意を惹かざるの事實があります、と申しますのは此時の獨佛の海軍戦争はマールで事柄が違つて居ります、案外なもので佛蘭西が獨逸に勝つて居る譯であります、といふのは其時の佛蘭西の海軍と獨逸の海軍とを比べますると獨逸の海軍は佛蘭西に敵することは逆も出來ませぬ、それで時の佛國海軍大臣は軍艦に陸戦隊を乗せて

さうして獨逸の海岸を示威運動を試みやうと云ふの計畫を立てました、所が何分陸戦が連戦連敗をしましてイロ／＼手違をしましてその影響が海軍に及ぼしまして折角此海軍大臣の計畫も沮喪して實行することが出来ませぬので、却て佛蘭西の軍艦は一步も自分の國境から外へ出るなと云ふやうな退嬰の主義を執つて居ります、併し其中只つた五六隻のホルベツト、極く小さな今時の砲艦位のものであります、それを放ちまして獨逸の通商を妨害しやうと云ふ策に出でました、是が見事に成效しまして佛蘭西の其五六隻のホルベツトが獨逸の商船を押へたと云ふものは實に非常な數ださうであります、ソコで獨逸の海上貿易が止まつて仕舞つたと云ふことでもあります、是迄到る處に在つた獨逸の商船旗がモウ世界の海面に翻らぬと云ふ憐れな有様になつたさうであります、尤も其中只一つハンブルヒ紐育等を通つて居ります今でも航路がありますが、其航路だけは獨逸の船で維持して居つた、それはナゼかと申しますると速力か其船に限りまして非常に速く佛蘭西のホルベツトが追ひ付くことが出来なかつたと云ふことであります、ソコで軍艦にしましては商船にしましては速力といふものは絶対に必要なものであるといふことは此時分から分つて居ります、此點に付きまして或英吉利の歴史家の算盤に依りますると此時に獨逸が被

りました損害の高は一日に二十萬磅即ち今の算用に直してザツと二百萬圓、一日に二百萬圓づゝ獨逸の取引が損耗を受けた譯であります、其他佛蘭西の爲に取られた船が全戦役中に八十隻以上に上りました、此直接損害が四十二萬磅即ちザツト四百二十萬圓であります、最も此中には少し算盤の間違つて居るかも知れませぬ、是は今から三十年以上の昔の話であります、今時八十隻の商船を取られました時にはドンな詰らぬ船でも逆も是位の高では上らぬものであります、先づ是位ヒドク獨逸が陸に於ては見事の勝利を得ましたに拘らず海では通商を妨害されたか爲に苦痛を受けて居つたのであります、ソコで獨逸の聯邦の中で一番苦痛を感じたものは何處かと申しまするとハンブルヒ、ブレーメン、リューベック、にて此北方同盟は全く商賣ばかりで立つて居る國でございます、それは早く事の成行を見て取りまして戦争になると差當り最も自分等の頭に關係するといふことを見て取りまして、宣戰の公布がありますと直ぐと一の宣言を致しまして、幸漏西國王は北方獨逸同盟の名前でやりました、其宣言はどうかと云ふと成るべく獨逸同盟國の軍艦では敵國の商船を押へない主義にしやう、即ち中立國の船舶を押へるやうな時でなければ押へない、中立國の船舶は容易に押へることは出来ぬ餘程の間違がなければ押へること

が出来ぬものであります、其船舶を押へるやうな萬已を得ぬ場合に適合する様などを佛國の商船が致すならば押へやう、此以外は押へないといふ宣言であります、此宣言を能く翫味して見ますと誠に消極的のものであります、詰り言つて見ますと自分の方からして押へ無いからオマイの方も押へて呉れるなといふことであります、實に消極的の話であります、是は其當時の獨逸の海軍の有様は致方がなかつたのであります、併し開戦になると直ぐ獨逸の商船が前申しました通り佛蘭西のホルベットから押へられました其爲に受けたる所の苦痛は逆も忍び切れない、ソコで斯んな手ぬるいことではイカぬと云ふので今度はどうかしてホルベットを打壞すだけの工風をしなければならぬと云ふ考が浮きました、所が船が無い、其中に有志家が出て自分の持て居る商船を續々寄附いたしました、献納して参りました、其献納して参りました物の一番堅牢な物を選びまして敵對行爲即ち敵と交戦するだけの強さのものだけを選びまして、それにプロシヤの海軍からして艦長として一名づゝの海軍士官を乗せまして又其水兵たる者は皆義勇兵から採用致しました、無論兵であります、水夫ぢやない、其組織は全く義勇組織であります、是れが幸に成功しまして其後は餘り押へられたものが無いやうになりました、さうなります

といふと佛蘭西の方では黙つて居りませぬ、是は一旦献納した私船を艦装したのだから私船である、ソコで千八百五十六年の巴里宣言の私船を廢する條約に加盟して居ながらさう云ふことをするのは宣言に牴觸する譯だと云ふ抗議を佛蘭西から持出しました、ソコで其意見を英吉利政府に聽きました所が英吉利の時の外軍大臣グランビル公の返答には義勇艦隊が艦装することは一向宣言の條項に牴觸せぬ、それはさうでございます、誰が見ても明かに分つて居る事實であります、其命令をする者は誰かといふと海軍士官であつて國家を拘束するだけの責任を持つて居る人が乗て居て元は私船であらふが一旦政府に献納して政府の物となつた以上は急に軍艦が殖えたと同じ理窟であります、私船とは大いに趣が違つて居ると云ふことは誰が見ても明かな事實であつて、英吉利外務大臣の返答と云ふものは當然のとであります、先づ此通り獨逸の計畫は時に取りまして最も策の得たるものであります、列國も亦合理のものとして認めまして、是が即ち義勇艦隊が法理的に具體的に成立しました基であります。

各國はそれを見まして成程平時の、通商に従事し一朝事あると直ぐに艦装して戰鬥の或任務に従ふといふ事は實に經濟の策であるといふ事を氣が附きまして皆競うて

此制度を採ることになりました。

さて此義勇艦隊と申したり商船保護と申しますことは其目的の歸する所は詰りどちらでも同じこととありますが苟くも海軍のある國家には必ず此制度が無いものは無いのであります、勿論其國情に依りまして保護制度の趣に多少の相違が御座り升が國家有事の際に方りまして、其國海軍が商船といふものを利用することの急なると急で無いとに依りまする、言換へて見ますれば詰り平素から此商船を待つとの緩急如何に在りといふ事になつて仕舞ひます、例へば或一國て是には巡洋艦が澤山あり速力の迅いのが澤山あるそれで自國の通商を保護するは勿論敵國の通商を妨害する丈けの船も澤山ある、斯う云ふ見込が立つて居る國でありまするとそれは別に平素から保護を加へて厚く商船を遇する必要もありません、之に反して或國の如き國防の主義に第一に陸軍を置く詰り陸軍國と稱する國であります、此陸軍國が大の海軍國を敵として戦ふといふことになると思ふことも出来ぬ、陸軍にも海軍にも同じ丈けの軍艦の數をこちらに備へるといふことは出来ぬ、陸軍にも海軍にも同じ丈けの軍備をしようといふことは國家經濟が許しませぬ、けれ共海軍の方の攻勢を取らぬ日には何時まで経つても敵に致命の傷を被らすことは出来ぬ、戦争が長引くといふ

事があります、さうすると軍艦同士の交戦は捨て、も敵の急所を突くといふには故國の通商を妨害してやらうといふ、之れには強ち軍艦で無くても出来る、商船を武装しますればそれで事は済む譯であります、斯う云ふ國柄でありまするとどうしても當初からそれに向く丈けの商船を蓄へて置かねばならぬ、随つて保護政策が行届いて居る譯であります。

今チヨツと國別で申しますると英國の「キニナード」會社彼阿會社白星會社加奈太太平洋鐵道會社の如き佛國の「メサジエリー、マリチーム」會社に「トランスアトランチック」會社に獨逸の漢堡亞米利加運輸會社北獨逸「ロイド」會社の如き伊國の「ウエロゼ」會社及「ナビガッチョンジエテラレ、イタリヤナ」會社の如き又露國の義勇艦隊及黑海通商汽船會社東亞汽船會社の如きがあり升。

是は先程有地男爵閣下から御話がありました通り國々に依つて違ふと申すのは一會社の中の二つ三つの船を指名して此船は戦時に使うぞといふ契約を立て、居るものもあります、又露西亞の義勇艦隊の如きは一商社を戦時には皆擧げて使うぞといふ契約を立てたのもあります、斯う云ふ風に各國各々違ひます、亞米利加の如きは全く一つの會社を指名しませぬ、一つの特別の法律を設けまして其法律に適合する船は

一視同仁でどれても保護を加へる、又戦時にも採るといふやうな國もあります、總て苟くも海軍ある國に此組織の無い國は一つもありません、此の如く色々澤山なる會社もあり又各國の方法も違ふ中に付きまして一番目立つて兵商兼備の中で、兵と商との割合を比較して見ると、割合に高く兵に拂つて居るといふ國は私の見ました所では一番に露西亞の義勇隊艦だらうと思ひます、勿論何處の國だつて平時より契約して居る筈です、戦時に於て巡洋艦になるといふ事は承知して居ります、それですから同じこととありますが露西亞のやうに露骨に之を平時から義勇艦隊は軍備で御坐るといふ看板を掛けて居る國は無い、又海軍省が之れに干渉して居ります、酷く干渉して居ります、それで、此露西亞の義勇艦隊の事に付きまして申上げるのが外の會社の事を申上げるよりも興味があらうと存じます、チョツと此處に露國の義勇艦隊の縁起を申上げたいと思ひます。

前段に申上げました通り義勇艦隊は獨逸人の發明で獨逸人が苦し紛れに發明して誠に良い發明であつたといふ事ですが、其以前にも隨分露西亞人は此事を企んで居つたのであります、少し以前に湖りました露國の海軍は千八百五十六年のクリミヤの戦争に一頓挫を來し、英佛聯合軍の爲に見事に打破られました、非常に疲弊しま

した、其海軍が頓挫を來しましたに付ては平和後海軍を再興しなければならぬといふ事になり升と其時は丁度帆船前船が廢れまして蒸氣船が出來た時代であります、旁々造船策に於ては各國共に一新紀元を開いた頃であり升からそれならば今後の軍艦たるものはどう云ふ型にすれば宜いかといふ詮議になりましたが、逆も海上に雄飛する大海軍國と匹敵する丈けの軍艦數を造ることは出來ない、それならば海軍の任務は唯だ自國の海岸を守れば宜いそれ丈けに止めて敢てそれより以上を望まぬといふ事に極りましたクリミヤ戦争の後二十年間は露西亞の造船計畫は一種特別の海防甲鐵艦のみを建造し來りました、隨分斯う云ふ種類の軍艦が今でも残つて居ります、然らば海軍は飽くまで引込主義かと申しますればさうでは無いそれは公海に於て敵の通商を脅かしてやろうと申す念は此時ちやんと計畫されて居りました是れが海軍の攻勢でありまして兼ての露國の企てであります、此等の議論は露西亞の海軍の歴史なり又は海軍士官が新聞雜誌を籍りて明々地に此事を申して居ります、間も無く千八百七十七年の露土戦争となりましたが是は別に海軍にとりたて、申上げることもありません、サンステファの媾和條約となりましたが、此時は丁度英吉利が干渉を試みました、其強大なる艦隊をば土耳其の海峡に入る、といふ事になりました、そこ

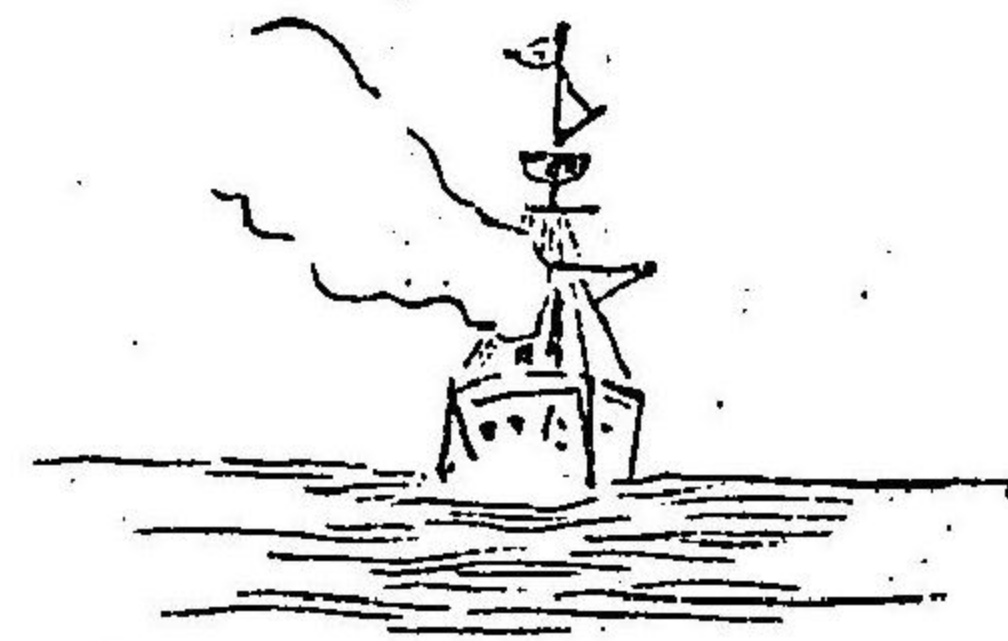
て是まで露西亞が連戦連捷して随分苦しい陸戦を經まして戦勝の美果を收めないことになりまして、此時ほど露西亞の人心を激昂せしめたことは此迄の歴史に於て餘り見ないといふことであります、此人心の激昂が又非常に變つた所に向つて發したものでありまして其時黒海に於ける兵備と申さば全くありませず銃砲にも不足を感じました、迎も海上英吉利の大敵に當ることは出来ぬことは分り切つた話であります、それにどうしたものか國民の輿論は不思議なものでせめては兼ての計畫の實行に向つて通商を妨害しやうぢや無いかといふ事になりました丁度李佛戰爭の時に於けると同じ轍に行きました、非常に憤慨した餘りに何でも早く義勇艦隊を組織せねばいかぬといふ所で、船を献上したいが船が無い然らば寄附金を募らふと申すとなり別に政府から奨励した譯でもありませんがモスクワにありました帝國通商航海保護協會詰り日本の海事協會のやうなものであります、此協會が率先して首唱となりまして方法を立てまして趣意書を作りまして全國に配りましたが大喝采を以て全國の人々之れを迎へました、其金の集まることは實に迅かつたと申すことであります就ては取敢へず事務所をモスクワに置きまして時の皇太子アレキサンドル大公、(先帝であります)を總裁に仰ぎまして段々と事務が膨大するに付きまして遂に

ペテルブルグに事務所を移しましたことであります。そこで愈、形が出来、金も集り、出来るといふ見込が付きまして千八百七十八年の四月二十三日の勅令で義勇艦隊が裁可を得て國家の一つの機關となつたことであります、是が先づ露西亞艦隊の緣起であります、其時に露西亞人の激昂は實に盛んなものと見へまして、其海事協會が發布しました趣意書を見ますと随分激烈の文句も見へて居ます其初年に寄附で集つた金高が三百七十五萬三千五百二十ルブル、詰り日本の今の相場でザツと三百七十五萬圓ばかりであります、是丈金の金が集まれば愈々仕事が出来るといふ事になりました、其中の百六十萬圓を以て取敢へず船を買はうぢや無いかといふ事になつて早速委員を外國に派遣しまして買入れましたのがモスクワ、ペテルブルグ、ロシヤ、といふ三隻であり升、是は今のペテルブルヒ、モスクワとは違ひます、古い前の船であります、百六十萬圓を以て三隻の汽船を買はうといふ事はそれは今から二十六年前のことでありますから或は出来たかも知れませぬが今日ぢやナカ〜六つかしいかも知れませぬ、敵國の通商を妨害するに足る丈の船は今日ではチト六つかしいかも知れませぬ、兎に角其當時は出来たものに違ひない、此計畫が丁度交戦戦役の中に出て来たまだ媾和にならぬ中に此三隻が

旗を揚げまして率、といふ所まで出来ました、所が間もなく講和になつて此義勇艦隊三隻は空しく土耳其に進軍しました陸兵を本國に送還する丈けのよにて戦役に盡す任務でありました、所が其後此義勇艦隊は段々と發達いたしましたして昨年は二十五年の創立記念祭をいたしました、此二十五年の間に露國の東洋經營を其頃はまだ西比利亞鐵道は出来ませぬから一手に引受けたものであります、今では資本金も殖えましたし定款も改正して居ります目下では汽船十三隻を持て居ります、中には随分新規な船もあります、現在ペテルベルグ、スモレンスクは新聞で御存じと信じますが新聞に海賊艦隊と言つて江海から亞非利加の東岸の商船暴しをやつて居る船であります、此二隻の行動に付きましては土耳其海峽の禁を破つたが爲め海賊行爲と目せらるゝのは已を得ぬ是は義勇艦隊其者が悪いのぢや無い當局の露國政治の遣り方が悪いのであり升が兎に角年來の望だけは歪ながらに達して居るとして随分傍の國は迷惑を感ずる話してあります此くの有様にて一八七七、八年の土耳其戰役の間に合はせに造つた義勇艦隊が二十五年間の東方經營と申す平時間の職を盡し今度は又不思議の處で立廻りを働いて居ると申すとを見ますと國家の事業といふものは、何時何處でどう云ふ機能が現はれるものか露國の義勇艦隊を見て分りますして見ますると國

家事業の經營といふものは時機に際しては忽せに出来ぬものであるかと信じます、そこで露西亞といふ國は實に一種の面白い特徴を有する國柄で一難を経る毎に一つづゝ國家事業を勃興させて居ります、クリミア戰爭に負けまして同時に國內の鐵道が勃興しました、クリミア戰爭に負けた紀念が鐵道の勃興になりました、それから千八百七十七年の露土戰爭のアレも干涉の爲に幾分か負けたと言はなければならぬ其結果が義勇艦隊、マア一難を経る毎に一つの紀念をズツと残して居る國であります、此度も亦日露開戦になり、二月九日の海軍の敗報が露都に達すると直ぐに又義捐金募集が生じました、海軍擴張の名の下に盛んに義捐金を募集して居ります、是にも亦此間まで皇太子でありました、ミハイル親王を戴いて總裁といまして居ります、盛んに經營をいたしまして丁度先月の調を申しますると六月の現在金が百六十四萬ルーブルに達して居り氣の速い新聞などは此金でアドミラルマカロフといふ戰闘艦を紀念に造れといふ様な説を持出して居る者もあります、今後露西亞のやつて居ります海軍擴張の義捐金がどの邊に至りますか、是れは刮目して見て居らねばならぬことであります、随つて我帝國に於きましては之に對する義勇艦隊の計畫が今日起りましたのは是は時に取りまして實に時宜に適した處置と私は堅く信じて居り

つづる。(完)



明治三十七年十月十八日印刷
明治三十七年十月二十一日發行

編輯發行
兼印刷者

帝國海事協會

東京市麴町區內幸町一丁目五番地

右代表者

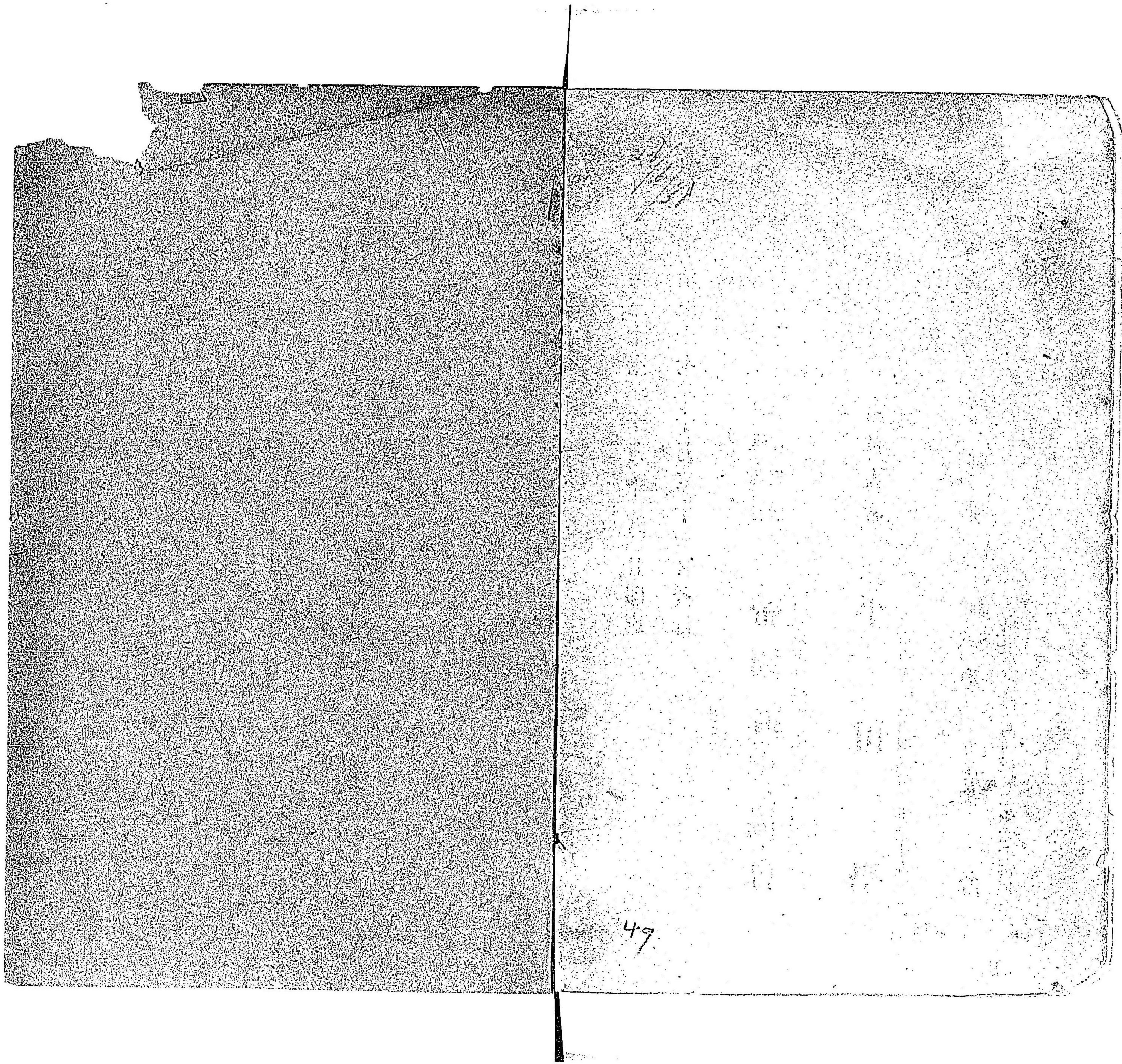
平田學

東京市芝區三田四國町二番地十七號

印刷所

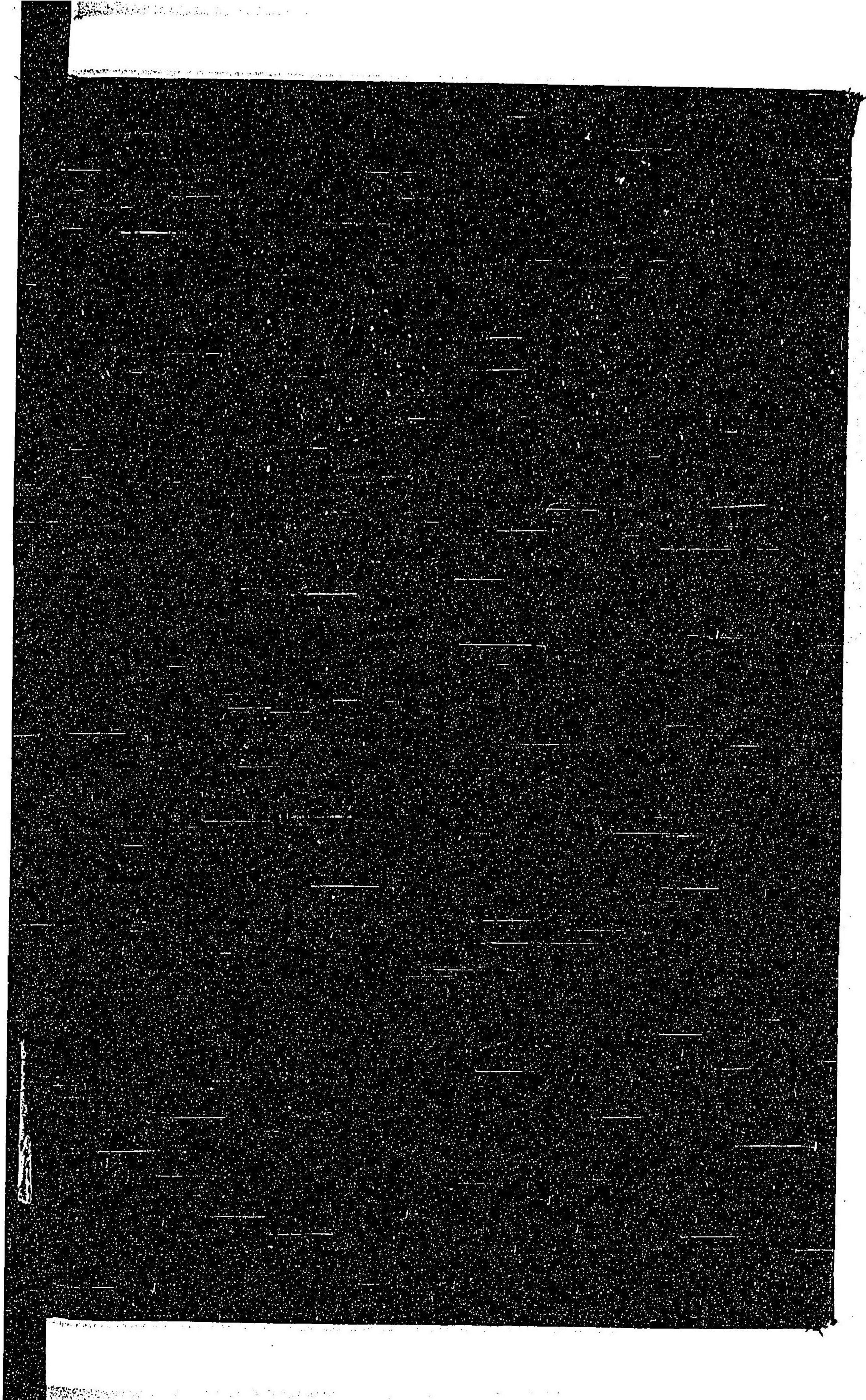
株式會社 秀英舍

東京市京橋區西紺屋町二十六七番地



49

94
230





066960-000-9

97-230

海と船

帝国海事協会

M37.10

CDG-0001

